

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第191集

よし たけ
吉 竹 遺 跡

2015

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター



吉竹遺跡 08 調査区全景

平成 20 年 6 月の吉竹遺跡を南東方向からみた全景写真である。遺跡は調査区西側を流れる大宮川をつくる谷地形の入口近くに位置する。調査地点から右手にさかのぼると、さらに牛倉地区の集落が続く。

吉竹遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物遺構が検出されているが、その全期間にわたって継続していたのではなく、断続的な集落形成であったと考えられる。

吉 竹 遺 跡



吉竹遺跡 09 調査区と茶白山

平成 21 年 7 月、旧河道が検出された吉竹遺跡を北方上空からみた全景写真である。付け替え工事の進む大宮川とその背景に茶白山そして新城市街地を遠望する。茶白山東麓には北下遺跡、南麓には柿下遺跡や茶白山古墳群が所在する。周辺は水田地帯となっており、一部には条里制地割も残っている。

吉竹遺跡で検出された旧河道はかつての大宮川である。それは弥生時代から古墳時代の集落地（黒色の堆積層）を削り込んで流下しており、上層の堆積層からは中世や近世の陶器だけでなく縄文土器も出土している。しかしその下には黒色土層が形成されており、氾濫が押し寄せる以前は安定的な緩斜面であったことがわかる。おそらく弥生時代後期の集落もこのような地形に立地したものであったと考えられる。



吉竹遺跡

序

愛知県新城市には、旧石器時代から江戸時代にいたるまで、数多くの遺跡が存在しています。その中でも、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡や墳墓が特に顕著で、この時期に、地域の歴史の大きなうねりがあったものと想像されます。

本書で報告する吉竹遺跡は、数ある集落遺跡の一つですが、比較的狭い範囲に少数の建物遺構が検出されたもので、おそらく大多数の集落遺跡が吉竹遺跡と同様の規模であったのではないかと推察されています。そして一方で石座神社遺跡のように、多数の建物がいくども作り替えられながら継続している集落遺跡が、その近い時期に存在していることも事実であります。地域の歴史の大きなうねりの中身を調べることで、その実態がより明確化されてくるものと期待されます。

当埋蔵文化財センターでは、吉竹遺跡をはじめとする新城市内の遺跡調査を通じて、この地域が有している歴史的な個性の抽出に努めてまいりました。本書はそのささやかな成果の一部に過ぎませんが、他遺跡の報告書とともに多くの方々の目にふれることで、地域の個性がより広く伝わっていくことを祈念するものであります。

そして最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行にいたるまで多大なご理解とご協力をいただいた、新城市牛倉地区の皆様をはじめとする関係各位に感謝申し上げます。

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 伊藤克博

例言

- (1) 本書は、愛知県新城市吉竹に所在する吉竹遺跡（県遺跡番号 760284、県埋文遺跡記号 3SYT）の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は、中日本高速道路株式会社による第二東海自動車道横浜名古屋線建設工事に伴う事前調査で、愛知県教育委員会を通じた委託事業として財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現：公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。
- (3) 発掘調査期間は、平成 20 年 5 月～6 月（平成 20 年度）と平成 21 年 6 月～7 月（平成 21 年度）である。
- (4) 発掘調査面積は平成 20 年度が³350m²、同 21 年度が³250m²である。
- (5) 発掘調査は、平成 20 年度は酒井俊彦（調査研究専門員、現主任専門員）、永井邦仁（調査研究主任）が担当し、国際文化財株式会社の支援を受けた。また平成 21 年度は松田訓（調査研究専門員）、早野浩二（調査研究主任）が担当し、大成エンジニアリング株式会社の支援を受けた。
- (6) 発掘調査から報告書刊行までに、以下の諸機関・個人のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げる。
中日本高速道路株式会社豊川工事事務所・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・新城市教育委員会・新城市高規格道路課・新城市牛倉地区・今泉義一・今泉正治・岩山欣一・梅岡ふみ子・北村和宏・都築暢也・野口哲也（敬称略、個人は五十音順）。
- (7) 本書作成のための整理作業は永井邦仁が担当し、加藤建設株式会社、有限会社写真工房・遊の協力を得た。なお、石製品の石材鑑定は堀木真美子（調査研究専門員）による。
- (8) 整理作業期間は平成 25 年 7 月～平成 25 年 3 月である。
- (9) 本書の編集・執筆は永井邦仁がおこない、一部に鬼頭剛（調査研究専門員）【第 4 章第 1 節】、堀木真美子（同）【第 4 章第 4 節】、早野浩二【第 3 章第 4 節】、株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループと同社・小林克也氏【第 4 章第 2・3 節】の執筆もある。
- (10) 本書で提示した座標数値は、国土交通省で定められた世界測地系における平面直角座標第Ⅶ系（以下、国土座標Ⅶ系と呼ぶ）に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
- (11) 本書で提示する土層説明の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- (12) その他の埋蔵文化財にかかわる学術用語については特に断らない限り『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠した。
- (13) 遺構一覧および遺物一覧のデータは添付 CD-ROM に収録されている。
- (14) 写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4161 / E-mail: doki@maibun.com）
- (15) 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4164）

目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と調査工程	1
第2節 遺跡周辺の地理と歴史的環境	3

第2章 遺構

第1節 基本層序と地形	6
第2節 竪穴建物	9
015SI・045SI・046SI・047SI・071SI・203SI	
第3節 掘立柱建物	18
1001SA～1004SB	
検出遺構一覧	22

第3章 遺物

第1節 竪穴建物跡出土の土器	25
045SI・046SI・047SI・071SI・093SK・203SI	
第2節 土坑・旧河道・包含層出土の土器	28
201NR・検出・トレンチ	
第3節 石器・石製品	28
047SI・071SI・201NR・検出	
第4節 鉄製品	32
047SI・201NR	
出土土器一覧	33

第4章 自然科学分析

第1節 吉竹遺跡と加原遺跡の地下層序と堆積年代	35
第2節 放射性炭素年代測定	41
第3節 樹種同定	44
第4節 蛍光X線分析	47

第5章 考察と総括

第1節 吉竹遺跡における集落の規模と変遷	48
第2節 考古遺物からみた牛倉地区	49
第3節 総括	52
参考文献	52

写真図版 遺構	53
写真図版 遺物	64

抄録	69
----	----

図版・表目次

図 1	愛知県および新城市の位置図	1	表 1	検出遺構一覧 (1)	22
図 2	吉竹遺跡位置図	1	表 2	検出遺構一覧 (2)	23
図 3	吉竹遺跡 08・09 区調査地点	2	表 3	検出遺構一覧 (3)	24
図 4	新東名高速道路関連の遺跡分布図	2	表 4	出土土器一覧 (1)	33
図 5	新城市の豊川右岸における主な弥生時代集落 分布図	3	表 5	出土土器一覧 (2)	34
図 6	吉竹遺跡周辺の遺跡分布図	4	表 6	吉竹遺跡における放射性炭素年代測定結果	38
図 7	牛倉地区関連の中世金石文	5	表 7	加原遺跡 08A 区における放射性炭素年代測 定結果	39
図 8	08・09 区遺構平面図	6	表 8	加原遺跡 08B 区における放射性炭素年代測 定結果	39
図 9	08 区基本土層断面図	7	表 9	測定試料および処理 (1)	41
図 10	09 区基本土層断面図	8	表 10	測定試料および処理 (2)	41
図 11	08 区竪穴建物 015SI 遺構図	10	表 11	放射性炭素年代測定および暦年較正結果 (1)	43
図 12	08 区竪穴建物 045SI 遺構図	11	表 12	放射性炭素年代測定および暦年較正結果 (2)	43
図 13	08 区竪穴建物 046SI 遺構図	12	表 13	吉竹遺跡出土炭化材の樹種同定結果	44
図 14	08・09 区竪穴建物 047SI 遺構図	14			
図 15	08 区竪穴建物 071SI 平面図	15			
図 16	08 区竪穴建物 071SI 土層断面図	16	写真 1	出土鉄製品 X 線画像	32
図 17	09 区竪穴建物 203SI 遺構図	17	写真 2	吉竹遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡 写真	45
図 18	08 区掘立柱列 1001SA 遺構図	18	写真 3	吉竹遺跡出土炭化材の光学顕微鏡写真	46
図 19	08 区掘立柱建物 1002SB 遺構図	19			
図 20	08 区掘立柱建物 1003SB 遺構図	20			
図 21	08 区掘立柱建物 1004SB 遺構図	21			
図 22	出土土器実測図 (045・046・047SI)	26			
図 23	出土土器実測図 (071SI)	27			
図 24	出土土器実測図 (093SK・203SI・201NR)	29			
図 25	出土土器実測図 (08・09 区検出・トレンチ)	30			
図 26	出土石製品実測図 (047・071SI・検出)	31			
図 27	出土鉄製品実測図 (047SI・201NR)	32			
図 28	吉竹遺跡と加原遺跡の位置図	35			
図 29	吉竹遺跡 08 区における深掘実施地点	35			
図 30	吉竹遺跡柱状図	36			
図 31	加原遺跡深掘実施地点	36			
図 32	加原遺跡地点 1 柱状図	37			
図 33	加原遺跡地点 2 柱状図	37			
図 34	放射性炭素年代測定と暦年較正結果	43			
図 35	赤色顔料のスペクトル図	47			
図 36	吉竹遺跡 08・09 区の主要遺構変遷図	48			
図 37	新城市牛倉地区出土の遺物実測図	50			
図 38	北下遺跡の範囲確認調査地点	51			
図 39	新城市牛倉地区の石製小祠模式図	52			

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と調査工程

遺跡の所在 新城市は愛知県東部、一般に東三河地域に区分される豊川流域の市である【図1】。人口約4万7千人（平成26年度）であり、南は豊橋市・豊川市と、北は北設楽郡東栄町・設楽町と接している。市役所のある市街地は豊川に面した平野であるが、旧作手村・鳳来町域は山間部となっている。

吉竹遺跡は新城市牛倉に所在する。牛倉地区は市役所から北北東へ約3kmに位置する大宮川に沿った谷の集落で、遺跡は県道21号豊川新城線から約150m入ったところにある【図2】。ただし遺跡として認知されたのは比較的最近のことで、今次発掘調査地点付近で偶発的に出土した土器【第5章第2節】により、その所在が明るみになった。

第二東海自動車道建設 新城市では、日本道路公団（現・中日本高速道路株式会社）による第二東海自動車道横浜名古屋線（完成後の新東名高速道路）の建設工事が平成10年代に入って本格化した。そのルートが固まってきたところで、新城市教育委員会と愛知県教育委員会によって事業用地内の埋蔵文化財に関する有無確認調査が進められ、結果的には市域で9地点の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の存在が確かめられた【図4】。財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（現・公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、以下県埋文センター）では愛知県教育委員会から委託を受けて平成18・19年度に範囲確認調査を実施して、最終的な調査対象範囲を確定していった。

吉竹遺跡では、平成19年度に愛知県教育委員会が実施した遺跡の有無確認調査後の平成20・21年度に、県埋文センターによる本調査（総計600㎡）を実施した【図3】。

発掘調査体制 県埋文センターでは発掘調査の実施にあたって調査支援体制を設けている。今次発掘調査では平成20年度に（株）国際文化財、平成21年度に（株）大成エンジニアリングの支援を受けて発掘調査業務を遂行した。その人的構成を以下に示す。

【平成20年度】

県埋文センター：調査研究専門員酒井俊彦・
調査研究主任 永井邦仁

（株）国際文化財 現場代理人：定水育久
（一級土木施工管理技師）

同調査補助員：石松直（学芸員）

同測量担当：星野賢一（測量士）

同発掘作業員：中野一徹、新城市内ほか東三河地域在住の約5名



図1 愛知県および新城市の位置図



図2 吉竹遺跡位置図

【平成21年度】

県埋文センター：調査研究専門員 松田訓・調査研究主任 早野浩二

(株)大成エンジニアリング 現場代理人：浅見克己（一級土木施工管理技師）

同調査補助員：蒲明男（学芸員）、同測量担当：太田幸信（測量士）

発掘調査工程 本調査は2年次にわたって2つの調査区で実施した。平成20年度の発掘調査（08区）は5月7日より開始し6月18日に埋め戻しを完了した。調査面積は350㎡ではあったが、竪穴建物5棟などの遺構が比較的濃密に検出され、多くの成果を上げることができた。6月10日には高所作業車による全景撮影、そしてほぼ最終段階の6月15日には牛倉地区を対象とした現地説明会を開催し、55名の見学者に竪穴建物跡や出土遺物を実見していただいた。

次いで平成21年度（09区）は6月23日より開始し7月21日に埋め戻しを完了した。前年度に西接する地点（250㎡）で、大半が近世以降の大宮川旧河道に相当していたために顕著な遺構の検出は少なかった。当該年度は調査区周辺で建設工事が開始されていたが、安全に配慮してラジコンヘリによる空撮も実施することができた。

室内整理調査工程 発掘調査終了後、諸データと出土遺物の整理および報告書作成業務は平成25年度に実施した。接合・復元・実測・トレスなどの遺物整理業務は(株)加藤建設(担当：井戸川勝昭、塩野崎直子)に委託し、遺構図版整理は(株)国際文化財、および写真撮影は(有)写真工房・遊(金子知久)のそれぞれ協力で実施した。この過程で得られた新たなデータを加え、永井と鬼頭剛・堀木真美子(調査研究専門員)が報告書を執筆・編集した。

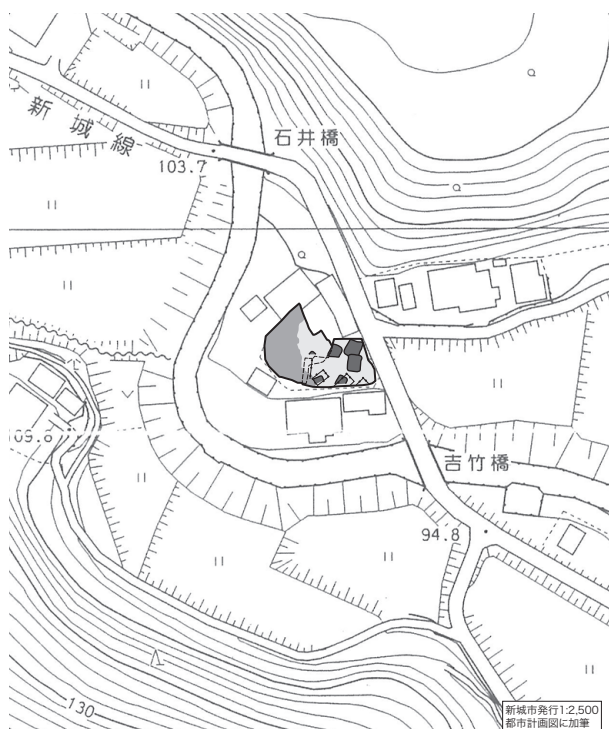


図3 吉竹遺跡08・09区の調査地点

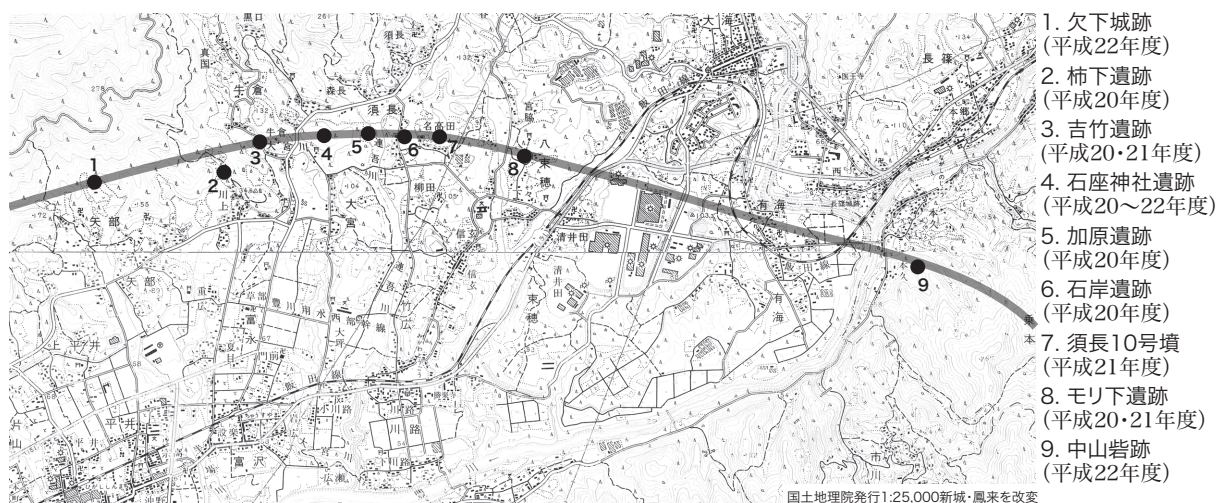


図4 新東名高速道路関連の遺跡分布図

第2節 遺跡周辺の地理と歴史的環境

地理的環境 新城市では、東三河最大の河川である豊川と特にその右岸に発達した河岸段丘が地形的特徴となっている。概ね、標高 50m 等高線の豊川に面する段丘崖から標高 100m 等高線の山地・丘陵裾までが河岸段丘地帯に相当する【図 5】。その段丘面を、中小の豊川支流によって形成される谷が挟り、分断している。段丘は山地側からその段差によって上位・中位・下位に区分されるが、このうち中位段丘が最も広く、市街地・交通路や耕作地などの大半がここに立地している。

吉竹遺跡の所在地は標高は約 99m である。豊川支流の大宮川が石座神社手前で北西に向きを変え、段丘地帯から山地へ分け入る谷地形の左岸入り口に位置している。この谷地形が牛倉地区に相当するが、大宮川は字吉竹を経て字真国にまでさかのぼる。

遺跡直下の地質については地質構造解析【第 4 章第 1 節】を参照されたい。豊川は中央構造線上にありその右岸と左岸では大きく地質構造が異なっている。吉竹遺跡などが立地する右岸は、西三河の矢作川流域から続く花崗岩地帯で、山地はその岩塊を基盤とし、そこからのびる斜面や台地は風化によってできた粘土が主体となっている。ただし吉竹遺跡のような河川際の斜面地は、堆積によって形成された部分が大きく、その基盤層は礫混じりとなっている。

歴史的環境：中世 次に遺跡分布【図 6】をもとに遺跡の歴史的環境を概観する。遺跡名である字吉竹の由来は明らかではないが、牛倉地区や周辺の大宮・川上地区の小地名を俯瞰すると、真国（牛倉地区）、信実（矢部地区）など自然地名というより人名に近い地名があることに注意される。これはおそらく中世に荘園（設楽荘など）として開発・領有された名残であると思われる。当該期における信仰の中心は式内社・石座神社であり、現在でもその祭祀に牛倉地区は周辺各地区とともに関わっている。石座神社からは中世瓦が出土し、嘉吉 3 年（1443）銘の梵鐘（現在は長野県飯田市立石寺に所在、【図 7】）もあることから、神宮寺も整備されていたことが知られる。このような信仰関連遺跡は西に極楽寺跡（8）、南方に広全寺跡（34）と 12～13 世紀創建の寺院の他、吉竹遺跡北方の山中には巨大な鏡石が所在し、元は石座神社の神体であったと推定されている。そしてこれらを取り巻く小地域には中世の遺構・遺物が出土する集落遺跡が楠遺跡（31）や北下遺跡（16）、県埋文センターの発掘調査で掘立柱建物や竪穴状遺構が検出された柿下遺跡（14、[愛知埋文セ 2012]）など多数が確認されている。この大宮川を軸とする遺跡分布が、おそらく先述の荘園域の反映ではないかと考えられる。



図5 新城市の豊川右岸における主な弥生時代集落分布図

吉竹遺跡



1. 欠下城跡 2. 谷下遺跡 3. ハマイバ遺跡 4. 古御堂遺跡 5. 夷城跡 6. 円の平遺跡 7. タイカ遺跡 8. 極楽寺跡 9. 上ノ川遺跡 10. 野辺神社遺跡
11. 東田遺跡 12. 向夏目遺跡 13. 屋川遺跡 14. 柿下遺跡 15. 城山経塚 16. 北下遺跡 17. 類石棒出土地点 18. 松尾遺跡 19. 神田遺跡 20. 増瑞寺屋敷跡
21. 来迎松城跡 22. 大平城跡 23. 川路市場城跡 24. 川路端城跡 25. 岩広城跡 26. 上ノ風呂遺跡 27. 石座神社遺跡 28. 古代瓦出土地点(塚田) 29. 大ノ木遺跡
30. 南貝津遺跡 31. 楠遺跡 32. 断上山10号墳 33. 断上山9号墳 34. 広全寺跡推定地 35. 八剣遺跡 36. 加原遺跡 37. 石岸遺跡 38. 須長10号墳 39. 宮脇遺跡
40. モリ下遺跡 41. 夜燈遺跡 42. 萩平上の段遺跡 43. 加生沢遺跡 44. 萩平遺跡 45. 後藤貝津遺跡

図6 吉竹遺跡周辺の遺跡分布図

歴史的環境：古墳・古代 ところで、当該地域は古墳群が密集していることでも注目される。石座神社周辺に展開する断上山古墳群は、その南端に全長約50mの前方後方墳（10号墳：32）があり、古墳時代前期から続いている。断上山古墳群から連吾川を挟んで東側の丘陵上には須長古墳群があり、県埋文センターが発掘調査した10号墳は全長6.6mの横穴式石室が検出され、出土須恵器から7世紀後半と推定される〔愛知埋文セ2014〕。また吉竹遺跡に最も近い茶臼山古墳群は1～3号墳があつて横穴式石室の一部が残存しており、新城市教育委員会が出土須恵器が保管されている〔愛知埋文セ2012〕。これら古墳群は当該期の生活域の所在地に関わると考えられるが、断上山古墳群は、弥生時代後期～古墳時代前期の大規模な集落遺跡が確認された石座神社遺跡（27、〔愛知埋文セ2015a〕）や南貝津遺跡（30、〔新城市教育委員会1986〕）と密接に関わっているとみられ、須長古墳群は7～9世紀の遺構・遺物が多数検出されている石岸遺跡（37、〔愛知埋文セ2015c〕）との関係が想定されよう。その後8世紀以降の律令制下では、豊川下流の三河国府周辺を中心とする宝飫郡に含まれていた。ただし神田遺跡（19）や大宮地区の塚田では7～8世紀の瓦が出土していることから、松尾神社周辺に瓦葺き建物のあった可能性が高く、地域の中核という位置づけは変わらなかったものと考えられる。これらを基盤とした設楽郡の分置は延喜3年（902）で、10～12世紀の灰釉陶器・山茶碗が多数出土した加原遺跡（36、〔愛知埋文セ2015b〕）はこの歴史的事象に対応するものであろう。

歴史的環境：弥生時代 新城市域における発掘調査で、中世とともに多数の事例が確認されるのが弥生時代である。特に弥生時代後期に集中する傾向があり、先述した断上山古墳群を築造する社会が成立する過程を知るうえで重要な成果があがっている。県埋文センターが1980～90年代に発掘調査した諏訪遺跡や島田陣屋遺跡では、弥生時代中期の遺構がわずかしこ検出されないのに対して、後期になると竪穴建物による集落が展開する。これ以外にも新城市教育委員会が発掘調査した上ノ川遺跡〔新城市教育委員会1999〕や南貝津遺跡、本報告とともに公開される石座神社遺跡やモリ下遺跡（40〔愛知埋文セ2015d〕）の調査成果は、今後当該地域の歴史を復元するための比較検討の基礎資料として、さらに重要度が増すであろう。

歴史的環境：縄文・旧石器時代 大宮川流域では大ノ木遺跡（29）が夏目邦次郎氏によって明治時代末に発見されて以来、1948年と1992年の発掘調査を経て、縄文時代後・晩期を中心とし一部前期後葉の土器も出土する遺跡として認識されている。久永春男氏は、当該遺跡から出土した櫛描文土器で縄文時代晩期前葉の標識「大宮式」を設定している。この他にも、新城市街地西方の段丘に立地する東平遺跡で縄文時代中期、観音前遺跡で縄文時代早期のそれぞれ竪穴建物が検出されているが、石座神社遺跡では縄文時代中期の竪穴建物や陥し穴遺構が検出され、大宮川流域の段丘上における縄文時代の様相も明らかになりつつある。さらに萩平遺跡（44）では、旧石器時代から縄文時代草創期を中心とする遺跡として1960年代からの発掘調査が成果を挙げしており、縄文時代早期の押型文土器が多数出土している。また旧石器時代の遺跡が豊富な点も当該地域の特徴である。豊川右岸の高位段丘では、萩平遺跡や萩平上ノ段遺跡（42）などで後期旧石器時代のナイフ形石器が出土しているほか、加生沢遺跡（43）の大型石器は愛知県内最古という評価もある。

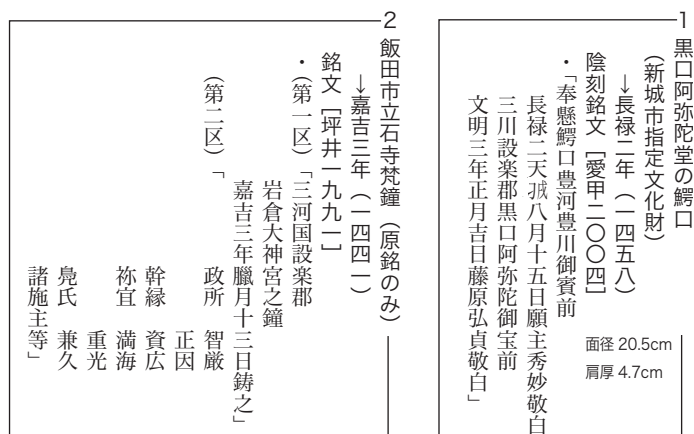
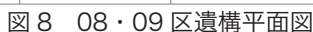


図7 牛倉地区関連の中世金石文

第1節 基本層序と地形

基本層序 発掘調査地点は08・09区ともに畑として耕作されており、前者が一段高く大宮川寄りの後者が低くなっていた。さらに08区の中でも上下2段にわたって段切り造成が行われているため046SI・047SIの検出位置はそれ以外のものより上位の平場となっているほか、071SIはその一部が上位平場にかかっており、造成前は斜面地に構築されたかなり深い遺構であったことが判明した。その地層は概念化すると(1)表土(耕作土・同床土)、(2)弥生時代～中世の遺物包含層、(3)段丘を構成する粘土質の基盤層の3層である。08区調査区壁面セクション図【図9】にて照合すると(1)が1～3層、(2)が4層、(3)が8～11、25・29層である。ただし同調査区東壁を参照すると、特にその南端では(3)がいくつかに分層できる箇所を見出すことができる。これは川寄りになるとその浸食と堆積によって形成された地層が基盤層となっていることを示している。当該調査区ではその表層で遺物が出土する範囲



のみを 016SX として包含層の一部として認識したが、その西方延長となる 09 区ではその範囲が拡大して最終的に旧河道 201NR として認識されることとなった。

08 区 016SX 調査区南壁に沿って西端から東端まで帯状に検出された遺構で、当該調査区内では南側への緩い落ち込み状の堆積でしか認識できなかったため不明遺構としたが、09 区の調査で傾斜地形 201NR（後述）が検出されたことによってその延長であることが判明した。016SX は幅 2.0 ～ 2.4m の帯状部分とその西端で北側へ広がっている。その堆積層は細粒砂混じりの灰黄褐色シルトで、層厚は約 20cm にすぎない。そのため堅穴建物との先後関係が曖昧であったが、調査区南壁での観察によると堅穴建物 015SI・045SI の上を覆っていることが判明した。さらに掘立柱建物を構成するピットのいくつかは同層下で検出されている。したがってその堆積は古墳時代中期以降の比較的新しい段階と考えられ、201NR 堆積層との対応関係から推測して近世以降の耕作地化がなされた頃の層と考えられる。

09 区 201NR 大宮川旧河道に伴う傾斜地形である。その範囲は 09 区の大半と 08 区南西端を占めており、上端ラインは 09 区北端から入り南西から南へとその方位を変えながら下っている。このカーブは現在の大宮川とほぼ同じであり、左岸の耕作地化や護岸工事以前の河岸の状況を示している。

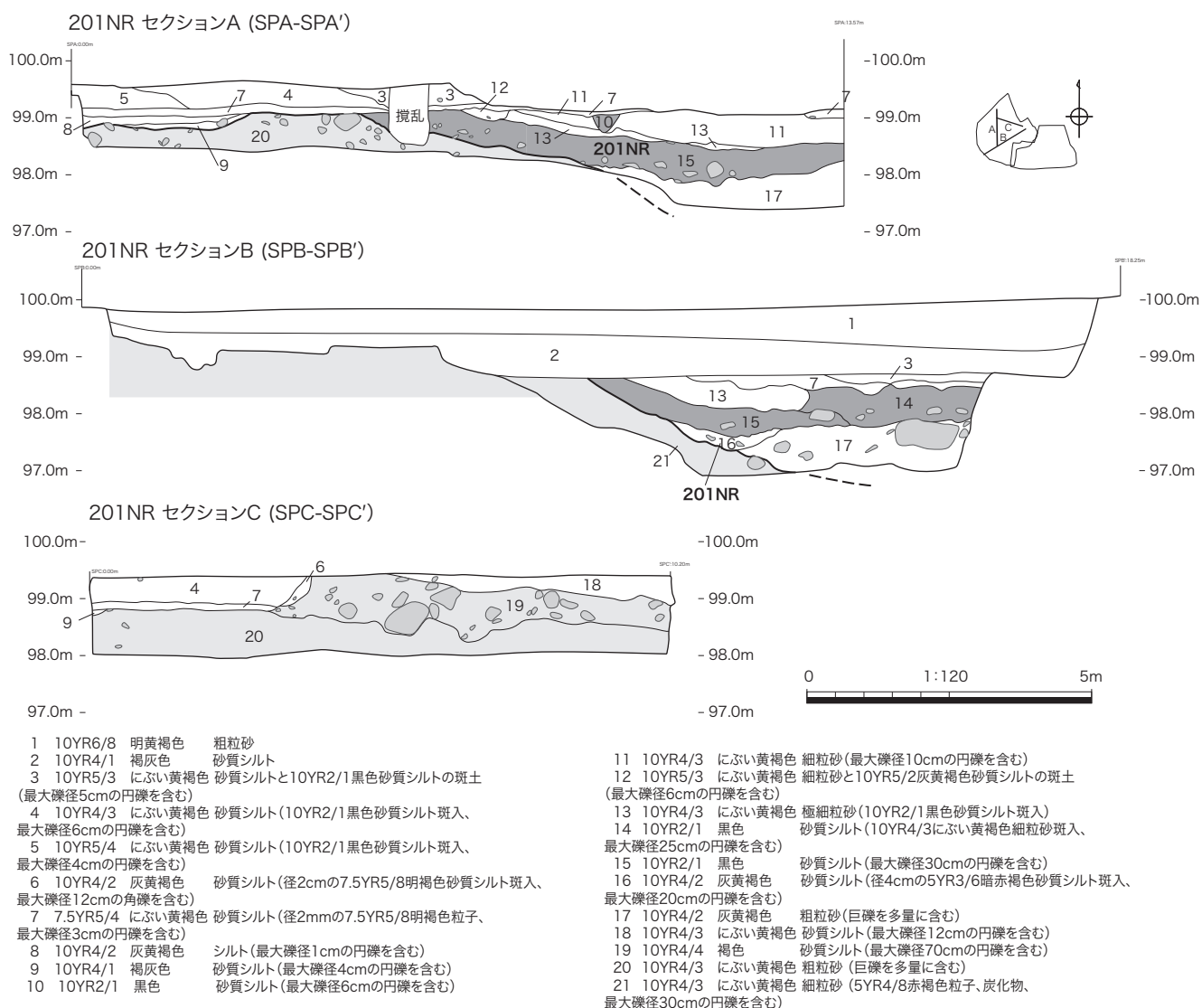


図10 09区基本土層断面図

堆積状況は、セクション B【図 10】を参照すると、1・2 層は近現代の耕作土であり、旧河道堆積の上位を削平している。同様にセクション A【図 10】では、斑土状に混じった黄褐色シルトと黒色シルトが 3～5 層でみられ、その下位には礫混じりの黄褐色砂質シルト（7 層）がほぼ全域で確認でき、その下端がほぼ水平となっていることから、これらの層が耕作地となっていた近代以降のものであると推測される。セクション A の 7 層は 08 区西壁の 14 層と標高も近く、08 区 016SX がこれに相当すると考えられることから、両調査区に広がっているとみられる。以上の層に対して下位層が地形に伴う自然堆積となり、大きく 3 層に区分される。すなわち上層（11・13 層）は円礫混じりの細粒砂層、中層（14・15）は巨礫を含む黒色土層、下層（16・17 層）は巨礫が多い粗粒砂層である。その状況から、激しい水流が伴う河川堆積（下層）が終わった後にその上位が黒ボク化し中層となる。しかしその後再び河川堆積が当該地点に及んで上層が形成されたものと考えられる。問題はそれぞれの時期であるが、下層からは磨製石斧、中層では古墳時代前期の土師器、上層では土師器に加えて中世の陶器も出土している。中層の黒色土はほぼ同一標高の地山面で検出された 09 区 203SI などの竪穴建物の埋土とも共通しており、当該層の形成が概ね弥生時代から古墳時代にかけて進化したと考えることができる。したがって下層はその直前、上層は中世～近世と考えられる。

第 2 節 竪穴建物

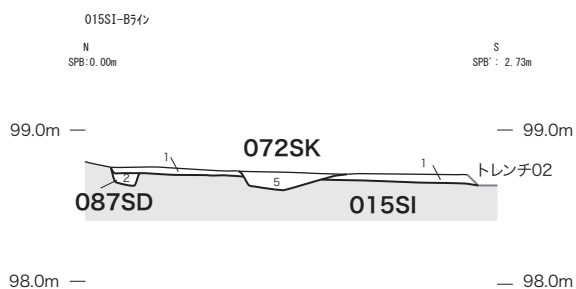
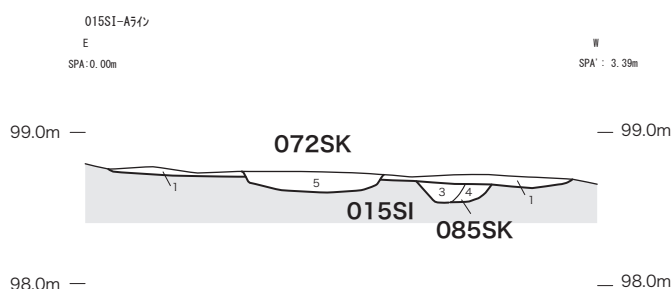
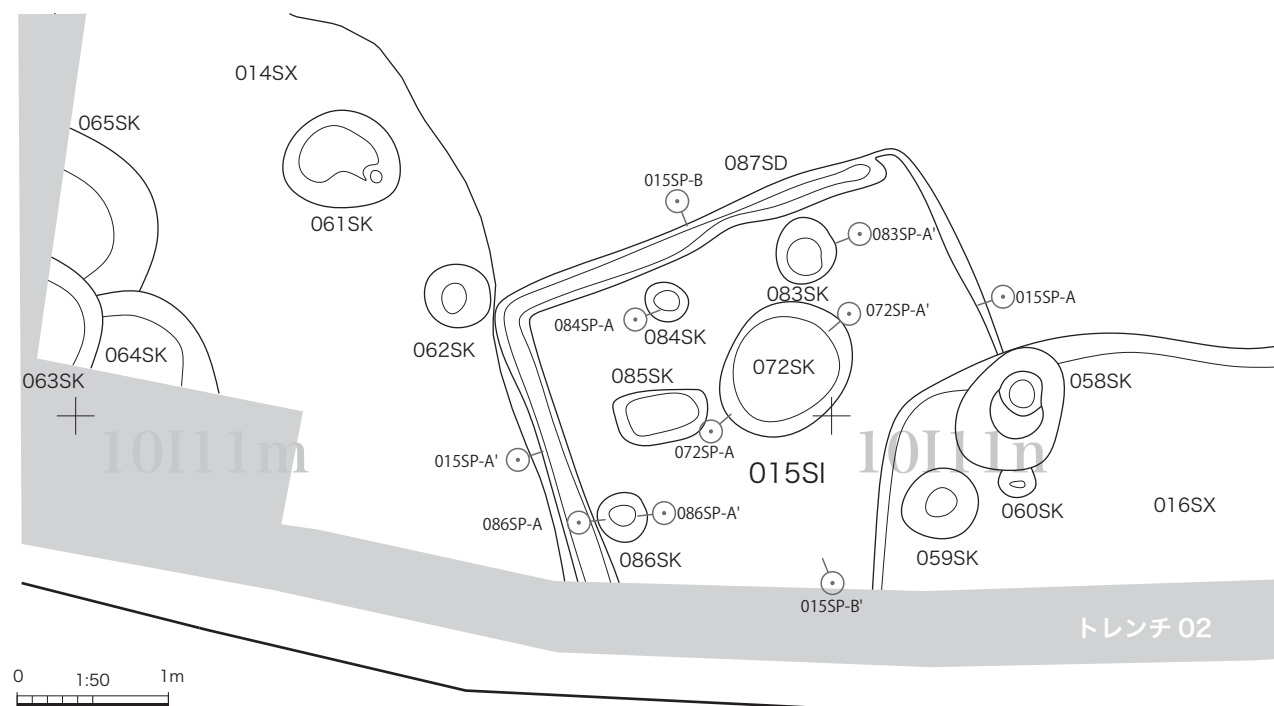
08 区 015SI 調査区南壁沿いのトレンチ 02 にかかって検出された竪穴建物である。全長の判明する北辺長は約 3.0m で、調査区南壁にもその続きがみえているので（3.3m 以上）、平面形は長方形になる。主軸方位はグリッド北から西へ 21° 振れている。北辺と西辺にそって壁溝（087SD）が確認されておりその幅 20cm、深さ 7cm である。東辺壁溝は未検出であるが、そもそも 015SI はほぼ貼床面のレベルにて検出されているため、本来なかったものかどうか不明である。土層もそれを裏付けていて、1 層が貼床層に相当し、それを掘り込んで炉穴（5 層：072SK）がつくられている。072SK は、015SI と同時に検出された直径 43cm 最大深度 23cm のほぼ正円形の土坑で、皿状を呈する断面や 015SI 内での位置に着目すると、炭化物や焼土の大量出土はなかったものの、後述する竪穴建物 045SI の状況を参照することで当該遺構が 015SI 付属の炉穴であると結論づけられる。

その一方で、床面で明確な支柱穴は検出できず、検出された土坑はいずれも浅い皿状の凹みであった。また顕著な出土遺物もなく土師質土器の小片のみであった。これは遺構残存状況によるものといえる。他の竪穴建物遺構との比較に当該遺構は弥生時代～古墳時代前期のものと考えられる。

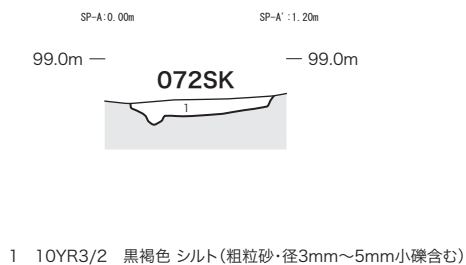
08 区 045SI 015SI の東方約 4.0m に位置し、それと同様に調査区南壁（トレンチ 02）にかかって検出された竪穴建物である。全長の判明するのは北東辺でその長さは約 3.0m で、平面形は長方形になると推定される。主軸方向はグリッド北から東へ 30° 振れている。西辺半ばから北・東辺に沿って壁溝（076SD）が確認されており、その幅 23cm、深さ 6cm である。検出状況は 015SI に近いが、当該遺構では床面より上位の埋土（1 層）が厚さ 7cm で確認されている。床面は 2 層上面で、当該遺構に関しても言えば壁溝（4 層）や炉穴（078SK：5 層）も同位にて検出されている。078SK は長軸 90cm の隅丸方形で、焼土が混じっていることから炉穴と判断された。その一方で支柱穴と特定できる土坑は検出されなかった。

遺物は 1 層から土師器高杯（E-1・2）、甕（E-3）が出土し、炉穴 078SK から若干の土師器小片が出土した。このことから当該遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期と推定される。

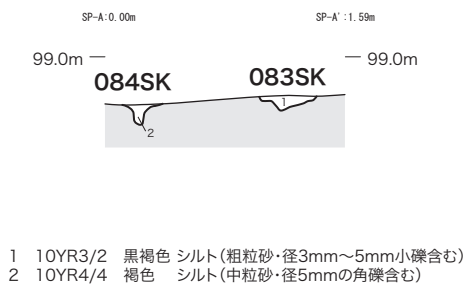
08 区 046SI 調査区北端で検出された竪穴建物である。遺構の中央部に大きな攪乱が入っている他、楕円形の土坑（089SK）も掘り込まれている。046SI は南側で 071SI と重複しておりこれに後続する。



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト(細粒砂・径5mmの礫混じる。015SI埋土)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト(中粒砂・径5mmの礫混じる。087SD埋土)
- 3 10YR3/2 黒褐色 シルト(中粒砂・径5cmの礫混じる。085SK埋土)
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト(中粒砂含む。085SK埋土)
- 5 10YR2/3 黒褐色 シルト(粗粒砂・径3mm～5mm小礫含む)



- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト(粗粒砂・径3mm～5mm小礫含む)



- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト(粗粒砂・径3mm～5mm小礫含む)
- 2 10YR4/4 褐色 シルト(中粒砂・径5mmの角礫含む)



- 1 10YR4/4 褐色 シルト(中粒砂・径5mmの角礫含む)

図 11 08 区竪穴建物 015SI 遺構図



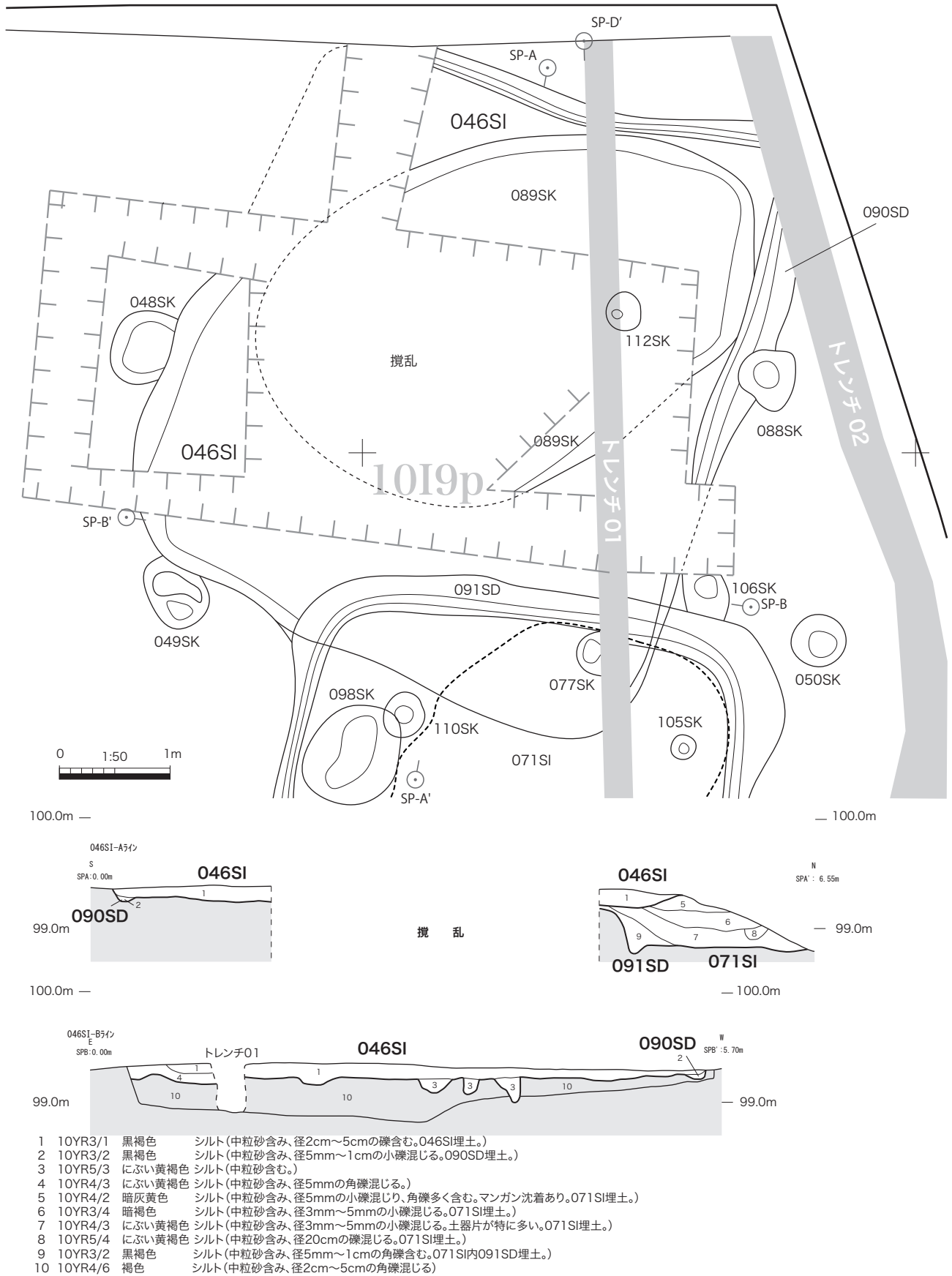


図13 08区竪穴建物046SI遺構図

部分的であるが、各辺が検出されているので、長軸約5.5m、短軸4.9mの隅丸長方形であることが判明する。主軸方位はグリッド北から東へ20°振れている。壁溝(090SD)は北・東辺で検出され、幅20cm、深さ4cmである。それ以外の床面施設は攪乱による滅失部分が大きく、検出できなかった。土層はトレンチ01によると地山面まで埋土(1層)が堆積しており地山上面が床面となろう。1層下位には壁溝(2層、090SD)があり、トレンチ01南端では071SIとの関係は明瞭である。断面は全体に皿状を呈し壁は緩傾斜で立ち上がっている。

遺物の出土状況は特に集中域がないものの、壺(10・13)、甕(11)は残存状況も良いことから、当該遺構に直接関わる遺物とみられる。それ以外には土師器高杯などが小片で出土している。これらの遺物の時期は古墳時代前期末である。

08区・09区047SI 08区046SIの西隣に位置し、09年調査区に一部がかかる堅穴建物である。段切りによって南辺はほぼ滅失しているが、西・北辺はほぼ全長が検出されており、西辺長は4.2m、北辺長は3.8mで、平面形は長方形になる。主軸方位はグリッド北から25°東へ振れている。壁溝(097SD・107SD)は北辺と東辺の一部で検出されており、幅21cm、深さ9cmである。

土層は2本のベルトによって確認したが、概ね地山上面を床面とし、埋土は1～4層で厚さ約20cmである。主柱穴と考えられる土坑は検出されていない。なお、ベルトにかかって047SIのほぼ中央にて土坑096SKが検出されおり、しかもその下層(7層)では焼土が混じっている。しかしながら当該遺構は047SI埋土上位から掘り込まれていることから、047SIに伴う炉穴と見なすことはできない。また、047SI埋土の中央部では多数の円礫が密集した状態で出土しており【写真図版4】、その密度は周辺部分に比べて圧倒的となっている。土層断面A-A'ラインを参照すれば、一旦埋没したものを再掘削後に堆積したとみられる2層が埋土の大半を占めており、円礫の出土分布も加味すると、その範囲は南北に細長い楕円形になるとみられる。したがって元々の埋土である3・4層との間に時間差のあることは注意される。

出土遺物は土器・石製品・鉄鏃がある。土器は埋土の厚さに対して比較的小片中心である。しかも再掘削後に堆積した円礫混じりの層(2層)に大半が含まれている。その土器群は、高杯・壺などの弥生時代後期の土器である。一方、出土位置から3・4層に該当するとみられるのは、土器では台状土製品(E-31)くらいであるが、石製品は、石製紡錘車・極小打製石斧・剥片の各1点が礫群から外れた位置でまとまって出土している。層位的にはこれらのわずかな遺物が047SI機能時点により関係しているといえるが、2層の土器群も極端に時期が離れているわけではなさそうである。なお、出土位置は不明確ながら同埋土中からは無茎の三角形鉄鏃1点(M-1)も出土している。

また、当該遺構からは炭化材も採取し、炭素年代測定と樹種同定を実施した【第4章第2・3節】。結果、暦年較正を経た年代は1世紀中頃～3世紀初頭(最終形成年輪なしのため古い年代が得られる)で、樹種はコナラ属コナラ節と判明した。

08区071SI 08区調査区中央で検出された堅穴建物である。斜面地の段切りに一部がかかり、上位と下位それぞれの平場で検出されている。上位の平場では堅穴建物046SIと重複している。両者の遺構掘削を同時に進めたため、重複部分は046SIの調査後に着手しており、その際093SKという仮遺構番号を付している(遺物取り上げにのみ使用)。

結果、全形が検出されており、平面形は隅丸長方形で、短軸となる北(南)辺長は4.3m、長軸の東(西)辺長は5.5mである。方位はグリッド北から東へ3°振れている。壁溝(091SD)は全周することが確認され、幅21～30cm、深さ8cmである。床面では大小の土坑が検出されているが、主柱穴と想定されるのは110SK・105SK・111SK・109SKである。直径18～40cm、床面からの深さ29～53cmである。堆積土層【図16】は、2層が埋土、3層が貼床、4層が壁溝に相当する。特に土層断面B-B'ラ

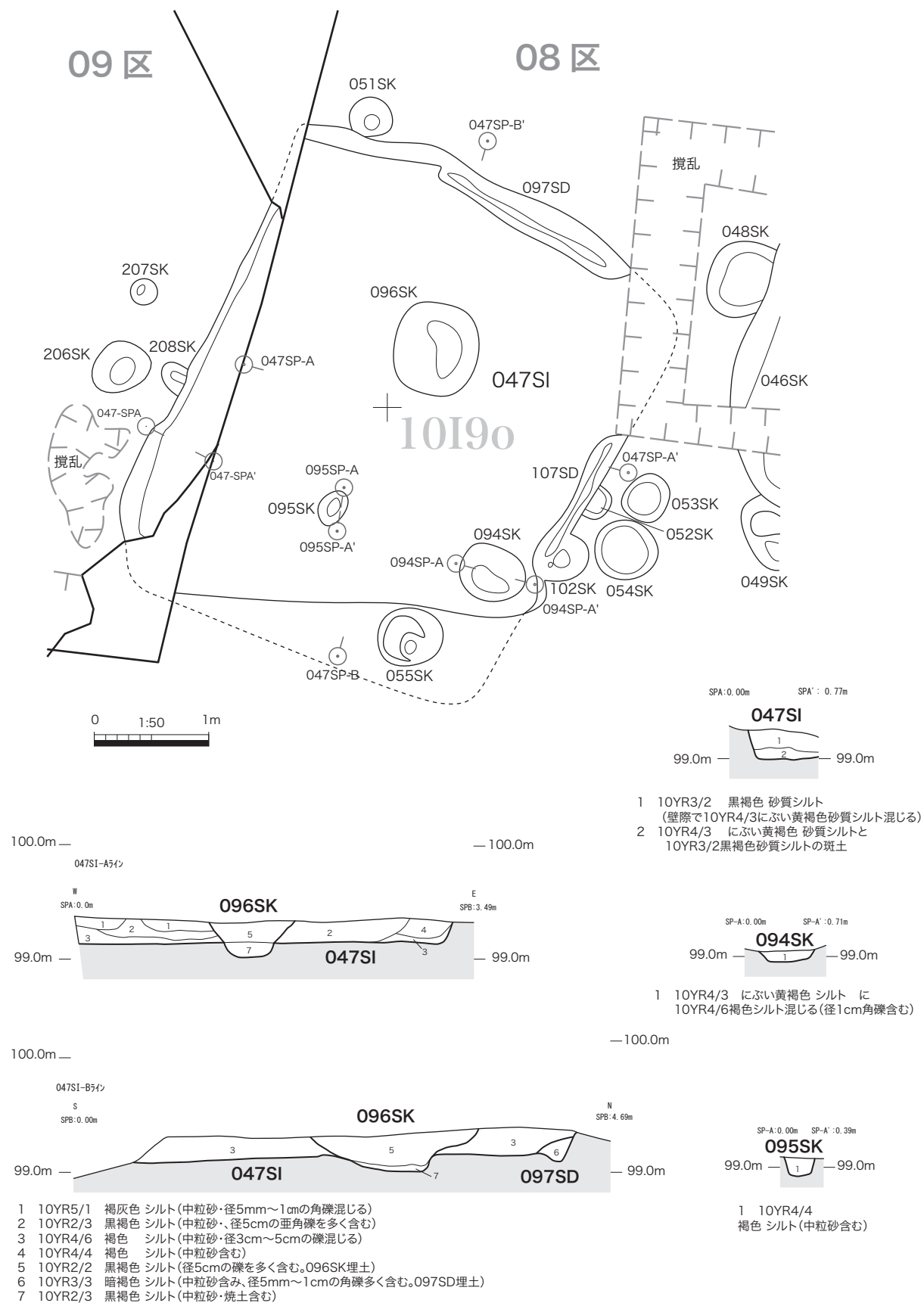


図 14 08・09 区竪穴建物 047SI 遺構図

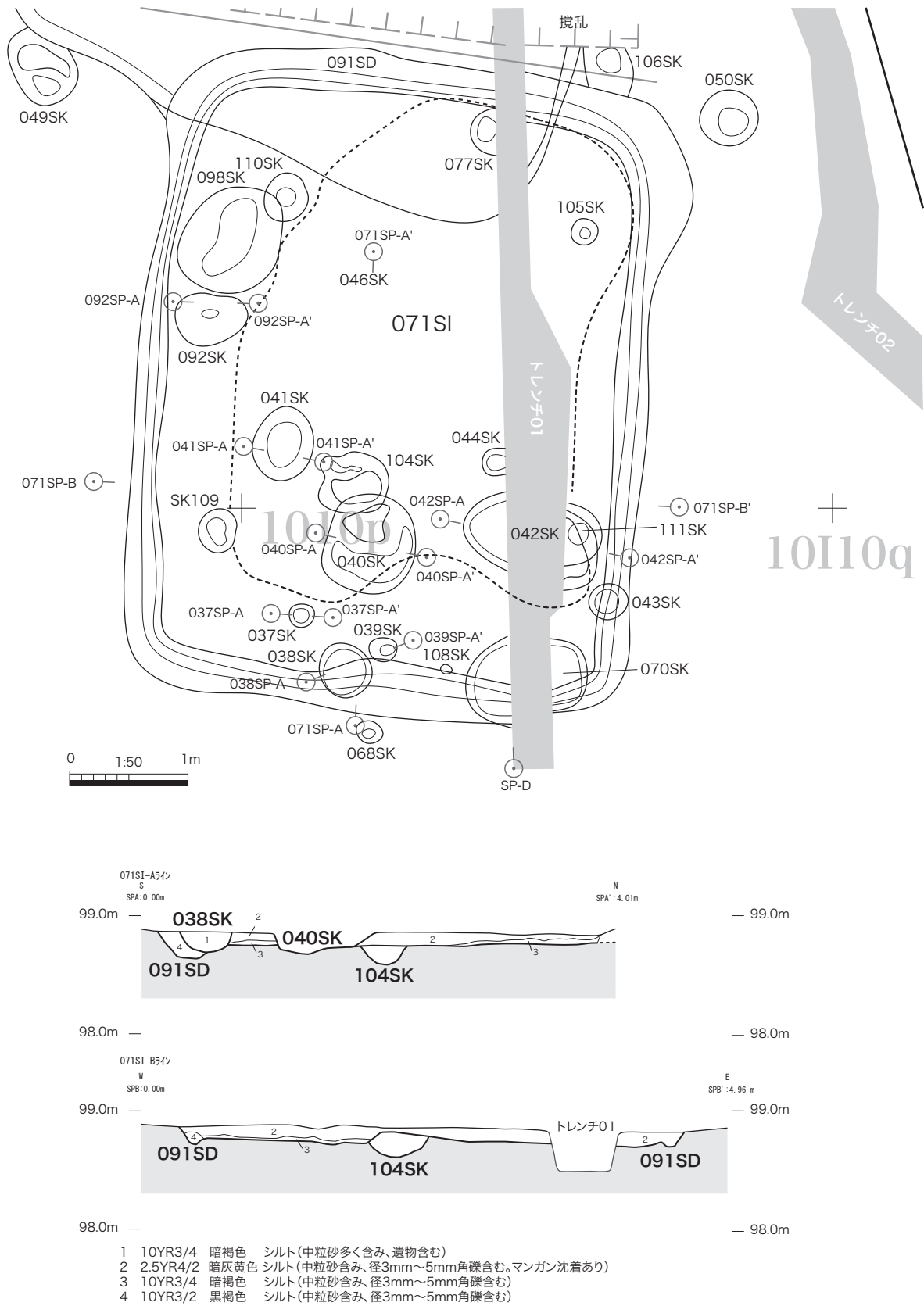


図15 08区竪穴建物071SI平面図

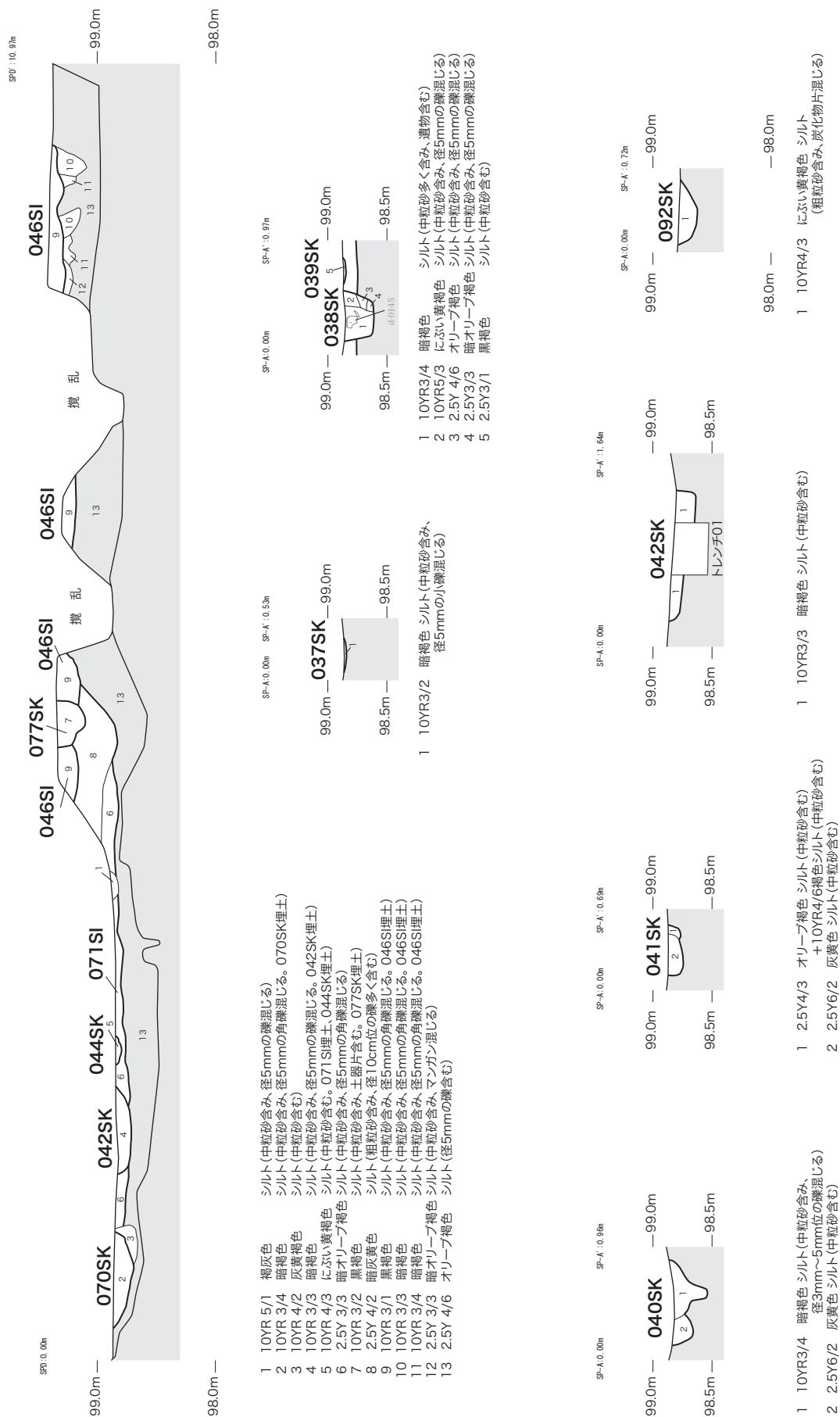


图 16 08 区竖穴建物 071SI 土层断面图

インによれば、壁溝は貼床後に掘削されたものと考えることができる。床は中央部を中心に地山を掘り込んだままの状態、周縁部に貼床をしている。その範囲は平面図【図15】に示したとおりで、北西隅部でその範囲は広がっている。

壁面は、下位平場で検出された範囲ではほとんど削平されているが、上位平場で検出された北壁では壁溝の底から約50cm上方まで残存していることが確認された。その立ち上がりは下から約30cmは45°の傾斜でその先はほぼ垂直に上方へ至っている。北壁付近の埋土からは炭化した草本類が集積して出土しているが、それは方向が揃えられてあたかも簾から葎のような状態であった。【写真図版7】。これを可能な限り採集し、炭素年代測定と樹種同定を実施した【第4章第2・3節】。結果、暦年校正を経た年代は1世紀前半～2世紀前半（採集形成年輪あり）、樹種はシオジ節に分類される落葉樹とイネ科の草本類であることが判明した。いずれも堅穴建物の建築材として使用可能であることから、屋根葺材もしくは壁材であった可能性が考えられ、これらが炭化する契機として、建物廃絶時に燃焼行為のあったことが推測される。

埋土は壁同様に南半部では削平のためほとんど残っていなかったが、黒色土や砂礫が混じる暗褐色系のシルト主体である。その一部では土器片とともに円礫の集中する箇所がみられた。また、埋土の上から掘り込まれた大小の土坑も多数あり（037～044SK）、特に南壁付近にある038SKからは高杯の脚部が出土している。ただしこの高杯（E-33）は杯部の破片が071SIの埋土から出土しているため、所属が明らかになった。一方北壁付近は埋土の残存状況が良好で、黒色土の割合が高く、先述の炭化材の他に多数の土器片が出土している。

出土遺物は、南半部の埋土からは高杯2点（E-32・33）を含む弥生時代後期の土器が出土している。これらは円礫に混じってかなり破砕された状態であったが、完形近くまで復元することが可能であった。石製品では摺石（S-4）、剥片（S-5）が出土しており、前者には赤色の付着物がある。

09区 203SI 09調査区で検出されたた堅穴建物である。しかしながらその大半は旧河道201NRおよび斜面地の段切りによって滅失しており、北隅部分がわずかに検出されたのみである。したがって平面的な全体規模を知ることはできない。ただし建物の主軸方位はグリッド北から東へ45°振れている。床面では壁溝が検出され、幅28cm、深さ4cmである。堆積土層は1層が埋土、2層が貼床に相当するものと考えられる。側壁の立ち上がりは25°とかなり緩やかである。出土遺物は弥生時代後期の土器があり、概ね建物の時期を示すと考えられる。

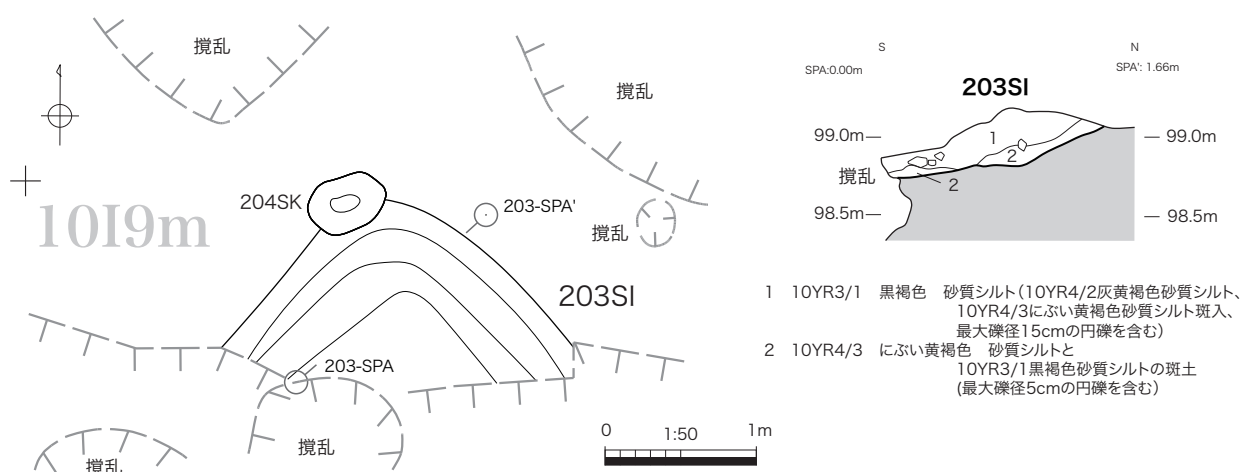
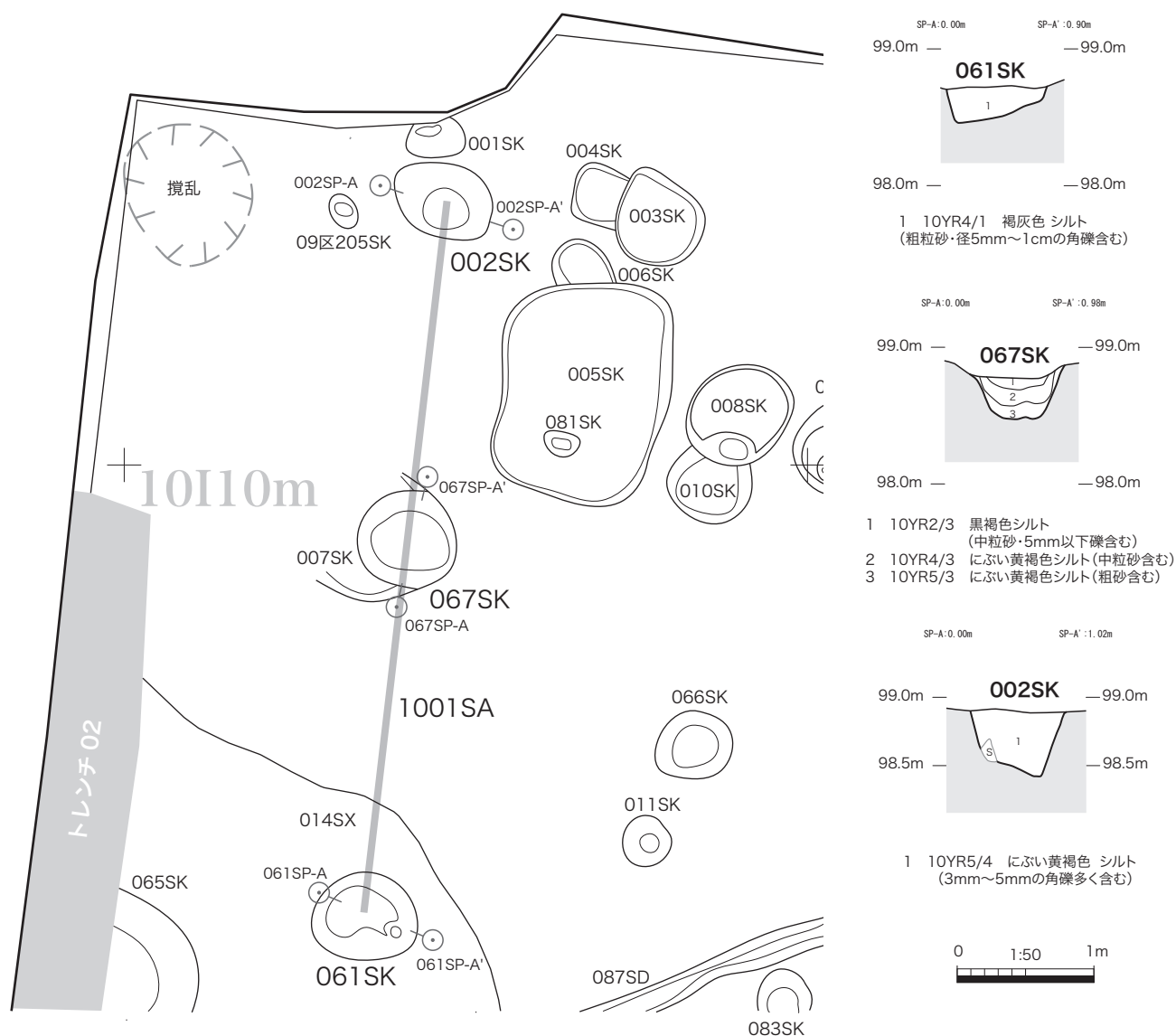


図17 09区堅穴建物203SI遺構図

第3節 掘立柱建物

08区 1001SA 調査区西端で検出された3つの土坑（北から002SK・067SK・061SK）で構成される掘立柱列である。全長は5.3m、柱間隔2.5～2.7mである。柱列の方位はグリッド北から東へ7°振れている。柱穴の直径は71～75cm、深さ27～42cmであり、柱穴底の標高は98.5mで揃っている。出土遺物がなく時期は不詳であるが、南端の061SKは旧河道とその氾濫に伴う堆積014SXの下位で検出されていることから、近世以前のものと推定される。

08区 1002SB 調査区南部、015SIなどと重複して検出された掘立柱建物である。北東から南西方向に長軸（桁行）となり、その方位はグリッド北から東へ51°振れている。長軸長は4.5m、短軸長は2.9mである。北西辺は西から062SK・011SK・013SKで構成され、柱間隔は1.9m・2.6mである。対する南東辺は南端はトレンチ02にかかり不明で次いで058SK・017SKとなり柱間隔は2.0mである。北東辺は013SK・012SK・017SKで柱間隔は1.4m・1.5mである。いずれも掘り方のみで柱痕跡は



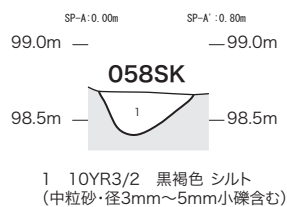
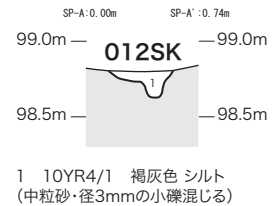
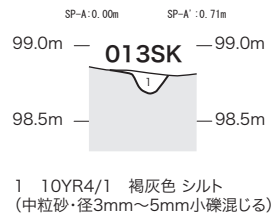
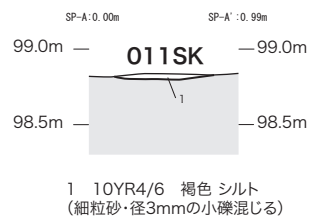
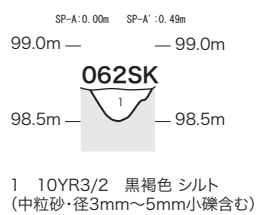
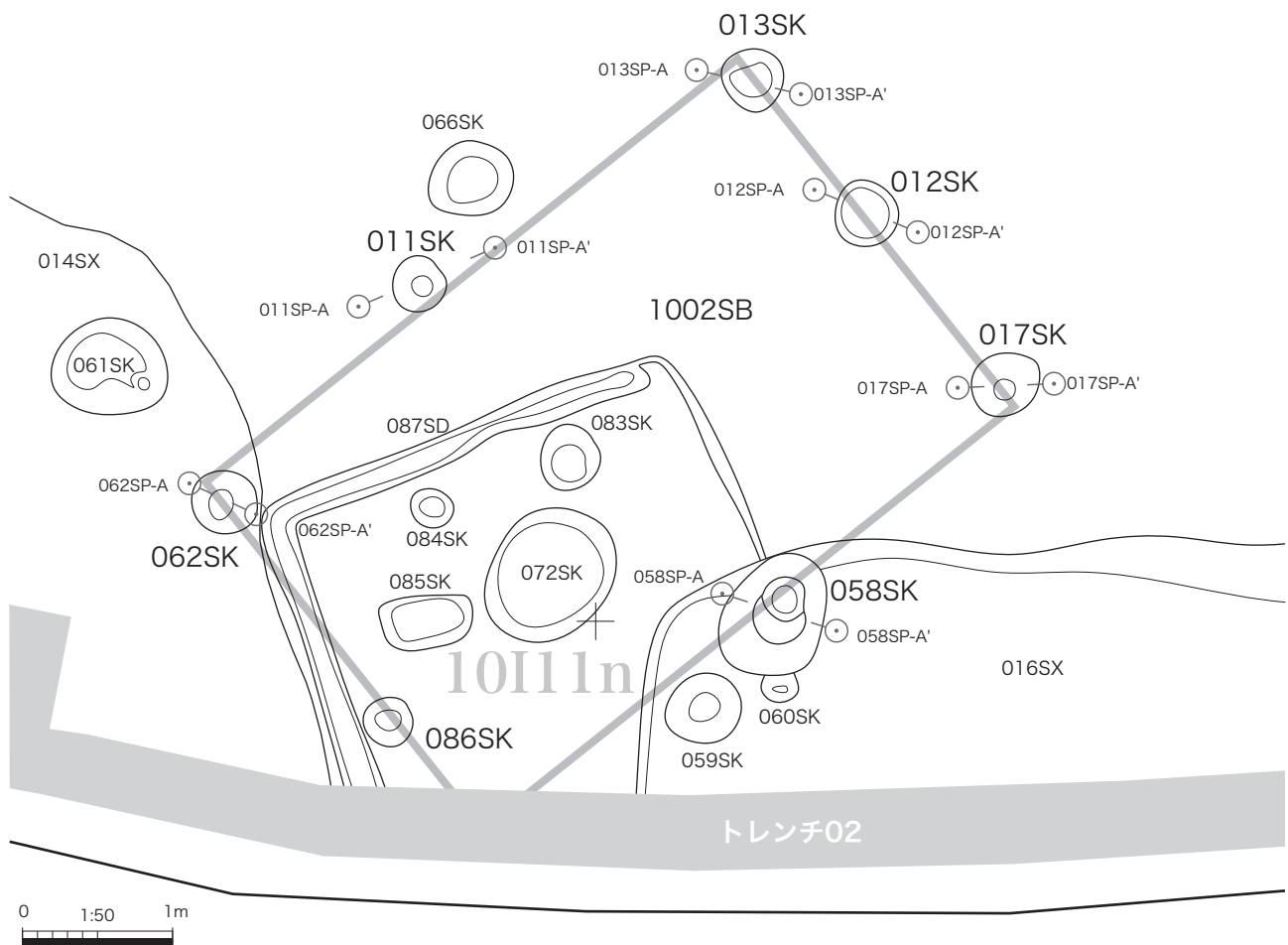


図19 08区掘立柱建物1002SB遺構図

確認できなかった。当該遺構の時期は、出土遺物はないが、058SKが015SIより後であることから古墳時代前期以降であると考えられる。想定される柱穴は058SK以外はいずれも深さ1～28cmと浅いが、015SIも含めて周辺の削平が著しいことを付記しておきたい。

08区 1003SB 調査区南壁（トレンチ02）にかかって検出された掘立柱建物である。074SK・080SK・021SKを北西辺とし、021SK・024SKを北東辺とする。024SKの先に柱穴相当の土坑が検出されなかったので1×2間の可能性もある。仮に北西辺を主軸としてその方位はグリッド北から東へ43°振れている。柱穴の直径は45～61cm、深さは25～39cmで、1002SB同様に周辺の削平状況を考慮すると本来もっと深度のあるものだったと考えられる。柱穴群は掘り方のみで柱痕跡などは確認できなかった。当該遺構の時期は、出土遺物はないが、074SK・080SKが045SIの床面で検出されていることからするとこれに先行するものと考えられる。

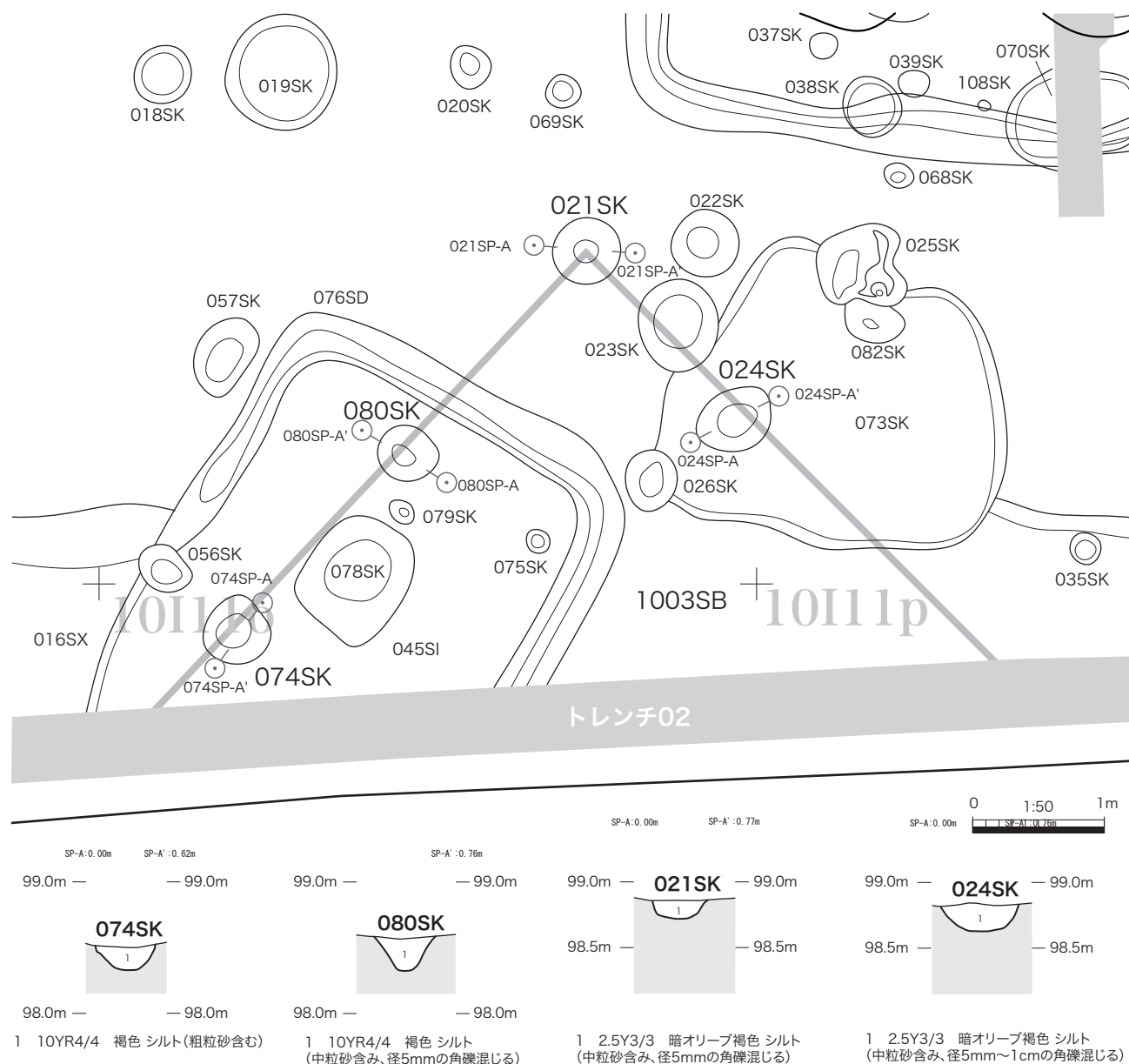


図20 08区掘立柱建物 1003SB 遺構図

08区 1004SB 調査区南東隅で南壁（トレンチ02）にかかって検出された掘立柱建物である。034SK・103SKを北西辺とし、103SK・031SKを北東辺とする。調査区外へ延びている可能性が高い。仮に北西辺を主軸としてその方位はグリッド北から東へ43°振れている。柱穴の直径は34～40cm、深さは22～35cmである。当該遺構周辺も削平が著しいことから本来もっと深度のあるものだったと考えられる。柱穴群は掘り方のみで柱痕跡などは確認できなかった。当該遺構の時期は、出土遺物がないが、034SKと031SKが中世～近世の氾濫による堆積016SXの下位で検出されていることからこれより古く、1003SBと方位が揃う点も考慮するとこれに近い時期なのかもしれない。

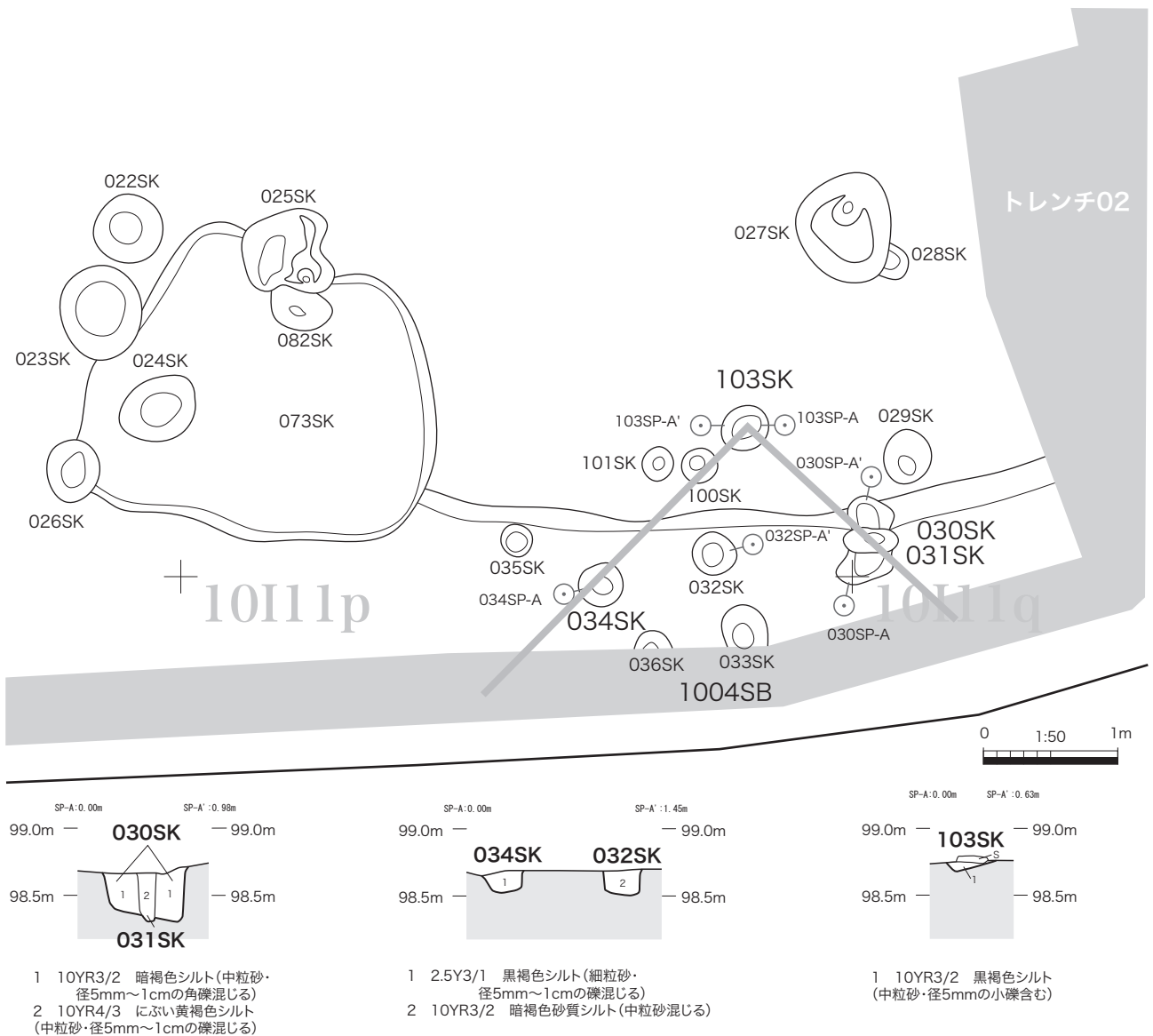


図21 08区掘立柱建物1004SB遺構図

表1 検出遺構一覧(1)

調査区	遺構記号	グリッド	地層	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	埋土	調査日時	時期	備考
08区	001SK	10I9m	1	0.44	0.31	0.09	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	002SK	10I9m	1	0.75	0.54	0.44	10YR5/4にぶい黄褐色シルト（3mm～5mm位の角礫多く含む）	2008/5/20		1001SA
08区	003SK	10I9m	1	0.65	0.63	0.1	5Y4/1灰色シルト（中粒砂含み、径5mmの角礫混じる）	2008/5/20		
08区	004SK	10I9m	1	0.42	0.35	0.05	10YR3/2黒褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	005SK	10I9m	1	1.6	1.22	0.07	2.5Y5/3黄褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	006SK	10I9m	1	-0.6	0.41	0.04	2.5Y5/3黄褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	007SK	10I10m	1	-1.3	1	0.03	10YR5/4にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	008SK	10I9m	1	0.79	0.68	0.06	10YR4/6褐色シルト（細粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	009SK	10I9n	1	0.65	0.62	0.46	1 10YR5/4にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる） 2 10YR4/1褐灰色シルト（中粒砂含み、009 S K埋土）	2008/5/20		
08区	010SK	10I10m	1	0.61	0.43	0.25	10YR4/4褐色シルト（径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	011SK	10I10m	1	0.36	0.35	0.19	10YR4/6褐色シルト（細粒砂含み、径3mm位の小礫混じる）	2008/5/20		1002SB
08区	012SK	10I10n	1	0.42	0.42	0.14	10YR4/1褐灰色シルト（中粒砂含み、径3mm位の小礫混じる）	2008/5/20		1002SB
08区	013SK	10I10n	1	0.41	0.41	0.1	10YR4/1褐灰色シルト（中粒砂含み、径3mm～5mm位の小礫混じる）	2008/5/20		1002SB
08区	014SX	10I10m・ 11m	1	-3.7	-	-	10YR3/4暗褐色シルト（中粒砂含む）	2008/5/20		浅い落ち込み
08区	015SI	10I10m10I 10n	1	-3.4	3	0.13	015SIセクション図参照。	2008/5/20	弥生後期 ～古墳	竪穴建物
08区	016SX	10I10n10I1 1n他	1	-16	-	-	10YR3/4暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/20		浅い落ち込み
08区	017SK	10I10n	1	0.45	0.41	0.28	10YR4/1褐灰色シルト（中粒砂含み、径3mm位の角礫混じる）	2008/5/20		1002SB
08区	018SK	10I10o	1	0.43	0.43	0.21	10YR5/1褐灰色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫多く含む）	2008/5/20		
08区	019SK	10I10o	1	0.87	0.85	0.26	10YR5/4にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	020SK	10I10o	1	0.32	0.3	0.17	2.5Y5/1黄灰色シルト（中粒砂含む）	2008/5/20		
08区	021SK	10I10o	1	0.51	0.5	0.35	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		1003SB
08区	022SK	10I10o	1	0.51	0.51	0.17	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	023SK	10I10o	1	0.69	0.61	0.34	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（径5mm位の角礫混じる）	2008/5/20		
08区	024SK	10I10o	1	0.61	0.46	0.36	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/20		1003SB
08区	025SK	10I10p	1	0.74	0.71	0.35	1 10YR3/3暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる） 2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土（中粒砂含む） 3 2.5Y6/2灰黄色シルト+2.5Y6/6明褐色シルト（粗粒砂含み、径1cm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	026SK	10I10o	1	0.46	0.39	0.25	1 10YR2/2黒褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	027SK	10I10p10I1 0q	1	0.81	0.7	0.38	1 10YR3/3暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる） 2 10YR3/3暗褐色シルト（細粒砂含む）+10YR4/6褐色シルト（径5mm位の角礫混じる） 3 10YR4/6褐色シルト（細粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	028SK	10I11q	1	0.24	-	0.13	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト（細粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	029SK	10I11q	1	0.4	0.35	0.41	2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（粗粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	030SK	10I11q	1	0.66	0.33	0.42	10YR3/2暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	031SK	10I11q	1	0.4	0.18	0.35	10YR4/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の礫混じる）	2008/5/23		1004SB
08区	032SK	10I10p	1	0.32	0.31	0.24	10YR3/2暗褐色砂質シルト（中粒砂混じる）	2008/5/23		
08区	033SK	10I11p	1	0.32	-	0.41	10YR3/2暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位～1cm位の角礫混じる）	2008/5/23		
08区	034SK	10I11p	1	0.33	0.31	0.22	2.5Y3/1黒褐色シルト（細粒砂含み、径51cm位の礫混じる）	2008/5/23		1004SB
08区	035SK	10I10p	1	0.24	0.23	0.08	10YR4/4褐色シルト（中粒砂含み、径3mm位の小礫多く含む）	2008/5/23		
08区	036SK	10I11p	1	-0.3	0.28	0.3	10YR3/2暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の礫混じる）	2008/5/23		
08区	037SK	10I10p	1	-0.2	-0.18	-	10YR3/2暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の小礫混じる）	2008/5/23		
08区	038SK	10I10p	1	0.46	0.43	0.17	1 10YR3/4暗褐色シルト（中粒砂多く含み、遺物含む） 2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の礫混じる） 3 2.5Y 4/6オリーブ褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の礫混じる） 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の礫混じる）	2008/5/23		
08区	039SK	10I10p	1	-0.2	-0.18	-	2.5Y3/1黒褐色シルト（中粒砂含む）	2008/5/23		
08区	040SK	10I10p	1	0.83	0.75	0.19	1 10YR3/4暗褐色シルト（中粒砂含み、径3mm～5mm位の礫混じる） 2 2.5Y6/2灰黄色シルト（中粒砂含む）	2008/5/23		

表2 検出遺構一覧(2)

調査区	遺構記号	グリッド	地層	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	埋土	調査日時	時期	備考
08区	041SK	10I9p	1	0.62	0.5	0.16	1 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト(中粒砂含む) + 10YR4/6褐色シルト(中粒砂含む) 2 2.5Y6/2灰黄色シルト(中粒砂含む)	2008/5/23		
08区	042SK	10I10p	1	1.16	0.66	0.11	10YR3/3暗褐色シルト(中粒砂含む)	2008/5/23		
08区	043SK	10I10p	1	0.33	0.3	0.18	10YR3/4暗褐色砂質土(中粒砂含む)	2008/5/23		
08区	044SK	10I9p	1	0.23	-0.28	0.09	10YR4/3にぶい黄褐色シルト(中粒砂含む)	2008/5/23		
08区	045SI	10I10o10I11o	1	-3.8	3.09	0.11	045SIセクション図参照。	2008/5/23	弥生後期	竪穴建物
08区	046SI	10I8o・8p・9o・9p	1	-5.5	-4.9	-	046SIセクション図参照。	2008/5/23	弥生後期	竪穴建物
08区	047SI	10I8n9n8o9o	1	-4	-4	0.17	047SIセクション図参照。	2008/5/23	古墳前期	竪穴建物
08区	048SK	10I8o	1	0.71	0.52	0.45	1 10YR3/3暗褐色シルト(中粒砂含む) 2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト(中粒砂含む)	2008/5/23		
08区	049SK	10I9o	1	0.67	0.47	0.32	10YR4/4褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫混じる)	2008/5/23		
08区	050SK	10I9p	1	0.49	0.47	0.28	1 10YR3/2暗褐色シルト(細粒砂含む) 2 10YR4/4褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の礫混じる)	2008/5/23		
08区	051SK	10I8n	1	0.38	0.35	0.24	10YR4/4褐色シルト(細粒砂混じる)	2008/5/23		
08区	052SK	10I9o	1	0.28	-	0.16	10YR3/2黒褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫混じる)	2008/5/23		
08区	053SK	10I9o	1	0.42	0.37	0.12	10YR4/6褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫混じる)	2008/5/23		
08区	054SK	10I9o	1	0.55	0.52	0.16	1 10YR3/4暗褐色シルト(粗粒砂含む) + 10YR5/6黄褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫混じる) 2 10YR5/6黄褐色シルト(中粒砂含む)	2008/5/23		
08区	055SK	10I9o・9n	1	0.56	0.5	0.45	10YR3/4暗褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm小礫多く含む)	2008/5/23		
08区	056SK	10I10o	1	0.42	0.31	0.2	10YR4/1褐灰色シルト(粗粒砂含む、径5mm～1cmの角礫含む)	2008/5/29		
08区	057SK	10I10o	1	0.6	0.41	0.27	10YR4/1褐灰色シルト(粗粒砂含む、径5mm～1cmの角礫含む)	2008/5/23		
08区	058SK	10I10I11n	1	0.85	0.63	0.44	10YR3/2黒褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/23		1002SB
08区	059SK	10I11n	1	0.52	0.46	0.18	10YR3/2黒褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/23		
08区	060SK	10I11n	1	0.24	0.18	0.08	10YR3/2黒褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/23		
08区	061SK	10I10m	1	0.75	0.64	0.27	10YR4/1褐灰色シルト(粗粒砂含む、径5mm～1cmの角礫含む)	2008/5/29		1001SA
08区	062SK	10I10m	1	0.45	0.41	0.24	10YR3/2黒褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/29		1002SB
08区	063SK	10I10I10m	1	-1.1	-1	0.16	10YR4/1褐灰色砂質土(中粒砂、径3mm～5mm位の礫含む)	2008/5/29		
08区	064SK	10I10m	1	-1.4	-1.1	0.14	10YR3/2黒褐色シルト(粗粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/29		
08区	065SK	10I10I10m	1	-1.5	-1.42	0.18	10YR4/1褐灰色シルト(中粒砂含む、径5mm～1cmの角礫含む)	2008/5/29		
08区	066SK	10I10m	1	0.57	0.5	0.21	10YR3/2黒褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/23		
08区	067SK	10I10m	1	0.74	0.71	0.42	1 10YR2/3黒褐色砂質土(中粒砂・3mm～5mm礫含む) 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(中粒砂) 3 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土(粗砂)	2008/5/29		1001SA
08区	068SK	10I10p	1	0.23	0.18	0.21	10YR3/2黒褐色シルト(粗粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/23		
08区	069SK	10I10o	1	0.26	0.24	0.18	10YR3/2黒褐色シルト(粗粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/23		
08区	070SK	10I10p	1	1.04	0.61	0.09	1 10YR3/4暗褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫含む) 2 10YR3/4暗褐色シルト(中粒砂含む、径2cm位の礫含む) + 10YR4/6褐色シルト(中粒砂含む、径5mm～1cmの角礫多く含む)	2008/5/23		
08区	071SI	10I8o・8p・8o・9o	1	5.53	4.32	0.11	071SIセクション図参照。	2008/6/3	弥生後期	竪穴建物
08区	072SK	10I10m	1	0.43	0.39	0.23	10YR3/2黒褐色シルト(粗粒砂含む、径3mm～5mm小礫含む)	2008/5/29		
08区	073SK	10I10o・10p	1	2.63	1.98	0.16	10YR4/4褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫・マンガン・酸化鉄多く含む)	2008/6/3		
08区	074SK	10I11o	1	0.49	0.48	0.25	10YR4/4褐色シルト(粗粒砂含む)	2008/5/29		1003SB
08区	075SK	10I10o	1	0.19	0.17	0.13	10YR4/4褐色シルト(粗粒砂含む、径3mm位の小礫混じる)	2008/5/29		
08区	076SD	10I10o・11o	1	6.03	0.23	0.06	10YR4/4褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm位の角礫混じる)	2008/5/23	古墳前期	045SI周壁溝
08区	077SK	10I9p	1	-0.5	-0.4	-	10YR3/2黒褐色砂質土(中粒砂含む、土器片含む)	2008/5/23		
08区	078SK	10I10o・11o	1	0.9	0.77	0.41	1 10YR2/2黒褐色砂質土(粗砂～中粒砂・炭化物多く含む、遺物を含む) 2 10YR4/4褐色粗砂(径5mm位の礫含む)	2008/5/29		045SI炉穴
08区	079SK	10I10o	1	0.21	0.16	0.16	10YR4/4褐色シルト(中粒砂含む、径3mm～5mm位の角礫混じる)	2008/5/29		
08区	080SK	10I10o	1	0.45	0.41	0.39	10YR4/4褐色シルト(中粒砂含む、径5mm位の角礫混じる)	2008/5/29		1003SB

吉竹遺跡

表3 検出遺構一覧(3)

調査区	遺構記号	グリッド	地層	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	埋土	調査日時	時期	備考
08区	081SK	10I9m	1	0.26	0.17	0.11	10YR4/4褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/5/29		
08区	082SK	10I10 p	1	0.46	0.29	0.19	1 10YR3/3暗褐色シルト（中粒砂含み） 2 10YR5/4にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み）	2008/6/3		
08区	083SK	10I10m	1	0.95	0.78	0.14	10YR3/2黒褐色シルト（粗粒砂含み、径3mm～5mm小礫含む）	2008/6/3		
08区	084SK	10I10m	1	0.28	0.25	0.13	10YR4/4褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/6/3		
08区	085SK	10I10m・ 11m	1	0.61	0.34	0.18	1 10YR3/2黒褐色シルト（中粒砂含み）、2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み）	2008/6/3		
08区	086SK	10I11m	1	0.32	0.32	0.2	10YR4/4褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）	2008/6/3		1002SB
08区	087SD	10I10m・ 10n・11m	1	4.47	0.2	0.07	10YR4/3にぶい黄褐色シルト（粗粒砂多く含み、10YR4/6褐色シルト含む）	2008/6/3	弥生後期 か	015SI周壁溝
08区	088SK	10I8p	1	0.57	0.52	0.23	10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み）	2008/6/3		
08区	089SK	10I8p・9p	1	-6.2	-3.04	-	10YR4/6褐色シルト（中粒砂含み）+10YR3/2暗褐色シルト（粗粒砂含み）	2008/6/3		
08区	090SD	10I8p	1	-3	-0.2	-	10YR3/2黒褐色シルト（中粒砂含み、径5mm位の小礫含む）	2008/5/29	古墳前期	046SI周壁溝
08区	091SD	10I9o・ 10o・10p	1	16.5	0.21	0.08	10YR3/2暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm～1cm位の角礫含む）	2008/5/29	弥生後期	071SI周壁溝
08区	092SK	10I8o	1	0.61	0.44	0.14	10YR4/3にぶい黄褐色シルト（粗粒砂含み、炭化物片混じる）	2008/5/29		
08区	093SK	10I9p	1	なし	なし	なし	071SIに同じ	2008/5/29	弥生後期	071SI埋土 (北壁)
08区	094SK	10I9o	1	0.58	0.47	0.13	10YR4/3にぶい黄褐色シルト+10YR4/6褐色シルト（径1cm位の角礫含む）	2008/6/3		
08区	095SK	10I9n	1	0.32	0.22	0.17	10YR4/4褐色シルト（中粒砂含み）	2008/6/3		
08区	096SK	10I8o	1	0.79	0.73	0.11	10YR2/2黒褐色シルト（細粒砂含み、径10cm位の角礫を多く含む）	2008/6/3		
08区	097SD	10I8o	1	1.78	0.21	0.09	10YR3/3暗褐色シルト（中粒砂含み、径5mm～1cm位の礫多く含む）	2008/6/3	弥生後期	047SI周壁溝
08区	098SK	10I9o・9p	1	0.95	0.81	0.14	10YR3/4暗褐色シルト（径5mm位の礫混じる）	2008/6/3		
08区	099SK	10I10o	1	0.5	0.65	0.05	10YR3/3暗褐色シルト（粗粒砂含み）	2008/6/3		
08区	100SK	10I10p	1	0.26	0.26	0.25	10YR3/2黒褐色シルト（中粒砂含み、径5mm～1cm礫混じる）	2008/6/3		
08区	101SK	10I10p	1	0.25	0.22	0.16	10YR3/2黒褐色シルト（中粒砂含み、径5mm～1cm位の角礫混じる）	2008/6/3		
08区	102SK	10I8o	1	0.45	-0.4	0.41	10YR4/3にぶい黄褐色シルト（細粒砂含み）	2008/6/3		
08区	103SK	10I9p	1	0.34	0.33	-	10YR3/2黒褐色シルト（中粒砂含み、5mm位の小礫含む）	2008/6/19		1004SB
08区	104SK	10I9p	1	0.56	0.51	0.23	10YR3/2黒褐色シルト（細粒砂含み、径5mm位の小礫混じる。遺物、炭化物を含む）	2008/6/19		071SI炉穴
08区	105SK	10I9p	1	0.23	0.22	0.29	10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、5mm位の小礫含む）	2008/6/19		071SI主柱穴
08区	106SK	10I9p	1	-0.6	0.4	0.27	10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、5mm位の小礫含む）	2008/6/19		
08区	107SD	10I9o	1	1.43	0.14	0.07	10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み）	2008/6/19	弥生後期	047SI周壁溝
08区	108SK	10I10p	1	-0.1	-0.06	-	10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み）	2008/6/19		
08区	109SK	10I9o	1	なし	-	-	10YR3/2黒褐色シルト（中粒砂含み、径5mm～1cm位の角礫含む）	2008/6/19		071SI主柱穴
08区	110SK	10I10o	1	0.4	0.37	-	1 10YR4/4褐色シルト（細粒砂含み） 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（径5mm位の小礫を含む） 2	2008/6/19		071SI主柱穴
08区	111SK	10I10o	1	0.18	0.18	0.53	10YR4/3にぶい黄褐色シルト+10YR3/3暗褐色シルト（径5mm位の礫を含む）	2008/6/19		071SI主柱穴
08区	112SK	10I8p	1	0.34	0.31	0.5	1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（径5mm位の礫を含む） 2 10YR4/6褐色シルト（径5mm位の礫を多く含む）	2008/6/19		
08区	1001SA	10I9m・ 10m	1	-5.3	-	-		2008/6/19	-	-
08区	1002SB	10I10m・ 10n	1	4.5	2.95	-		2008/6/19	-	-
08区	1003SB	10I10o・ 10p	1	-4.8	-4.5	-		2008/6/19	-	-
08区	1004SB	10I11p	1	-2	-1.9	-		2008/6/19	-	-
09区	201NR	10I6k・ 10I10m	1	-	-	-	201NRセクション図参照	2009/06/25 ～ 2009/07/16	弥生後期 ～	大宮川旧河道
09区	202SK	10I8I	1	0.94	0.88	0.42	202SKセクション図参照	2009/07/08 ～ 2009/07/10	中世	
09区	203SI	10I9m	1	-	-	0.38	203SIセクション図参照	2009/07/09 ～ 2009/07/10	弥生後期	竪穴建物
09区	204SK	10I8m・ 10I9m	1	0.53	0.35	0.15	204SKセクション図参照	2009/07/10		
09区	205SK	10I9m	1	0.27	0.19	0.17	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトと10YR3/1黒褐色砂質シルトの班土（最大礫径5cmの円礫を含む）	2009/07/10		
09区	206SK	10I8n	1	0.53	0.43	0.15	206SKセクション図参照	2009/07/21		
09区	207SK	10I8n	1	0.24	0.24	0.08	10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト斑入）	2009/07/21		
09区	208SK	10I8n	1	-	0.25	0.1	10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト斑入）	2009/07/21		
09区	047SI	10I8n・ 10I9n	1	-	-	0.16	047SIセクション図参照	2009/07/21	弥生後期	竪穴建物(08 区続き)

第3章 遺物

遺物の概要 本章では発掘調査で出土した遺物について記述する。2次にわたる発掘調査で出土した遺物の量は、遺物コンテナで10箱であり、その大半は08調査区出土の土器であった。遺物の構成は土器・石器（石製品）・金属製品に大別され、木製品はなかった。土器は土師質のものが主体で時代ごとに縄文土器・弥生土器・土師器（古墳時代以降）と呼称し、それ以外では灰釉陶器・山茶碗・瀬戸美濃産陶器などが若干数みられる。また土師質の土器もそのほとんどが弥生時代後期に属する弥生土器であり、次いで古墳時代前期の土師器が多い。以下では、主体となる竪穴建物跡出土の土器、それ以外出土の土器に区分して提示し（E-は略）、その後に石器（S-）、金属製品（M-）の順に報告する。

第1節 竪穴建物跡出土の土器

08区 045SI 高杯と甕がある。高杯は有段高杯で、口縁を外反させ内面のみに密なヘラミガキと赤彩のあるもの（1）と内湾気味の深い杯部で内外面縦方向ヘラミガキのもの（2）があり、前者が尾張地域の山中式併行期、後者がそこからやや新しい時期と推測される。3はハケ調整の台付甕。

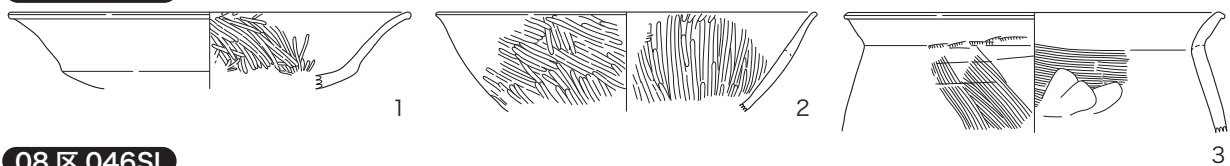
08区 046SI 高杯と壺と台付甕がある。4・5は屈折脚高杯の杯部で直線的な立ち上がりで口縁がわずかに内湾を意図している点が特徴である。6～8の高杯脚部は弥生時代後期に相当する。壺（10・11・13）はいずれも残存状況が良く当該遺構内でセット関係にあったものと推察される。壺は広口で口縁が直立しており、全体に施す外面指ナデ・内面ヘラナデ調整を基本とするが、13は外面に疎らなヘラミガキがなされる他口縁が比較的薄い点に特徴がある。12は内湾短頸広口壺でやや古い段階のものであるが小片なので混入とみられる。以上の様相から古墳時代前期の土器群と位置づけられる。

08区 047SI 高杯・壺・台付甕などがある。高杯は、大型の有段高杯（14～16・19）と小型のワイングラス形（17・18・20～24）に大別される。前者は杯部に波状文（14・15）、脚部に凹線文（16）を施し、疎密はあるが縦方向のヘラミガキがなされている。19は加飾はないが、円形の透かしとハの字状に開く形状は概ね弥生時代後期である。一方ワイングラス形は20・21のように深い内湾状杯部と22の浅い杯部に分けられ、短い脚部は、いずれも透かしのある上に凹線や連続する刺突文（17・18）の加飾が特徴である。壺（25～27）は外反する口縁で加飾なく口径も小さいので小型のものと思われる。台付甕（28～30）では、口縁に連続刺突文のあるハケ甕（28）が特徴的である。矢作川中流域（西三河・碧海郡北部）の編年である川原上層Ⅱ式以降に普及することが示されている〔愛知県埋文セ2001〕。したがって土器の残存状況はあまり良くないものの尾張地域の山中式併行期とみることができよう。なお31は碗形のミニチュアにもみえるが内面ハケ調整のままで外面は丁寧な指ナデとしている。おそらく小型甕などの台であったと考えられる。

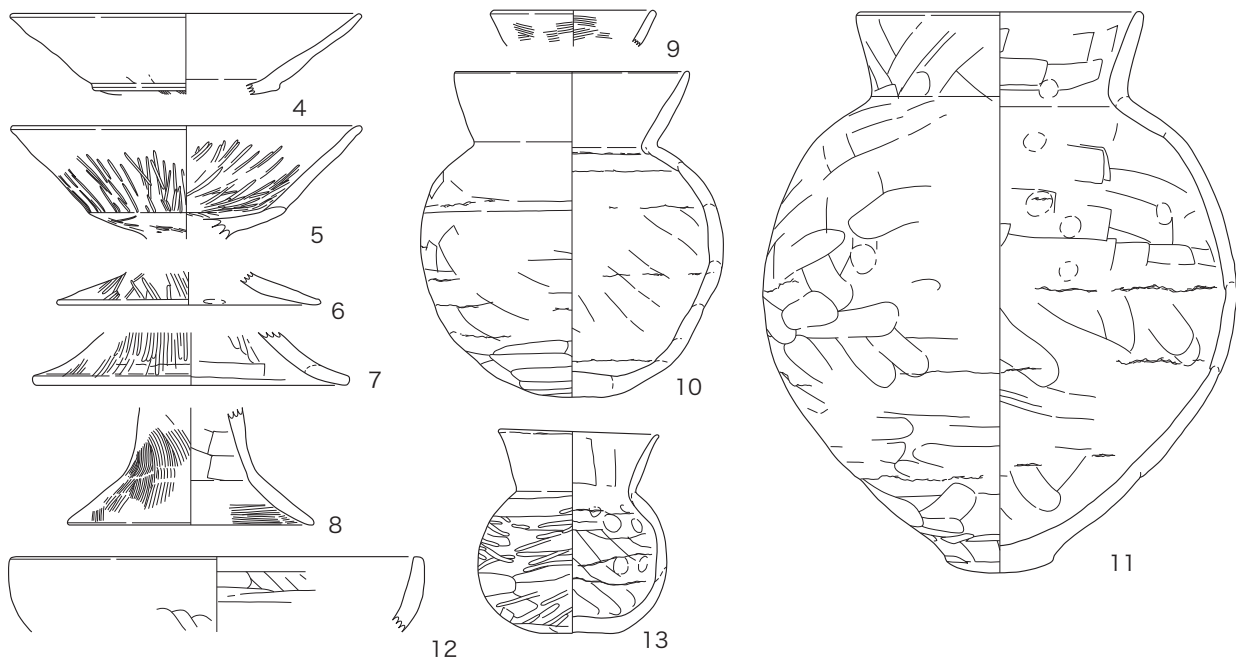
08区 071SI・093SK やや大型の竪穴建物（071SI）の埋土とおよびその北壁付近（093SK）から出土した土器群である。

071SIからは高杯・壺・台付甕が出土している。高杯は大型の有段高杯（32～35）と小型のワイングラス形高杯（36～38）がある。特に32・33は大部分が残存しており、当該遺構における良好な共伴遺物としうる。32は杯部外面に緩い波状文そして同内面上半部に赤彩がなされている。ほぼ前面に縦方向ヘラミガキがあり、外反する口縁端部を若干垂下させるなど繊細なつくりである。一方33は32と比較して大振りで杯部もやや深くなる。ヘラミガキは疎らで方向が一定しておらず、脚部内面は横ハケ調整痕がみられる。口縁端部も面取りはなされているが32のような繊細さが無い。32は胎土が灰白色の精良な胎土であり、33はおそらくこれを模倣したものであろう。36の外見は細長い脚部であるが、32に比べて中空部分が少なく凹線の加飾もない。ワイングラス形高杯は内湾する体部の上端

08区045SI



08区046SI



08区047SI

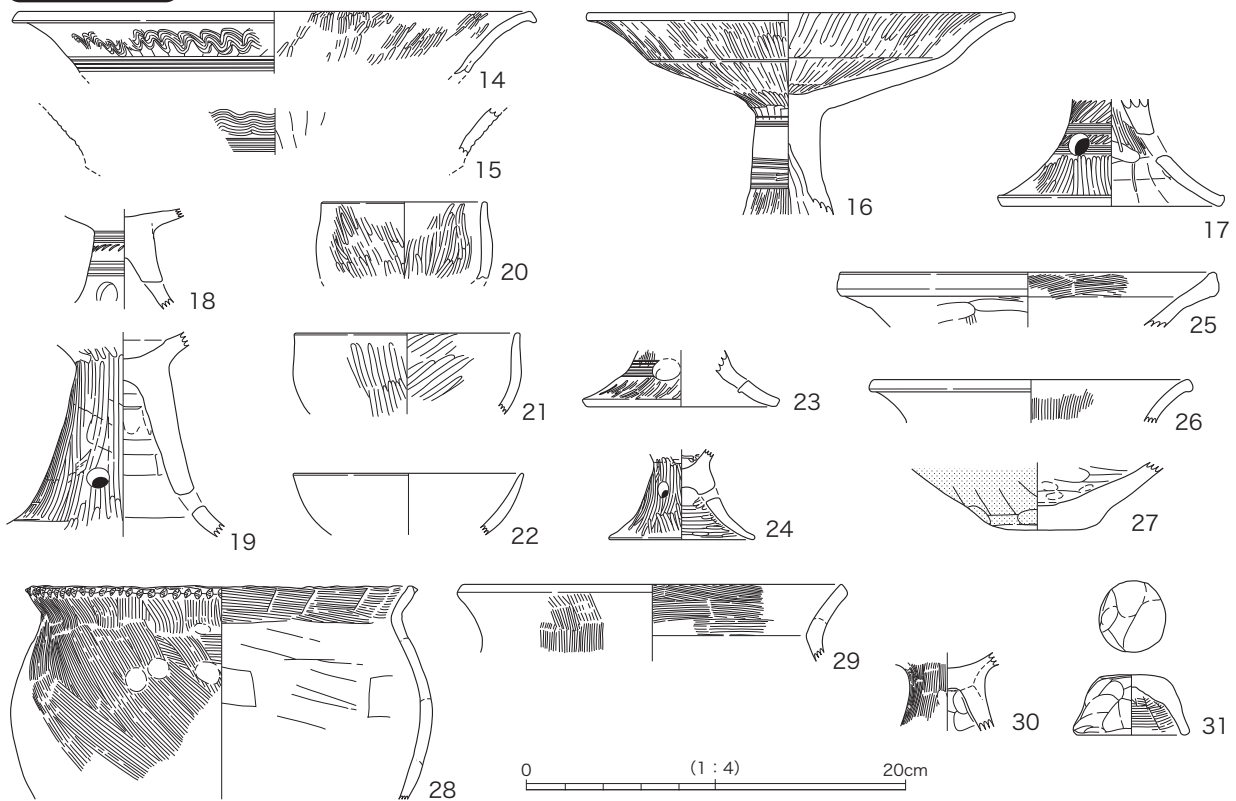


図22 出土土器実測図(08区045・046・047SI)

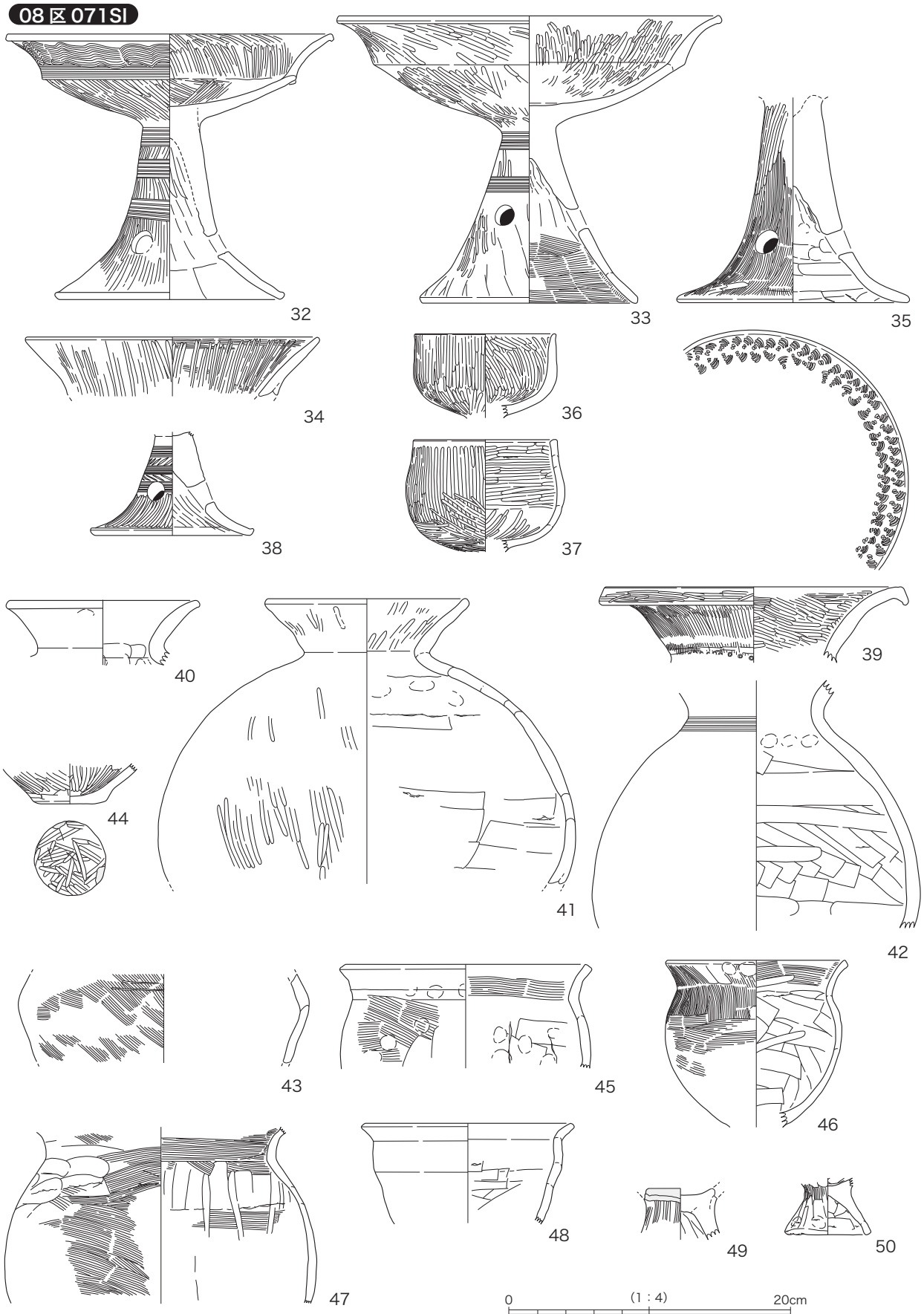


図23 出土土器実測図(08区071SI)

口縁がわずかに外反するもので内外面は縦・横のヘラミガキを施している。脚部(38)は17同様に凹線と刺突文の組み合わせである。壺はいずれも口縁が大きく外反するもので、39のように赤彩はないものの垂下する口縁と内面に扇状文の加飾がなされるものもみられる。43は胴部半ばで屈曲している。甕は台付甕とみられ、48が一点のみナデ調整である以外は全てハケ調整である。

093SK 出土土器群もその概要は071SIと同様であるが、鉢(56)や大型の加飾壺(57)が目される。有段高杯(52・53)は波状文と精良な胎土が32と共通し、54・55は直立もしくは外傾する口縁である。56は内湾するワイングラス形高杯の杯部と器形が共通する鉢である。57の加飾広口壺は、垂下する口縁外面に竹管状工具による連続施文、対する内面は羽状文である。58～60は一般的な大きさの広口壺で61はその壺底部とみられる。62～67は台付甕で62がナデ調整となる以外はハケ調整となり67は大きさからみてミニチュア品となろう。

09区 203SI 高杯と壺と甕が出土している。高杯(68)は屈曲のやや甘い有段高杯で69もその杯部下半、70は同脚部である。71は凹線と2段の連続扇状文が加飾された壺で赤彩はない。72は壺底部で内面はハケ調整。そして73・74は台付甕である。68や71は山中式併行期でもやや古相に位置づけられよう。

第2節 土坑・旧河道・包含層出土の土器

201NR 中世以降に発生した洪水に関わる旧河道堆積出土の土器群である。76は縄文土器。77は有段高杯の脚部、78は同ワイングラス形高杯脚部。79は、壺の胴部に櫛状工具による刺突文がみられる。80は台付甕で、ここまでが概ね弥生時代後期(山中式)に相当する。81から83は口縁が大口径となる台付甕で古墳時代初頭となろう。84は精緻なつくりの台で内面もヘラミガキ。85は土師器屈折脚高杯で046SIと同時期である。86は山茶碗、87～90は土師器小皿で中・近世。91が瀬戸美濃産天目茶碗である。近世後半以降の遺物が含まれないことから当該遺構の堆積は概ね近世前半までに発生したものと推測される。

検出面・トレンチ 遺構検出段階から出土した土器である。201NRとともに縄文土器(101～103)が含まれている点が目され、縄文時代に遡る集落の存在がより上位地点の近隣に想定することができる。具体的には101～103が相当し、101は縄文後期の深鉢、102・103は同晩期から弥生時代前期の条痕文土器である。それ以外では92がワイングラス形高杯、93・104は有段高杯で93は深い杯部の口縁が外反するタイプ。他に壺(94～97)と台付甕(98～100・106)が集落遺構と同時期である。それ以降では灰釉陶器碗(107)、山茶碗(108)、土師器小皿(109)、同鍋(110)が概ね平安時代から中世前半に相当し、土師器内耳鍋(111)と瀬戸美濃産陶器皿(112)は戦国・江戸時代に属する。

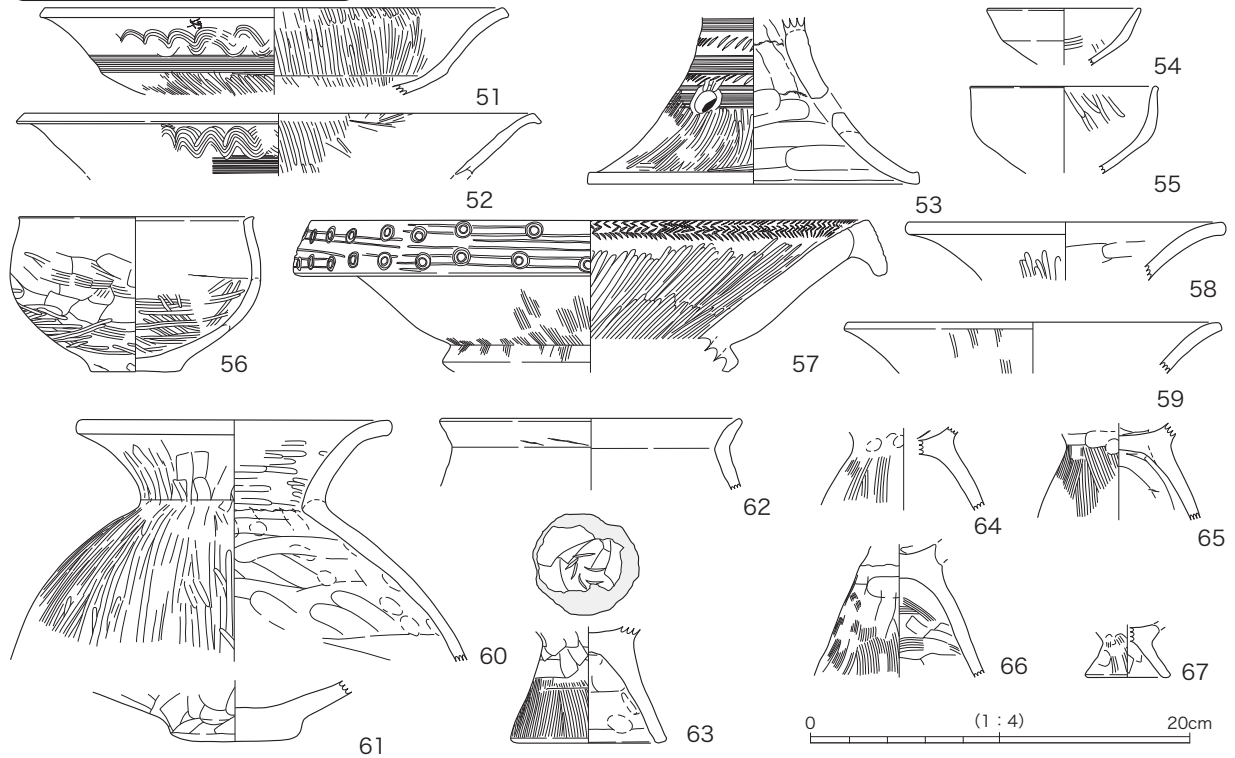
第3節 石器・石製品

石器・石製品 石器・石製品は竪穴建物047SI・071SIと旧河道201NRから出土している。

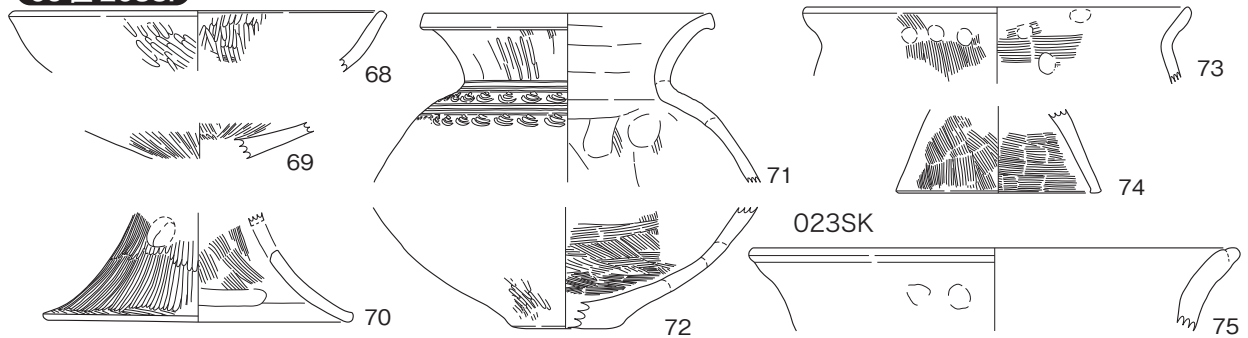
047SIから出土したものとしては、紡錘車と打製石斧、剥片がある。紡錘車(S-1)は赤みがかった灰色を呈する溶結凝灰岩製で、直径3.8cm、厚さ0.7cmの勾配のない平滑な円盤の中央に直径0.8cmの穿孔がなされている。線刻などの施文はない。石斧(S-2)は長さ4.2cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmのきわめて小型であり、緑青色である。石材は変玄武岩である。剥片(S-3)の石材は安山岩である。

071SIからは摺石と剥片が出土している。摺石(S-4)は長径9.1cmの卵形をしており、主に使用された箇所が長さ9.1cm幅3.5cmにわたって摩滅し摺面となっている。この摺面には径4cmの範囲に

08区071SI北部(093SK)



09区203SI



09区201NR

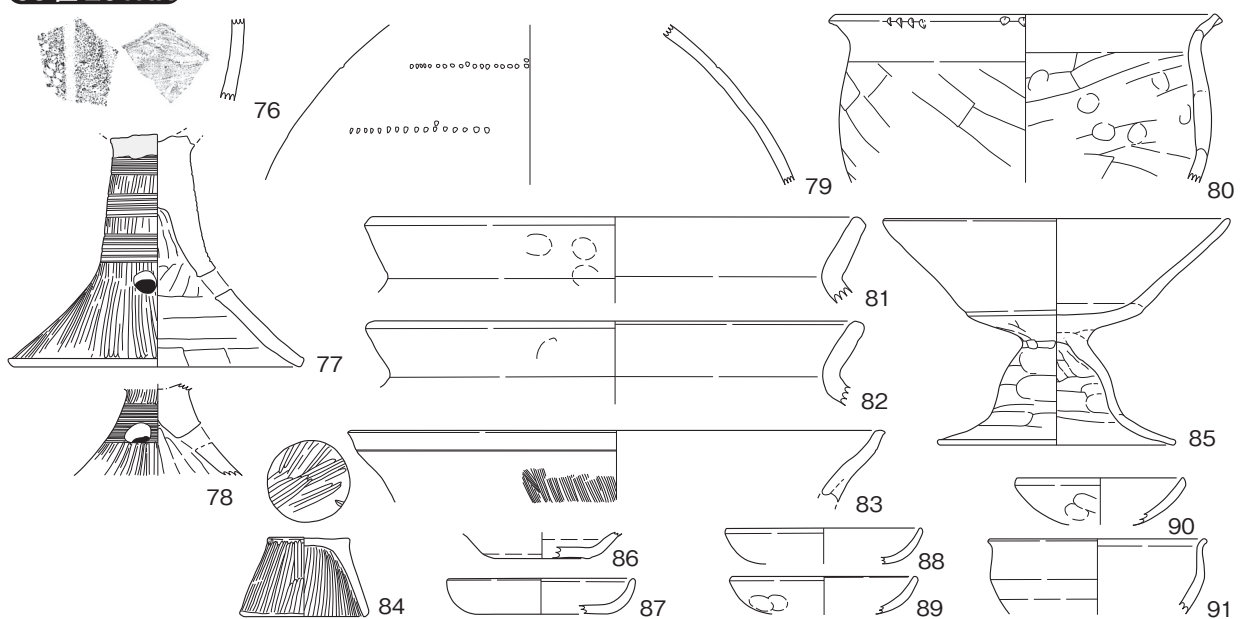


図24 出土土器実測図(08区071SI(093SK)・09区203SI・09区201NR)

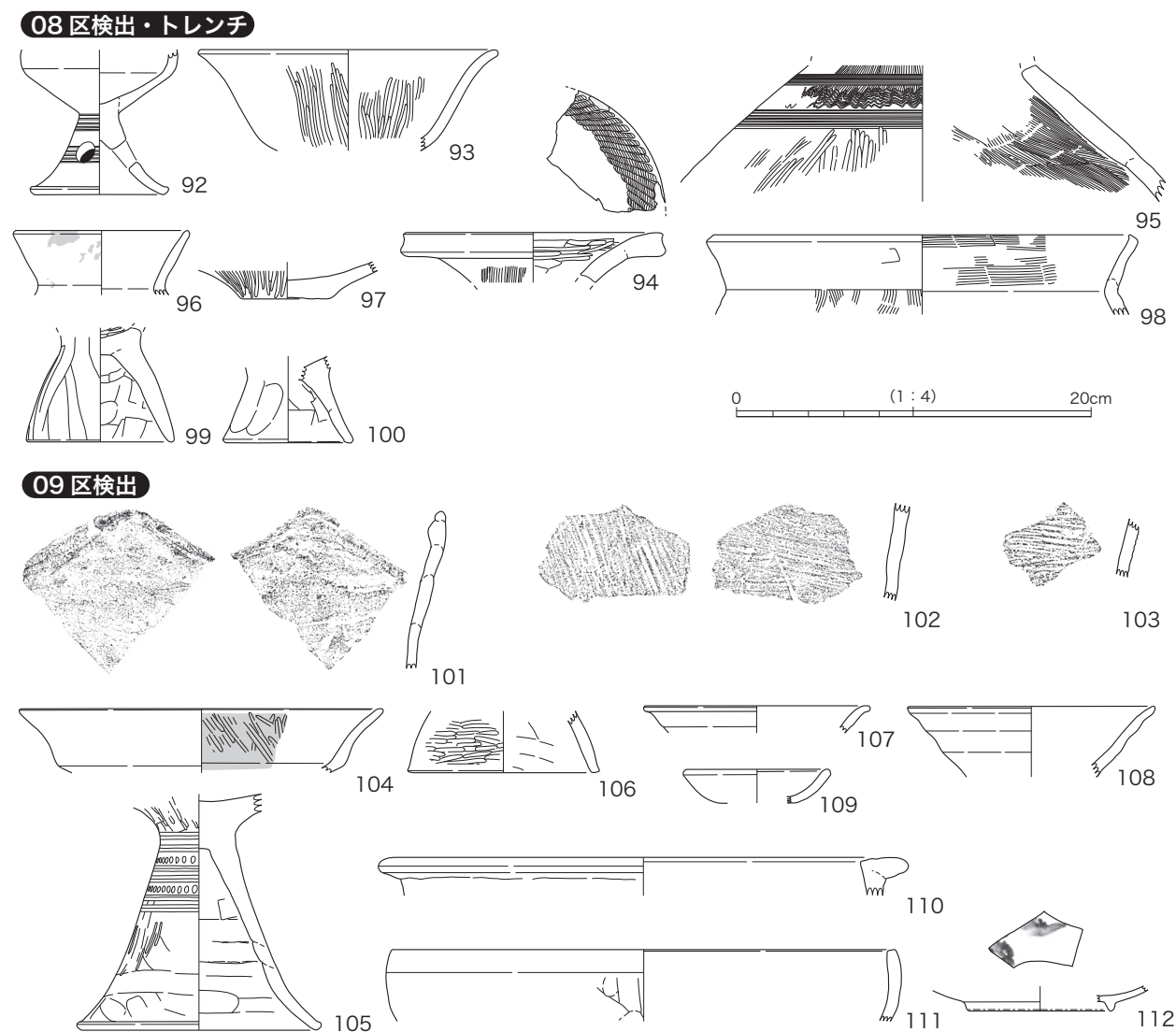


図25 出土土器実測図(08・09区検出・トレンチ)

赤色顔料が付着しており、蛍光X線分析によって鉄 (Fe) が検出されたことからベンガラと判断される。摺石の石材は花崗岩であるが、きめが細かい細粒花崗岩に分類され、全体に白雲母が目立っている。剥片 (S-5) は石包丁のような形状の打製石器で、縁辺などに小加工を施している。石材は安山岩で、青みがかった灰色をしている。

201NR 下層からは磨製石斧 (S-6) が出土している。半ばで切断されたものに小加工を施しているとみられる。石材は変玄武岩である。S-7 は時期不詳の剥片で安山岩を石材とする。

S-8 は08区トレンチ 01 から出土した敲き石である。形は紡錘状でその両端に敲打痕跡が多数みられる。石材は変玄武岩である。S-9 は表土中より出土した剥片で、石材は黒曜石である。

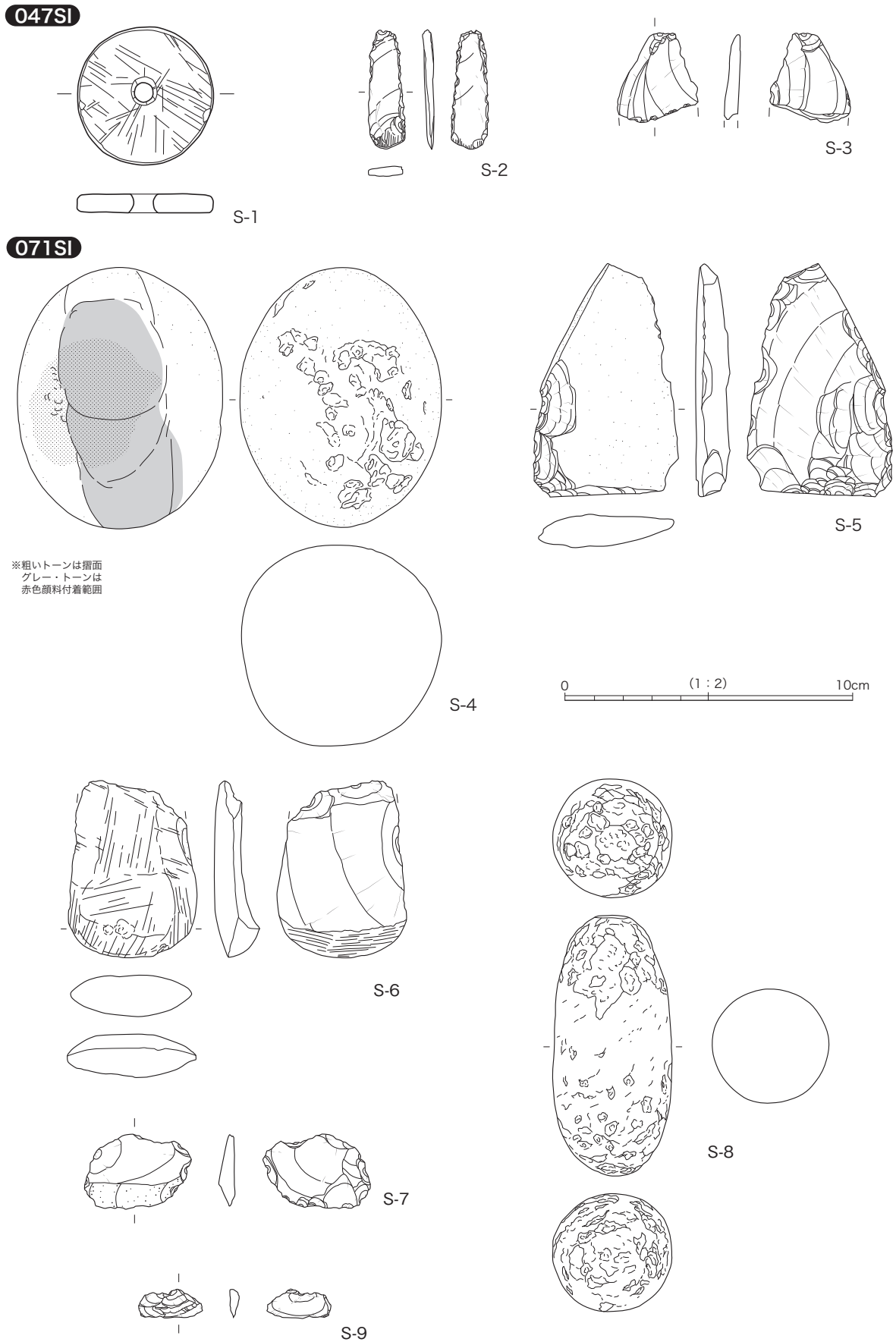


図26 出土石製品実測図(08区047・071SI・検出)

第4節 鉄製品

弥生時代後期（または古墳時代）の鉄製品として、鉄鏃、袋状鉄斧が各1点出土している。

鉄鏃 鉄鏃（M-1）は無茎三角形式で、鏃身の先端と一方の逆刺を欠損する。残存長3.4cm、残存幅2.7cmを計測し、やや大型の部類に属する。鏃身の厚さは1.5mmとかなり薄く、他のほとんどの無茎鉄鏃と同様、鑿切りによる切断のみで製作されている[村上1998]。判然としないが、X線写真【写真1】によって鏃身に1小孔を確認した。竪穴建物047SI出土で、弥生時代後期後葉に帰属する。

鉄斧 袋状鉄斧（M-2）は袋部から身部にかけてわずかに窄まり、身部から刃部にかけて撥状に広がる無肩鉄斧で、全長9.5cm、刃部側の最大幅4.0cm、袋部側の最大幅3.4cm、最小幅3.1cm、厚さは最大（袋部）で2.1cmを計測する。袋部の横断面は幅と厚さの比がおおよそ5：3の略長方形で、袋部の閉じ合わせは密着せず、0.6cm程度空いている。古瀬清秀による分類[古瀬1991]で有袋鉄斧B類、全長7～14cm、刃部幅3～6cmのB2類に相当する。遺構に伴わず時期比定は難しいが、遺跡が弥生時代後期を主体とすること、近隣の石座神社遺跡や上ノ川遺跡等、古墳時代前期の集落遺跡における鉄製品の出土から、弥生時代後期に帰属する可能性がより高いと思われる。（早野浩二）

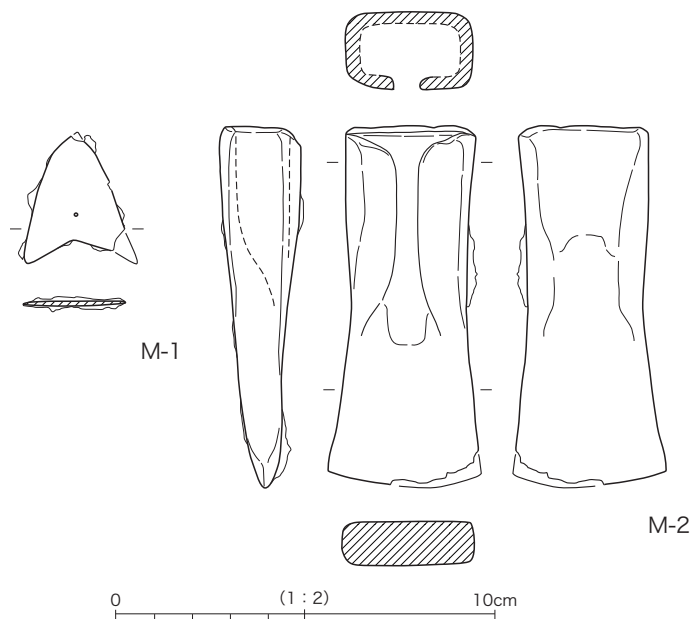


図27 出土鉄製品実測図(08区047・09区201NR)

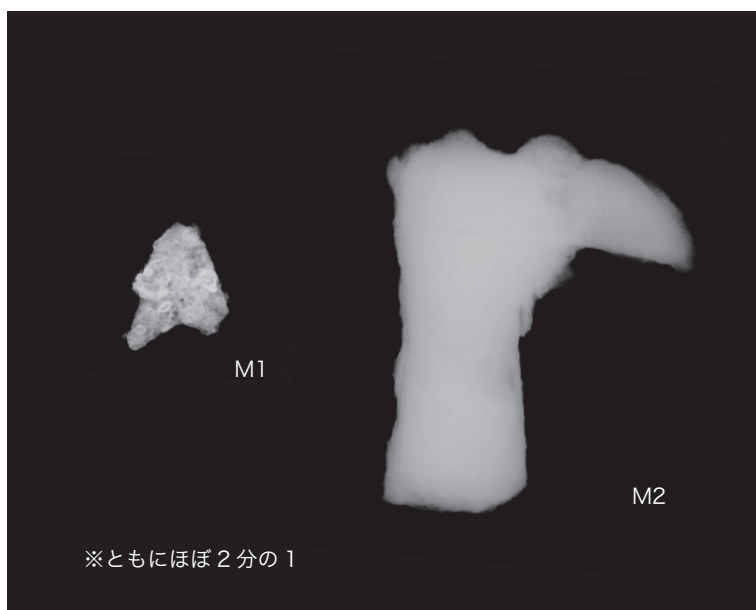


写真1 出土鉄製品X線画像

表4 出土土器一覧(1)

遺物番号	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土・石材	備考	調査区	遺構
E-1	弥生土器	高杯	(21.3)	(4.1)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母多量	弥生後期	YT08	045SI
E-2	弥生土器	高杯	(20.2)	(5.2)	—	黒褐色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	045SI
E-3	弥生土器	甕	(20.1)	(6.4)	—	灰黄褐色	砂粒φ1mm若干・金雲母多量	弥生後期	YT08	045SI
E-4	弥生土器	高杯	(18.6)	(4.3)	—	にぶい赤褐色	砂粒少量・金雲母多量	弥生後期	YT08	046SI
E-5	弥生土器	高杯	(18.6)	(6.0)	—	明赤褐色	砂粒φ7mm若干	弥生後期	YT08	046SI
E-6	弥生土器	高杯	—	(1.75)	(14.0)	にぶい橙色	砂粒少量・金雲母多量	弥生後期	YT08	46SI
E-7	土師器	高杯	—	(2.8)	(16.8)	橙色	砂粒φ5mm有り・金雲母多量	古墳前期	YT08	046SI
E-8	土師器	高杯	—	(6.2)	(13.0)	明褐色	砂粒φ2mm若干・金雲母多量	古墳前期	YT08	046SI
E-9	土師器	壺	(8.8)	(1.9)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母少量	古墳前期	YT08	046SI
E-10	土師器	壺	12.4	17.2	—	にぶい橙色	砂粒φ5mm有り・金雲母多量	古墳前期	YT08	046SI
E-11	土師器	壺	(15.2)	29.7	(5.8)	明褐色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	古墳前期	YT08	046SI
E-12	土師器	台付甕	(22.0)	(4.0)	—	にぶい黄褐色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	古墳前期	YT08	046SI
E-13	土師器	壺	8.5	10.8	4.1	にぶい褐色	砂粒少量・金雲母多量	古墳前期	YT08	077SK(046SI内)
E-14	弥生土器	高杯	(25.8)	(3.2)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm若干・金雲母若干	弥生後期	YT08	047SI
E-15	弥生土器	高杯	—	(2.5)	—	明赤褐色	砂粒φ3mm多量・金雲母若干	弥生後期	YT09	047SI
E-16	弥生土器	高杯	(22.7)	(10.7)	—	明黄褐色	砂粒φ5mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-17	弥生土器	高杯	—	(5.7)	(12.0)	橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-18	弥生土器	高杯	—	(5.3)	—	橙色	砂粒φ5mm有り・金雲母少量	弥生後期	YT08	047SI
E-19	弥生土器	高杯	—	(10.8)	—	明黄褐色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-20	弥生土器	高杯	(8.8)	(4.1)	—	にぶい橙色	砂粒少量・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-21	弥生土器	高杯	(12.0)	(4.3)	—	にぶい橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT09	047SI
E-22	弥生土器	高杯	(10.2)	(3.2)	—	橙色	砂粒φ1mm有り・金雲母少量	弥生後期	YT08	047SI
E-23	弥生土器	高杯	—	(3.0)	(10.4)	黒色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT09	047SI
E-24	弥生土器	高杯	—	(4.8)	(7.7)	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-25	弥生土器	壺	(20.0)	(2.9)	—	橙色	砂粒φ2mm若干・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-26	弥生土器	壺	(17.1)	(2.3)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母若干	弥生後期	YT09	047SI
E-27	弥生土器	壺	—	(3.6)	5.7	明黄褐色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-28	弥生土器	台付甕	(20.8)	(11.3)	—	橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT09	047SI
E-29	弥生土器	甕	(20.6)	(4.0)	—	黒褐色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-30	弥生土器	台付甕	—	(4.1)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ4mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-31	弥生土器	器台	6.2	3.2	3.5	褐灰色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	047SI
E-32	弥生土器	高杯	(23.4)	18.9	(16.4)	にぶい黄色	砂粒φ3mm多量・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI
E-33	弥生土器	高杯	(27.4)	20.4	15.5	黄橙色	砂粒φ5mm多量・金雲母少量	弥生後期	YT08	071SI
E-34	弥生土器	高杯	(21.0)	(4.2)	—	にぶい黄褐色	砂粒φ1mm有り	弥生後期	YT08	071SI
E-35	弥生土器	高杯	—	(16.6)	(14.8)	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI
E-36	弥生土器	高杯	(10.1)	(6.0)	—	橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-37	弥生土器	高杯	10.3	(8.0)	—	橙色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-38	弥生土器	高杯	—	(7.4)	11.4	にぶい褐色	砂粒φ1mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-39	弥生土器	壺	(22.0)	(5.4)	—	橙色	砂粒φ2mm若干・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-40	弥生土器	壺	13.8	(4.6)	—	にぶい橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-41	弥生土器	甕	(14.6)	(20.3)	—	橙色	砂粒φ5mm多量・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI
E-42	弥生土器	壺	—	(17.9)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-43	弥生土器	壺	—	(6.25)	—	橙色	砂粒少量・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI
E-44	弥生土器	壺	—	(2.9)	5.2	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-45	弥生土器	甕	(18.0)	(7.5)	—	黒褐色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-46	弥生土器	小型台付甕	13.0	(11.9)	—	灰黄褐色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI、038SK、025SK
E-47	弥生土器	甕	—	(12.5)	—	にぶい黄色	砂粒φ1mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI、038SK
E-48	弥生土器	甕	(15.2)	(7.2)	—	灰黄褐色	砂粒φ5mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI、091SD
E-49	弥生土器	台付甕	—	(3.65)	—	にぶい黄褐色	砂粒φ2mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI
E-50	弥生土器	台付甕	—	(4.0)	(6.2)	浅黄色	砂粒φ2mm有り・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI
E-51	弥生土器	高杯	(24.3)	(4.6)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母少量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-52	弥生土器	高杯	(27.8)	(3.2)	—	黒褐色 にぶい黄褐色	砂粒少量・金雲母少量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-53	弥生土器	壺	—	(8.8)	(17.6)	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm若干・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-54	弥生土器	高杯	(8.2)	(3.0)	—	にぶい褐色	砂粒φ2mm有り・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-55	弥生土器	高杯	(10.0)	(4.6)	—	橙色	砂粒少量・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-56	弥生土器	鉢	(12.4)	(8.2)	4.9	暗オリーブ灰色	砂粒φ2mm有り・金雲母若干	弥生後期	YT08	071SI(093SK)、トレンチ

吉竹遺跡

表5 出土土器一覧(2)

遺物番号	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土・石材	備考	調査区	遺構
E-57	弥生土器	壺	(31.4)	(8.0)	—	橙色	砂粒φ4mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-58	弥生土器	壺	(17.0)	(3.1)	—	橙色	砂粒φ5mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-59	弥生土器	甕	(20.0)	(2.8)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母少量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-60	弥生土器	壺	16.7	(12.7)	—	浅黄橙色	砂粒φ5mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-61	弥生土器	壺	—	(3.2)	6.9	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-62	弥生土器	甕	(16.0)	(3.8)	9	にぶい黄橙色	砂粒φ4mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-63	弥生土器	台付甕	—	(6.2)	8.2	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-64	弥生土器	台付甕	—	(4.3)	—	にぶい黄色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-65	弥生土器	台付甕	—	(5.1)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-66	弥生土器	台付甕	—	(7.0)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-67	弥生土器	台付甕	—	(2.8)	(4.5)	灰黄褐色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	071SI(093SK)
E-68	弥生土器	高杯	(20.0)	(3.2)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT09	203SI
E-69	弥生土器	高杯	—	(1.9)	—	にぶい橙色	砂粒φ2mm若干・金雲母多量	弥生後期	YT09	203SI
E-70	弥生土器	高杯	—	(5.8)	16.4	にぶい橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT09	203SI
E-71	弥生土器	壺	(15.6)	(9.0)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT09	203SI
E-72	弥生土器	壺	—	(6.4)	5.9	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm多量・金雲母若干	弥生後期	YT09	203SI
E-73	弥生土器	甕	(20.3)	(2.6)	—	灰黄褐色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT09	203SI
E-74	弥生土器	高杯	—	(4.4)	(10.9)	灰黄褐色	砂粒φ1mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT09	203SI
E-75	弥生土器	甕	(26.0)	(4.4)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	023SK
E-76	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	灰黄褐色	砂粒φ1mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT09	201NR
E-77	弥生土器	高杯	—	*12.3	15.65	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT09	201NR
E-78	弥生土器	高杯	—	(4.85)	—	橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母若干	弥生後期	YT09	201NR
E-79	弥生土器	壺	—	(8.5)	—	橙色	砂粒φ4mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT09	201NR
E-80	弥生土器	甕	(20.8)	(8.9)	—	灰黄褐色	砂粒φ2mm・金雲母多量	弥生後期	YT09	201NR
E-81	土師器	台付甕	(26.5)	(4.0)	—	にぶい橙色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	古墳前期	YT09	201NR
E-82	土師器	台付甕	(26.4)	(3.5)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	古墳前期	YT09	201NR
E-83	土師器	甕	(28.4)	(3.8)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ2mmあり・	古墳前期	YT09	201NR
E-84	土師器	器台	6.8	4.2	4.4	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm若干・金雲母多量	古墳前期	YT09	201NR
E-85	土師器	高杯	(18.4)	12	(12.6)	橙色	砂粒φ3mm若干・金雲母多量	古墳前期 YT09 YT08		201NR、検1
E-86	山茶碗	小皿	—	(1.4)	5.0	灰白色	砂粒少量	中世	YT09	201NR
E-87	土師器	小皿	(10.0)	1.9	(7.0)	灰白色	砂粒少量・金雲母少量	中世～近世	YT09	201NR
E-88	土師器	小皿	(10.3)	(1.9)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母多量	中世～近世	YT09	201NR
E-89	土師器	小皿	(10.0)	(2.0)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母多量	中世～近世	YT09	201NR
E-90	土師器	小皿	(8.8)	(2.5)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母多量	中世～近世	YT09	201NR
E-91	陶器	天目茶碗	(11.6)	(4.0)	—		砂粒少ない	近世	YT09	201NR
E-92	弥生土器	高杯	—	(8.2)	(7.8)	黄橙色	砂粒少量・金雲母若干	弥生後期	YT08	トレンチ
E-93	弥生土器	高杯	(17.0)	(5.7)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	検1
E-94	弥生土器	壺	(14.7)	(2.8)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	検1
E-95	弥生土器	壺	—	(7.6)	—	明黄褐色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	検1
E-96	弥生土器	壺	(10.0)	(3.65)	—	にぶい橙色	砂粒少量・金雲母多量	弥生後期	YT08	検1
E-97	弥生土器	壺	—	(2.1)	5.2	にぶい橙色	砂粒φ3mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	検1
E-98	弥生土器	甕	(24.4)	(4.5)	—	灰色	砂粒φ3mm有り・金雲母多量	弥生後期	YT08	検1
E-99	弥生土器	台付甕	—	(6.4)	(8.4)	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	トレンチ
E-100	弥生土器	台付甕	—	(4.9)	7.4	にぶい黄橙色	砂粒φ5mm多量・金雲母多量	弥生後期	YT08	トレンチ
E-101	縄文土器	深鉢	—	(8.9)	—	黒褐色	砂粒φ1mm有り・金雲母多量	縄文後期か	YT09	検1
E-102	弥生土器	甕	—	(5.5)	—	にぶい黄褐色	砂粒φ2mm多量	条痕文、弥生	YT09	検1
E-103	弥生土器	甕	—	(3.3)	—	にぶい褐色	砂粒少量・金雲母多量	T02.③層 上部、条痕 紋、弥生	YT08	試掘T02
E-104	弥生土器	高杯	(20.6)	(3.6)	—	橙色	砂粒φ2mm若干・金雲母多量	弥生後期	YT09	検1
E-105	弥生土器	高杯	—	(13.4)	(13.8)	にぶい黄褐色	砂粒φ2mm多い・金雲母多量	弥生後期	YT09	検1
E-106	弥生土器	高杯	—	(3.5)	(5.8)	明黄褐色	砂粒φ4mm若干・金雲母多量	弥生後期	YT09	検1
E-107	灰釉陶器	碗	(12.8)	(1.5)	—	灰オリーブ色	砂粒少量	平安	YT09	表土
E-108	山茶碗	碗	(14.0)	(4.0)	—	灰黄色	砂粒φ1mm多量	中世	YT09	検1
E-109	土師器	小皿	(8.3)	(1.9)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母多量	中世～近世	YT09	検1
E-110	土師器	甕	(30.0)	(2.2)	—	にぶい黄橙色	砂粒φ2mm多量・金雲母多量	擬清郷型、 中世前半	YT09	検1
E-111	土師器	内耳鍋	(28.5)	(4.0)	—	にぶい黄橙色	砂粒少量・金雲母少量	中世	YT09	表土
E-112	磁器	染付皿	—	(1.4)	(8.0)		砂粒なし	近世	YT09	検1

第4章 自然科学分析

第1節 吉竹遺跡と加原遺跡の地下層序と堆積年代

はじめに 新城市中央部に位置する吉竹遺跡および加原遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定の結果を報告する。

試料および分析方法 地下層序解析のため、調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。試料は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代、暦年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal 13）を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

（1）分析結果その1 深掘層序

吉竹遺跡にて1地点、加原遺跡にて2地点の計3地点でバックホーによる深掘を実施した。各地点の層序の特徴を以下に述べる。

吉竹遺跡 吉竹遺跡では08区の北側において深掘を行なった（図29）。地点1では深度約2mの層序断面を得た（図30）。下位層より、標高97.60～98.20mは長径10cmほどの礫を主体とする明褐色を呈する大礫層である。まれに巨礫が混じる。褐色の粘土やシルトなどの細粒な堆積物の中に、径2mmほどの細礫を含んだものを基質として充填する基質支持礫層である。礫は亜角礫を主とし、礫種としては領家帯深成岩類である新城トータル岩からなる。礫の風化は著しく、手ガリで簡単に崩せるいわゆるくさり礫状を呈する。礫は不淘汰で、堆積構造はみられない。本層下部（標高97.61m）で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高98.20～99.00mは明褐色を呈する細礫混じり



図28 吉竹遺跡と加原遺跡の位置図

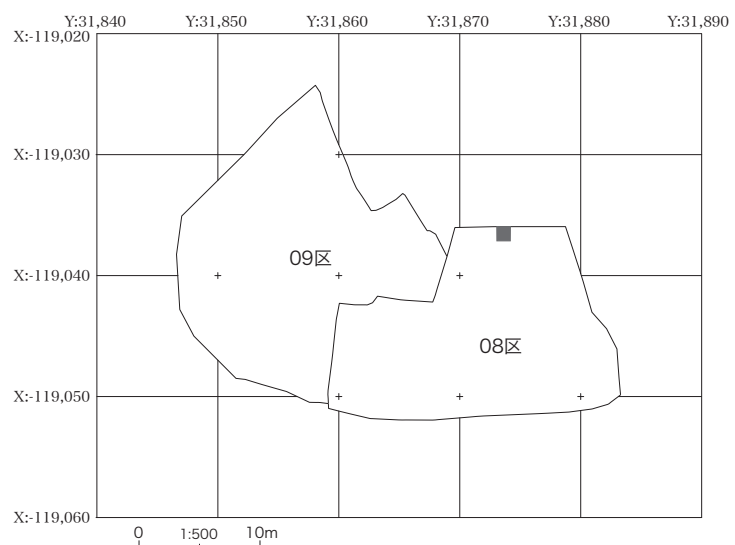


図29 吉竹遺跡08区における深掘実施地点

の粘土層である。塊状・均質で堆積構造はみられず、下位の礫層との地層境界は明瞭である。本層の下部（標高 98.21m）で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 99.00～99.06m は明褐色の細礫層である。基質には粘土が含まれる。基質支持礫層であり、堆積構造はみられない。下位層との層理面は不明瞭である。本層と下位層である粘土層との境界付近（標高 99.00m）が考古学的な検出面となる。本層の下部（標高 99.01m）で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 99.06～99.12m は褐色を呈する細礫層である。基質は下位層よりもさらに粘土成分が多く含まれ、基質支持礫層である。堆積構造はみられない。下位層である礫層との層理面は不明瞭であり、若干の色調の違いにより区分することができる。本層の下部（標高 99.07m）で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 99.12～99.36m は灰褐色の中礫混じり粘土層である。下位の礫層との層理面は不明瞭であり、含まれる礫の量により区分できる。堆積構造はみられない。標高 99.36～99.41m は灰色の細礫混じりシルト層である。下位の粘土層との層理面は不明瞭であり、若干の色調の違いにより区分できる。標高 99.41～99.75m は灰色を呈する細礫混じりのシルト層である。堆積構造はみられない。下位のシルト層との層理面は不明瞭であり、若干の色調の違いにより区分できる。本層の頂部（標高 99.75m）が現在の地表面となる。

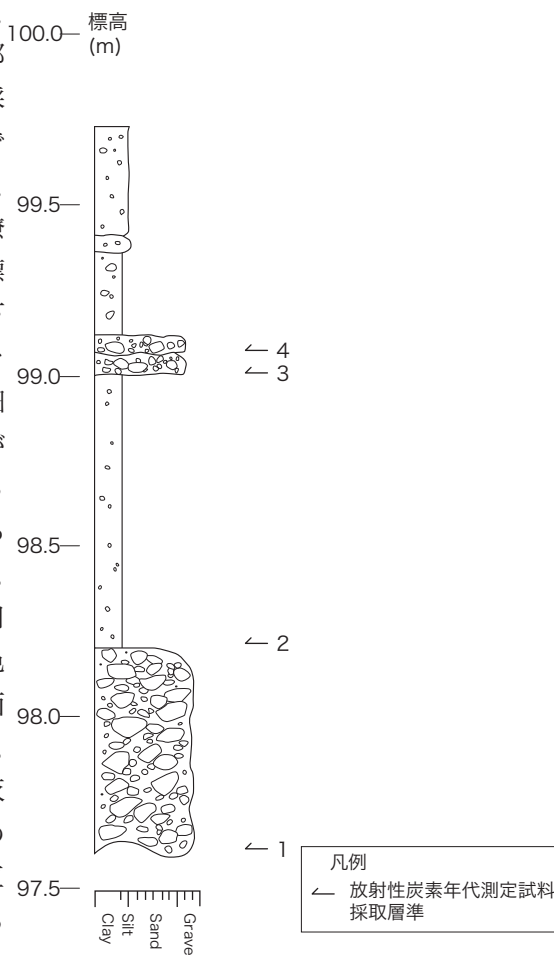


図30 吉竹遺跡柱状図

加原遺跡 吉竹遺跡より約 0.8km 東の加原遺跡では 08A 区で 1 地点（地点 1）、08B 区で 1 地点（地点 2）の計 2 地点で深掘を実施した（図 31）。地点 1 は調査区（08A 区）の東で行ない、深度約 3.5m の層序断面を得た（図 32）。下位層より、標高 76.05～76.10m は灰色の粘土層である。塊状で堆積構造は認められない。本層の標高 76.07m の層準で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 76.10～77.70m は灰褐色の中礫層からなる。基質は極粗粒砂からなる礫支持礫層である。堆積構造はみられない。本層と下位層である粘土層との層理面は明瞭である。標高 77.70～78.00m は褐色を呈する粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。本層の下部（標高 77.71m）で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 78.00～78.45m は中礫層である。基質は極粗粒砂からなる礫支持礫層であり、堆積構造はみられない。標高 78.45～79.06m は中礫層である。径 6cm ほどの礫を主体とする。西側へゆるく傾斜した板状の斜層理が認められる。径 18cm の粘土ブロックが含まれる場合もある。本層の下部（標高 78.47m）で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 79.06～79.60m は中礫層である。径 16cm ほどの粘土ブロックを含む。堆積構造はみられない。

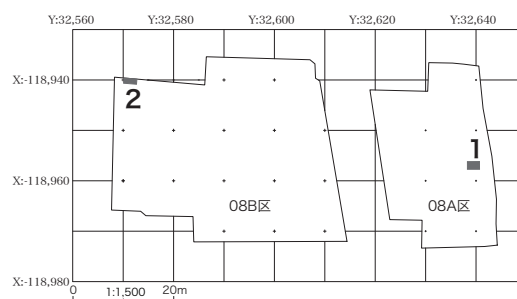


図31 加原遺跡深掘実施地点

本層は明治時代～大正時代の地層であることがわかっている。本層の頂部が検出面（標高 79.60m）である。

地点2は08B区の調査区北西端で行ない(図31)、深度約3.5mの層序断面を得た(図33)。下位層より、標高 80.05～81.50m は明褐色を呈する強風化の花崗岩類からなる。岩構造はみられない。固結度は極めて低く風化が進んでおり、手ガリにより簡単に崩されて、含まれる長石類の鉱物も指先で押しつぶすことができる。電力中央研究所のダム基礎基盤分類によればDランクにあたる。標高 81.50～82.05m は明褐色を呈する中礫層からなる。径 10mm 程度の中礫を主体とする。礫は亜円礫～亜角礫からなる基質支持礫層である。堆積構造はみられない。標高 82.05～82.40m は褐色のシルト層からなる。塊状で堆積構造はみられない。下位の礫層との境界は明瞭である。標高 82.40～82.49m は褐色の極粗粒砂層からなる。花崗岩類の風化に伴った石英や長石類の鉱物を主体とし、淘汰は不良である。堆積構造はみられない。標高 82.49～82.60m は黄褐色を呈する粘土層からなる。塊状で堆積構造はみられない。若干の砂粒子を含む。本層の標高 82.55m の層準より放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 82.60～82.90m は黒灰色の砂混じり粘土層である。塊状で若干の砂粒子を含む。本層の下部（標高 82.63m）で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 82.90～83.20m は黄褐色の粘土層である。堆積構造はみられず、塊状で若干の砂粒子を含む。本層の下部（標高

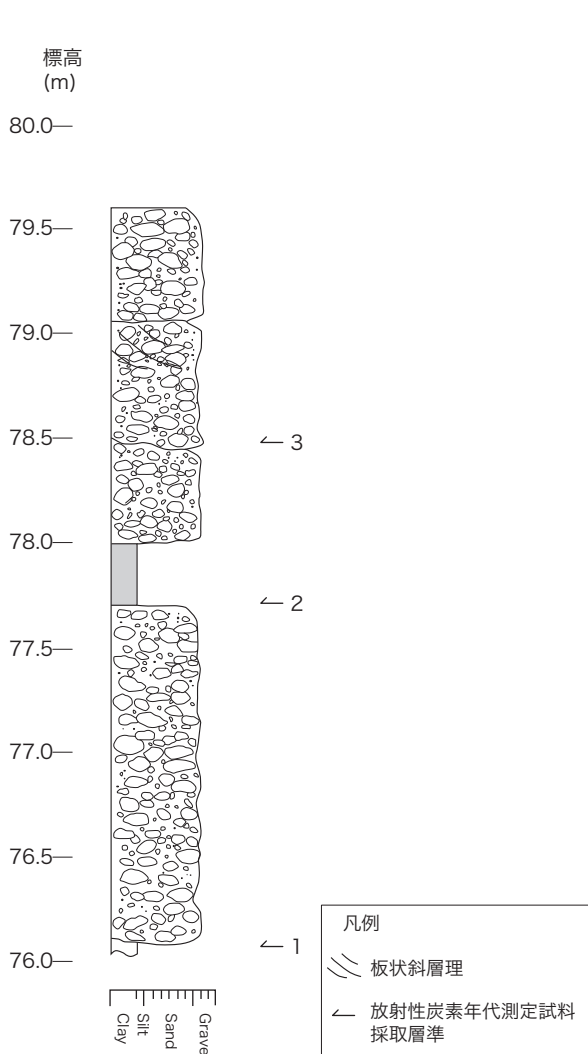


図32 加原遺跡地点1柱状図

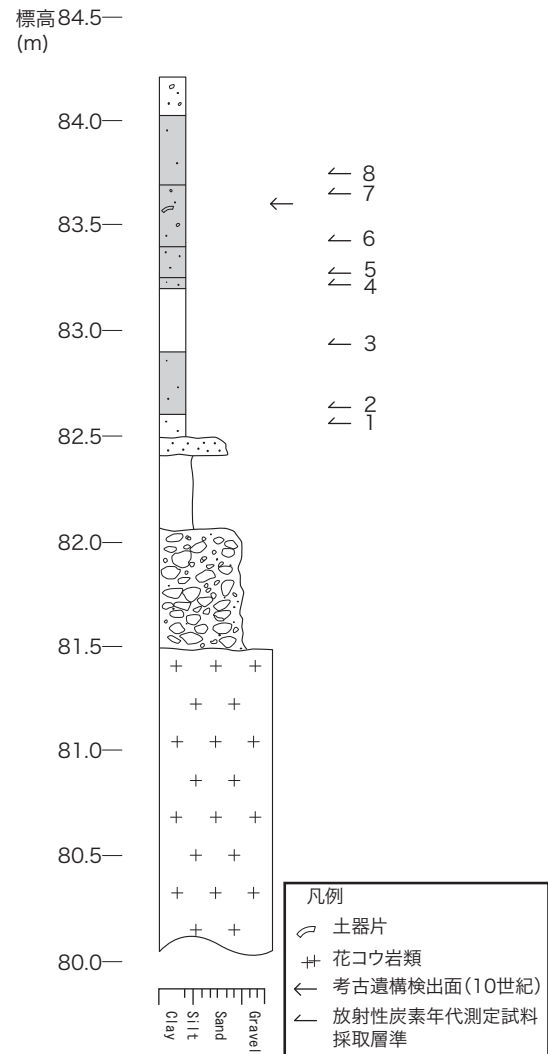


図33 加原遺跡地点2柱状図

82.93m) で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 83.20 ～ 83.25m は黒褐色を呈する砂混じり粘土層である。堆積構造はみられず、塊状で若干の砂粒子を含む。本層の下部(標高 83.22m) で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 83.25 ～ 83.40m は黒褐色の砂混じり粘土層からなる。塊状で若干の砂粒子を含む。本層の下部(標高 83.27m) で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 83.40 ～ 83.70m は黒褐色の砂～細礫混じりの粘土層からなる。本層上部では土器片が多く含まれるようになる。本層上部の標高 83.60m 付近が 10 世紀ごろの遺構検出面である。本層の下部(標高 83.43m) および上部(標高 83.65m) で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 83.70 ～ 84.02m は黒褐色の砂混じり粘土層からなる。下位層の粘土層よりも含まれる砂の量が減少することで区分される。本層の下部(標高 83.75m) で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。本層の上部(標高 84.00m) が 12 ～ 13 世紀ごろの検出面であるとの考古学的な所見がある。標高 84.02 ～ 84.20m は褐色の粘土ブロックが混じる粘土層である。本層は人工的な盛土であり、平成 9 年の耕地整理に伴うものようである。本層の頂部(標高 84.20m) が地表面である。

(2) 分析結果その2 放射性炭素年代測定

吉竹遺跡 吉竹遺跡では合計 4 試料の放射性炭素年代値を得た(表 6)。標高 99m 付近でみられる黒褐色粘土層を境として、地層から得られる数値年代は大きく 2 つに分かれる。標高 97.60 ～ 98.20m の大礫層の下底(標高 97.61m) で得た炭化物は 4448 - 4400 cal yrs BP (PLD-13956)、標高 98.20 ～ 99.00m の粘土層の下底(標高 98.21m) で採取した土壌が 5736 - 5610 cal yrs BP (PLD-13957) を、標高 99.00 ～ 99.06m の細礫層から採取した土壌(標高 99.01m) が 6896 - 6748 cal yrs BP (PLD-13958) の値であり、概ね 6000 年前～ 4000 年前代の値を示した。いっぽう、これらの地層を覆う標高 99.06 ～ 99.12m の黒褐色を呈する細礫層の下底(標高 99.07m) より採取した土壌は 1300 - 1256 cal yrs BP (PLD-13959) の値を示した。

加原遺跡 加原遺跡では地点 1 (08A 区)、地点 2 (08B 区) の 2 地点で計 11 試料の放射性炭素年代値を得た(表 7・表 8)。地点 1 (08A 区) では 3 試料の数値年代が得られ、下位層である標高 76.05 ～ 76.10m の灰色粘土層から採取された土壌が 31032 - 30656 cal yrs BP (PLD-26668)、標高 77.70 ～ 78.00m の褐色粘土層から採取された土壌が 30499 - 29697 cal yrs BP (PLD-26666) の値であり、いずれも 3 万年を超える数値年代を示した。いっぽう、それらの地層を覆う標高 78.45 ～ 79.06m の中礫層から採取した土壌は 5321 - 5280 cal yrs BP (PLD-26667) であった。地点 2 (08B 区) でも標高 83m 付近を境にして数値年代は大きく 2 つに分かれ、標高 82.49 ～ 82.60m の黄褐色粘土層の標高 82.55m の層準より採取した土壌が 14659 - 14130 cal yrs BP (PLD-26662)、標高 82.63 ～ 82.93m の黒灰色砂混じり粘土層の下部(標高 82.63m) で採取した土壌が 14140 - 13903 cal yrs BP (PLD-26663)、標高 82.90 ～ 83.20m の黄褐色粘土層の下底(標高 82.93m) より採取した土壌が 12644 - 12516 cal yrs BP (PLD-26656) の値を示し、1 万年を超える数値年代を示した。いっぽう、それらを覆う標高 83.20 ～ 84.02m までに認められる黒褐色を呈する砂・礫混じりの粘土層では標高 83.20 ～

表 6 吉竹遺跡における放射性炭素年代測定結果

試料	調査区	標高	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ C PDB (‰)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	08	97.61	巨礫混じり大礫層	炭化物	3958 ± 22	-27.53 ± 0.12	2500 - 2451 BC (60.5%) 2568 - 2519 BC (28.0%) 2378 - 2350 BC (4.3%) 2420 - 2405 BC (2.7%)	4448 - 4400 (60.5%) 4517 - 4468 (28.0%) 4327 - 4298 (4.3%) 4368 - 4354 (2.7%)	PLD - 13956(AMS)
2	08	98.21	細礫混じり粘土層	土壌	4957 ± 27	-25.55 ± 0.19	3788 - 3661 BC (95.4%)	5736 - 5610 (95.4%)	PLD - 13957(AMS)
3	08	99.01	明褐色細礫層	土壌	5994 ± 25	-26.17 ± 0.13	4947 - 4799 BC (95.4%)	6896 - 6748 (95.4%)	PLD - 13958(AMS)
4	08	99.07	褐色細礫層	土壌	1334 ± 19	-23.91 ± 0.14	650 - 695 AD (90.1%) 747 - 763 AD (5.3%)	1300 - 1256 (90.1%) 1204 - 1187 (5.3%)	PLD - 13959(AMS)

表7 加原遺跡 08A 区（地点1）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ C PDB (‰)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	1	08A	76.07	灰色粘土層	土壌	26591 ± 84	-25.05 ± 0.17	29084 - 28707 BC (95.4%)	31032 - 30656 (95.4%)	PLD - 26668(AMS)
1	2	08A	77.71	褐色粘土層	土壌	25869 ± 85	-23.23 ± 0.25	28550 - 27748 BC (95.4%)	30499 - 29697 (95.4%)	PLD - 26666(AMS)
1	3	08A	78.47	中礫層	土壌	4572 ± 21	-26.72 ± 0.19	3372 - 3332 BC (68.7%) 3215 - 3187 BC (13.2%) 3157 - 3127 BC (10.5%) 3487 - 3473 BC (3.0%)	5321 - 5280 (68.7%) 5164 - 5136 (13.2%) 5106 - 5076 (10.5%) 5436 - 5422 (3.0%)	PLD - 26667(AMS)

表8 加原遺跡 08B 区（地点2）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ C PDB (‰)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
2	1	08B	82.55	黄褐色粘土層	土壌	12354 ± 33	-26.78 ± 0.29	12710 - 12182 BC (95.4%)	14659 - 14130 (95.4%)	PLD - 26662(AMS)
2	2	08B	82.63	黒灰色砂混じり粘土層	土壌	12133 ± 28	-25.51 ± 0.18	12192 - 11954 BC (94.0%) 11941 - 11922 BC (1.4%)	14140 - 13903 (94.0%) 13890 - 13870 (1.4%)	PLD - 26663(AMS)
2	3	08B	82.93	黄褐色粘土層	土壌	10560 ± 30	-23.48 ± 0.24	10695 - 10567 BC (66.8%) 10551 - 10474 BC (28.6%)	12644 - 12516 (66.8%) 12500 - 12423 (28.6%)	PLD - 26656(AMS)
2	4	08B	83.22	黒褐色砂混じり粘土層	土壌	8323 ± 25	-24.09 ± 0.23	7485 - 7328 BC (95.4%)	9434 - 9276 (95.4%)	PLD - 26657(AMS)
2	5	08B	83.27	黒褐色砂混じり粘土層	土壌	7694 ± 24	-24.81 ± 0.26	6591 - 6473 BC (95.4%)	8540 - 8422 (95.4%)	PLD - 26658(AMS)
2	6	08B	83.43	黒褐色砂～細礫混じり粘土層	土壌	6781 ± 23	-24.67 ± 0.28	5720 - 5638 BC (95.4%)	7668 - 7587 (95.4%)	PLD - 26659(AMS)
2	7	08B	83.65	黒褐色砂混じり粘土層	土壌	4555 ± 19	-26.28 ± 0.20	3367 - 3327 BC (48.5%)	5316 - 5276 (48.5%) 5166 - 5126 (25.8%) 5109 - 5070 (21.1%)	PLD - 26660(AMS)
2	8	08B	83.75	黒褐色砂混じり粘土層	土壌	5066 ± 22	-27.64 ± 0.24	3951 - 3797 BC (95.4%)	5900 - 5746 (95.4%)	PLD - 26661(AMS)

83.25m の黒褐色の砂混じり粘土層の標高 83.22m の層準より採取した試料が 9434 - 9276 cal yrs BP (PLD-26657)、標高 83.40 ～ 83.70m の黒褐色を呈して砂～細礫に混じり土器片も含まれる粘土層の、標高 83.65m の層準より採取した試料が 5316 - 5276 cal yrs BP (PLD-26660) と、およそ 9000 年前から 5000 年前までの数値年代であった。

（3）考察—吉竹遺跡と加原遺跡の地下層序と堆積年代

吉竹遺跡と加原遺跡にて深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、吉竹遺跡の深掘層序と加原遺跡の調査区西側（地点2）で実施した深掘層序とはおおそ似ており、下位でみられる礫を主体とする粗粒な層相と、その上を覆う粘土を主とする細粒な層相とに大きく分けられた。下位でみられる礫層は大礫～中礫からなり、垂角礫を主として、堆積粒子がつくる配列にみられる方向性、専門的に言えばファブリック (fabric) は認めれず、淘汰度も悪く、礫と礫とが不規則に配列していた。このような礫の堆積の仕方は多量の降雨があったときに泥流となって礫を下流へ運ぶ土石流などで形成されたものである。この礫層の堆積年代について、吉竹遺跡の標高 97.60 ～ 98.20m の大礫層の標高 97.61m から採取した試料が 4448 - 4400 cal yrs BP (PLD-13956)、この礫層を覆う標高 98.20 ～ 99.00m の細礫の混じる粘土層の標高 98.21m より採取した試料が 5736 - 5610 cal yrs BP (PLD-13957) の値であった。上位層と下位層とで年代値の逆転が生じている。しかし、陸成堆積物では比較的良好に生じる現象でもあるため、少なくとも礫層はおおよそ 5000 年前～4000 年前代に堆積したことがわかった。いっぽう、調査地点の標高も堆積物が運ばれてくる水系もまったく異なるため単純な比較はできないが、加原遺跡においても調査区東側で実施した地点1の地下層序では標高 78.45 ～ 79.06m でみられる中礫層の標高 78.47m から採取した試料が 5321 - 5280 cal yrs BP (PLD-26667) の数値年代を示しており、吉竹遺跡の地点と同様に 5000 年前代に礫層が堆積していることがわかった。このことから、吉竹遺跡および加原遺跡の調査地点は高い水理エネルギーの環境下にあったことがわかる。加えて、加原遺跡の地点1の層序では 5000 年前代を示した礫層の上部には堆積構造として板状斜層理が認められたため、当時の調査地点付近には礫洲が形成される活動的な河川流路内であったことがわかる。

ところで、加原遺跡では約 1 万年前よりも古い数値年代を示す層準もみられた。例えば、調査区東の地点1では標高 76.10 ～ 77.70m に中礫層がみられ、この礫層の直下には灰色を呈する粘土層が確

認められた。この粘土層の標高 76.07m から採取した土壌の放射性炭素年代は 31032 - 30656 cal yrs BP (PLD-26668) と 3 万年を超える数値年代が得られた。また、先の中礫層を標高 77.70 ~ 78.00m の褐色を呈する粘土層が覆っており、本層の下部 (標高 77.71m) より採取した土壌も 30499 - 29697 cal yrs BP (PLD-26666) と、3 万年を超える数値年代が得られており、完新統の下位には更新統が分布していることがわかった。調査区の西の地点 2 では、標高 82.49 ~ 82.60m の黄褐色を呈する粘土層から標高 84.20 の地表まで層厚およそ 1.7m の細粒な粘土層から構成された。これらの粘土層ユニットの下部において、粘土層の標高 82.55m の層準から採取した土壌の放射性炭素年代が 14659 - 14130 cal yrs BP (PLD-26662)、標高 82.63m の層準から採取した土壌が 14140 - 13903 cal yrs BP (PLD-26663)、標高 82.93m の層準から採取した土壌が 12644 - 12516 cal yrs BP (PLD-26656) と、14000 年前 ~ 12500 年前代の数値年代であり、調査区内の地下には更新統堆積物が分布していることがわかった。調査地点は豊橋平野の最奥部 (北部) にあたり、本地域の地形や地質については土 (1960)、町田・大倉 (1960)、木村ほか (1981, 1982)、木村 (1988) など、豊川中流 ~ 下流域の段丘区分と堆積物に関する多くの研究がなされている。木村ほか (1981) および木村ほか (1982) によれば豊川の右岸側に分布する更新統 ~ 完新統は、中生代白亜紀の領家深成岩類や領家変成コンプレックスを不整合に覆って下位層より高位段丘を構成する信玄礫層とさらにその上を覆う矢部礫層、高位段丘構成層を覆う足山田礫層、中位段丘下位面を構成する新城礫層、本礫層を不整合に覆う上長山礫層、その上を不整合に覆う低位段丘上位面の構成層である石田礫層、さらにその上を不整合に覆う低位段丘下位面の構成層である牧野礫層に区分されている。木村ほか (1981, 1982) によって提示された地質図をみると、今回の調査地点は高位段丘構成層と完新統が分布するとの記載がされている。今回の調査において確認された堆積物から約 3 万年 ~ 1 万年前の更新統堆積物が分布していることがわかり、木村ほか (1981, 1982) が報告した中礫 ~ 大礫を主とし基質に中粒砂 ~ 粗粒砂を含むという中位段丘下位面の構成層である新城礫層の特徴と類似する。いずれにせよ、完新統に覆われた更新統堆積物の地下における分布状況について不明であった場所において、具体的な数値年代により地下での更新統堆積物の分布が捉えられ、新たな知見が得られた。

謝辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤 茂氏・安昭 炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏・小林克也氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

【文献 (第 4 章第 1 節のみ)】

- 木村 一朗, 1988, 第 5 章 第四系 (5) 豊橋平野地域, (6) 渥美半島地域, 日本の地質 5 中部地方 II, 共立出版, 171-174
- 木村 一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1981, 豊川中流および下流の段丘と更新統 (その 1, 段丘面), 愛知教育大学研究報告 (自然科学編), vol. 30, 221-232
- 木村 一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1982, 豊川中流および下流の段丘と更新統 (その 2, 段丘堆積層), 愛知教育大学研究報告 (自然科学編), vol. 31, 195-210
- 町田 貞・大倉陽子, 1960, 豊川中・下流の段丘地形, 地理学評論, 33, 551-563
- 土 隆一, 1960, 渥美半島周辺の第四系の地史学的問題, 第四紀研究, vol.1, 193-211

第2節 放射性炭素年代測定

はじめに 吉竹遺跡より検出された木材について、(株)パレオ・ラボに委託して加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行っている【第3節】。本節は、同社AMS年代測定グループが報告2回分をもとに永井が再構成したものである。

試料と方法 試料は、竪穴建物047SI出土1点(試料No.3:PLD-25881)、同071SI出土2点(試料No.4:PLD-25882、試料No.7:PLD-25883)の、計3点の炭化材と、流路201NR出土の自然木である(PLD-16373)。測定試料の情報、調製データは表9・10のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定し、得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果 表11・12に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図34に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。 ^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 ^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: Intcal09)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察 以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、遺構ごとに結果を整理する。なお、暦年代と土器編年との対応関係については赤塚(2009)を参照した。

表9 測定試料および処理(1)

	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-25881	遺構: 047SI グリッド: 10I8n 試料No. 3	種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外 採取部位: 外側3年輪分 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-25882	遺構: 071SI グリッド: 10I8o 試料No. 4	種類: 炭化材(トネリコ属シオジ節) 試料の性状: 最終形成年輪 採取部位: 外側5年輪分 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-25883	遺構: 071SI グリッド: 10I9p 試料No. 7	種類: 炭化材(イネ科) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

表10 測定試料および処理(2)

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-16373	遺跡名: 吉竹遺跡 グリッド: 10I8K 遺構: 201NR	試料の種類: 生材(ツブラジイ根材) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)

047SIの試料No.3 (PLD-25881)は、57-139 cal AD (94.1%)、160-165 cal AD (0.4%)、197-206 cal AD (0.9%)で、1世紀中頃～3世紀初頭の暦年代を示した。これは、弥生時代後期～古墳時代早期に相当する。試料No.3は、最終形成年輪を欠く炭化材である。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。よって試料No.3は古木効果の影響を受けており、枯死・伐採年代は測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

071SIの試料No.4 (PLD-25882)は21-125 cal AD (95.4%)、試料No.7 (PLD-25883)は53-131 cal AD (95.4%)で、1世紀前半～2世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期に相当する。試料No.4は最終形成年輪が残っており、試料No.7は一年生の植物であるイネ科であるため、測定結果は枯死・伐採年代に相当する。

ただし、1世紀から3世紀は日本産樹木が数十～100 14C yr、系統的に古い炭素年代を示すことが知られている(Sakamoto, 2003; 尾崎, 2009)。今回、IntCal13(欧米産樹木で作成)で校正した暦年代範囲は、見かけ上、実際の年代よりも数十から100年程度古い年代を示している可能性がある。したがって、将来日本産樹木から作成されたデータセットで校正し直した場合、今回の測定試料の暦年代範囲は、より新しい方に動く可能性がある。

試料No.5は、1 σ 暦年代範囲において751-701 cal BC(22.5%)、696-687 cal BC(4.1%)、667-637 cal BC(14.0%)、621-614 cal BC(2.6%)、594-538 cal BC(25.0%)、2 σ 暦年代範囲において764-680 cal BC(31.9%)、673-507 cal BC(60.4%)、461-451 cal BC(0.9%)、440-418 cal BC(2.2%)の範囲であった。2 σ 暦年代範囲に着目すると、紀元前8世紀～紀元前5世紀の範囲を示し、小林謙一(2008、2009)、小林青樹(2008)、中村(2008)、山本(2007)を参照すると、縄文時代晩期末に相当する。

参考文献(第4章第2節)

- 赤塚次郎(2009) 弥生後期から古墳中期(八王子宮宮式から宇田式期)の暦年代, 日本文化財科学会第26回大会実行委員会編「日本文化財科学会第26回大会研究機関発表要旨集」: 14-20, 日本文化財科学会。
- 尾崎大真(2009) 日本版校正曲線の作成と新たな課題, 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 4-8, 雄山閣。
- Sakamoto, M., Imamura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T. and Sahara, M. (2003) Radiocarbon Calibration for Japanese Wood Samples. Radiocarbon, 45, 81-89.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 小林謙一(2008) 縄文時代の暦年代, 小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2-歴史のものさし-」: 257-269, 同成社。
- 小林謙一(2009) 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣。
- 小林青樹(2008) 浮線網文土系土器, 小林達雄編「総覧縄文土器」: 748-755, アムプロモーション。
- 中村健二(2008) 凸帯文土系土器(中四国・近畿・東海地方), 小林達雄編「総覧縄文土器」: 798-805, アムプロモーション。
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.
- 山本直人(2007) 東海・北陸における弥生時代の開始年代, 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ」: 35-44, 雄山閣。

表 11 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果 (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{O}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	‰C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	‰C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-25881 047SI 試料No. 3	-27.64 $\pm$ 0.29	1895 $\pm$ 19	1895 $\pm$ 20	84AD (68.2%) 126AD	57AD (94.1%) 139AD 160AD (0.4%) 165AD 197AD (0.9%) 206AD
PLD-25882 071SI 試料No. 4	-31.68 $\pm$ 0.26	1937 $\pm$ 19	1935 $\pm$ 20	28AD (11.2%) 39AD 49AD (57.0%) 84AD	21AD (95.4%) 125AD
PLD-25883 071SI 試料No. 7	-10.89 $\pm$ 0.28	1911 $\pm$ 20	1910 $\pm$ 20	70AD (31.9%) 90AD 99AD (36.3%) 124AD	53AD (95.4%) 131AD

表 12 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果 (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	‰C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	‰C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-16373	-28.94 $\pm$ 0.29	2473 $\pm$ 21	2475 $\pm$ 20	751BC (22.5%) 701BC 696BC (4.1%) 687BC 667BC (14.0%) 637BC 621BC (2.6%) 614BC 594BC (25.0%) 538BC	764BC (31.9%) 680BC 673BC (60.4%) 507BC 461BC (0.9%) 451BC 440BC (2.2%) 418BC

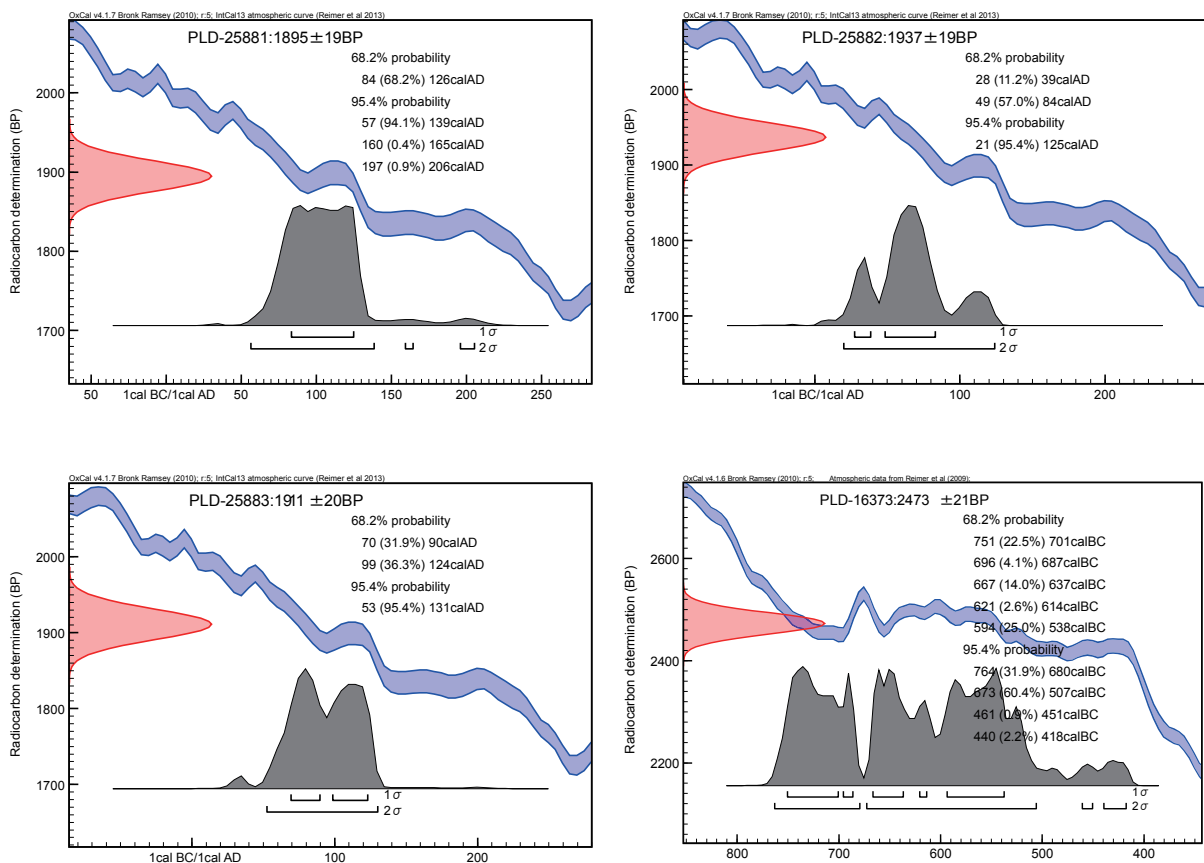


図 34 放射性炭素年代測定値と暦年校正図

第3節 樹種同定

はじめに 吉竹遺跡で検出された木材について、(株)パレオ・ラボに委託して樹種同定を行なった。なお、同じ木材を用いて放射性炭素年代測定を行っている【第2節】。本節は、小林克也（試料 No.3・4・7）と黒沼保子（試料 No. 5）が提出した報告を永井が再構成したものである。

試料と方法 試料は、08 区竪穴建物 047SI から 1 点、071SI から 2 点の、計 3 点の出土炭化材と、09 区流路 201NR から出土した木材 1 点（No.5）である。出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果では、047SI の試料 No.3 は弥生時代後期～古墳時代早期、071SI の試料 No.4 と試料 No.7 は弥生時代後期に相当する暦年代を示した。前者 3 点の確認可能な試料については、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、剃刀と手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。また、流路 201NR から出土した木材 1 点（No.5）は、剃刀を用いて試料の 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

結果 同定の結果、広葉樹であるコナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）とトネリコ属シオジ節（以下シオジ節と呼ぶ）、単子葉であるイネ科の 3 分類群がみられた。047SI ではコナラ節が 1 点、071SI ではシオジ節とイネ科が各 1 点産出した。また、No.5 にはツブラジイであった。ツブラジイを含むシイ属は暖帯の常緑広葉樹林の高木層における代表種であり、海岸沿いでシイ・タブ林を形成することが多い（宮脇，1977）。当遺跡周辺は常緑樹林帯に属しており、自然植生とも一致する。

同定結果を表 1 に示し、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus プナ科 写真 2 1a-1c(No.3)

年輪のはじめに大型の道管が 1～3 列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

(2) トネリコ属シオジ節 Fraxinus sect. Fraxinuster モクセイ科 写真 2 2a-2c(No.4)

年輪のはじめに大型の道管が 2～3 列並び、晩材部では急に径を減じた道管が、単独ないし 2～数个複合して疎らに散在する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1 列が直立する異性で、1～3 列となる。トネリコ属シオジ節にはシオジとヤチダモがあり、現在の植生ではシオジは関東以西の温帯に分布し、ヤチダモは中部以西の亜寒帯から温帯の、河岸や湿地などの肥沃な湿潤地に分布する落葉高木の広葉樹である。材の性質は、シオジとヤチダモともに中庸ないしやや重硬で、乾燥は比較的容易、切削加工等は容易である。

表 13 吉竹遺跡出土炭化材の樹種同定結果

No.	グリッド	遺構名	樹種	残存半径 (cm)	残存 年輪数	備考	年代 測定番号
3	10I8n	047SI	コナラ属コナラ節	－	－	複数点あり 同一樹種	PLD-25881
4	10I8o	071SI	トネリコ属シオジ節	1.3	14	複数点あり 同一樹種	PLD-25882
7	10I9p	071SI	イネ科	－	－	複数点あり 同一樹種 中実 直径0.5cm	PLD-25883

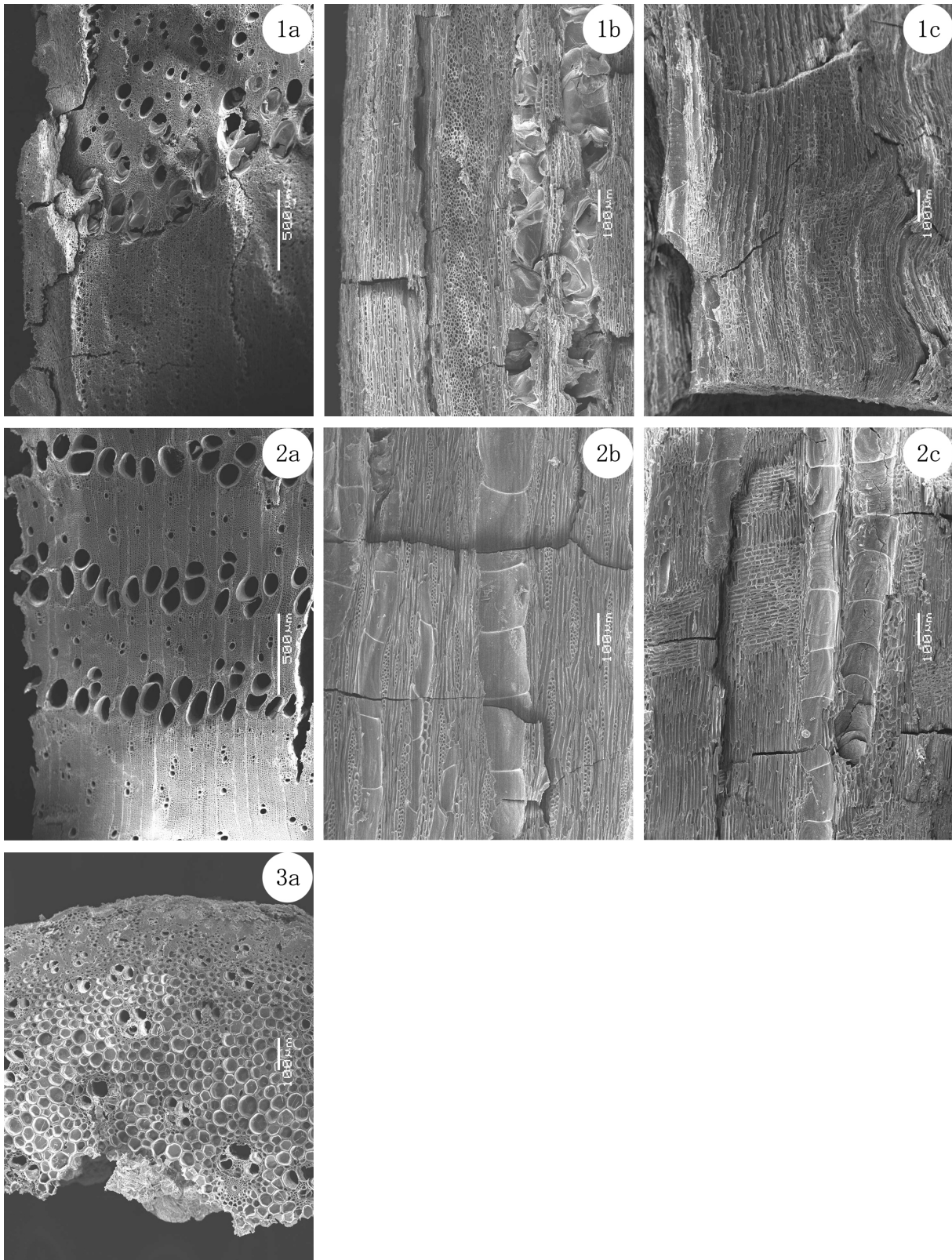


写真2 吉竹遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. コナラ属コナラ節 (No.3)、2a-2c. トネリコ属シオジ節 (No.4)、3a. イネ科 (No.7)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

(3) イネ科 Gramineae 写真2 3a(No.7)

向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する单子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。イネ科はタケ亜科やキビ亜科など7亜科がみられる单子葉植物であるが、対照標本が少なく、同定には至っていない。

(4) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 写真3 1a-1c

環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きいのが接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が火炎状に配列する。軸方向柔組織は短接線状で、道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。横断面において道管の配列がやや不明瞭であり、根に近い部材であると思われる。ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で割裂性・乾燥は中庸、耐久性は著しく低い。

考察 047SI出土の炭化材はコナラ節、071SI出土の炭化材はシオジ節とイネ科であった。047SIのコナラ節と071SIのシオジ節の用途は不明だが、焼けた建築部材などの可能性がある。またイネ科は、071SIの北壁付近において並んだ状態で出土しており、竪穴住居跡の屋根材や壁材などであった可能性が高い。コナラ節とシオジ節は、共に重硬で強度が強いという材質を持つ（伊東ほか，2011）。

豊田市の川原遺跡では、弥生時代中期後半である2軒の竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定が行われている。97BCD区SB201ではコナラ節が多くみられ、97BCD区SB211ではコナラ節とコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）が比較的多く、トネリコ属も1点みられた（植田，2001）。クヌギ節も重厚な樹種であり（伊東ほか，2011）、川原遺跡では重厚な材が多くみられた。そのため両遺跡では、炭化材が建築部材であったとすれば、遺跡周辺の森林に生育する重厚な樹種を選択的に利用していた可能性があり、壁材または屋根材にはイネ科の稈を利用していたと考えられる。（本項のみ小林克也）

参考文献（第4章 第3節）

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

植田弥生（2001）川原遺跡の焼失家屋97BCD区SB201およびSB211から出土した炭化材樹種同定，愛知県埋蔵文化財センター編「川原遺跡 第3分冊」：27-32，愛知県埋蔵文化財センター。

宮脇昭（1977）日本の植生，535p，学研。

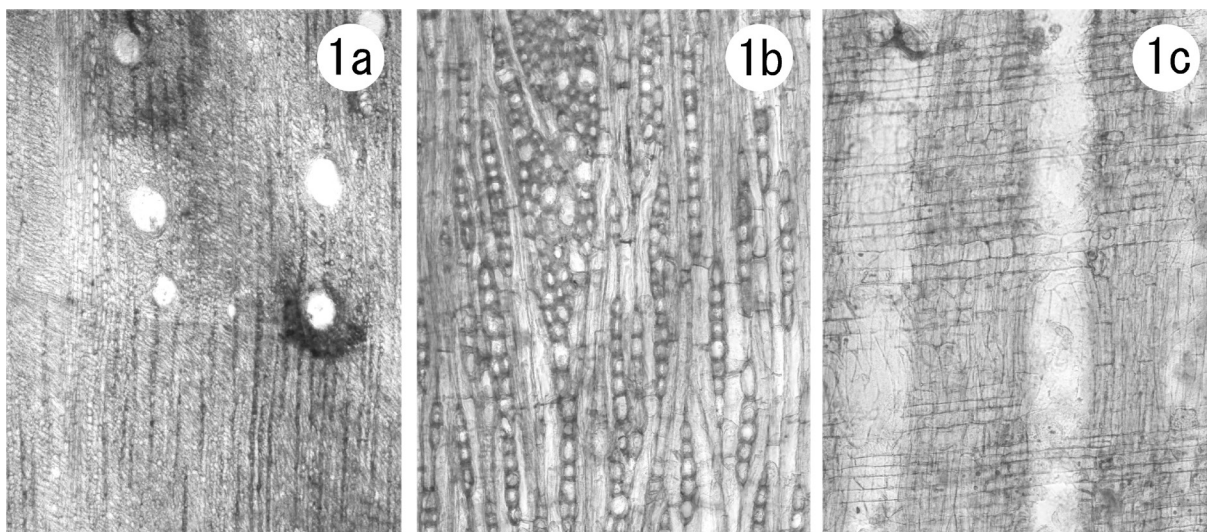


写真3 吉竹遺跡出土材の光学顕微鏡写真 1a-1c. ツブラジイ

a: 横断面（スケール=500 μm），b: 接線断面（スケール=100 μm），c: 放射断面（スケール=100 μm）

第4節 蛍光X線分析

はじめに 本節では、吉竹遺跡08区竪穴建物071SIから出土した石器(S-4)に付着した赤色顔料の蛍光X線分析結果について報告する。

試料および分析方法 分析を行った試料は、S-004に付着する赤色顔料である。この赤色の物質をセロハンテープを用いて、石器より剥離し、測定試料とした。測定は3箇所で行った。測定機器は(株)堀場製作所製XGT-5000を用い、測定条件は、X線管電圧30kV、測定時間500秒、照射径100 μ m、雰囲気は大気である。

測定結果 測定の結果を図35に示す。赤色顔料で認められた元素は、Si(ケイ素)、S(硫黄)、K(カリウム)、Ti(チタン)、Fe(鉄)である。このことから、石器に付着していたものは、鉄を主成分とするベンガラであると判断できる。ベンガラについては、沼沢地などにみられる沈殿褐鉄鉱(高師小僧)を焚火で長時間加熱し、粉碎して生成するとした例が挙げられている(赤星 1962)。また近年の製鉄の材料に関する研究において、タタラの還元実験などから、濃尾平野北西部に位置する岐阜県大垣市の金生山を産地とする見解が示されている(金生山赤鉄鉱研究会,2003)。この金生山の赤鉄鉱にはAs(ヒ素)やCu(銅)が微量に含まれていることが特徴とされている。しかし、今回の分析からは、AsもCuも検出されていないこと、赤色顔料の原材料が赤鉄鉱であることの形状の確認ができなかったことから、産地を推定するには至らなかった。(堀木真美子)

【参考文献】

赤星直忠 1962『横須賀市博物館報告』第6号

金生山赤鉄鉱研究会(2003) 金生山の赤鉄鉱と日本古代史 .56-84.

測定試料:S004

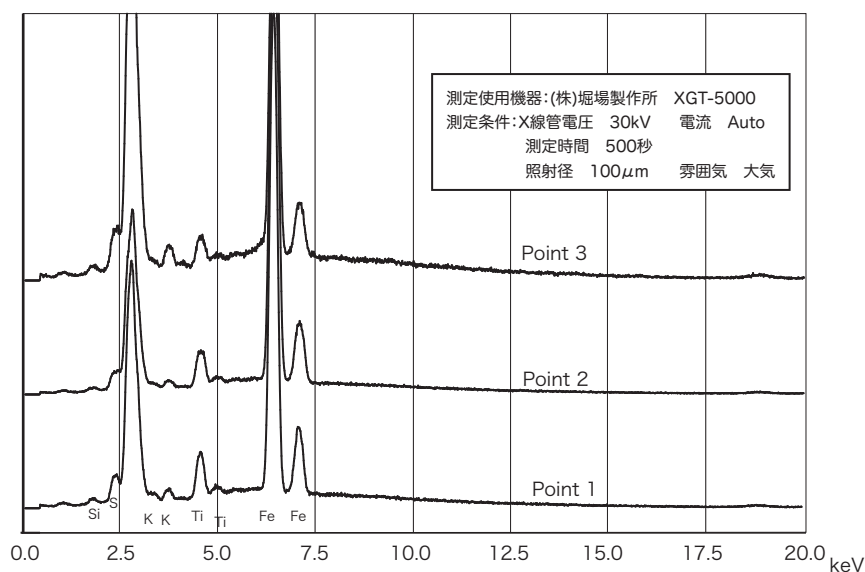
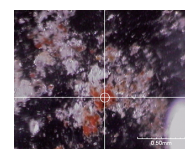
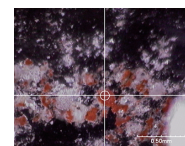


図35 赤色顔料のスペクトル図

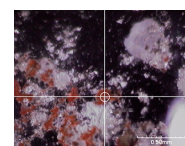
測定点写真



Point 3



Point 2



Point 1

第5章 考察と総括

第1節 吉竹遺跡における集落の規模と変遷

はじめに 吉竹遺跡における今次発掘調査の成果は、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物からなる集落の遺構と遺物が検出されたことである。個別の遺構と遺物については第2・3章で述べたとおりであるが、それらは全く同時に存在したものではなく、少しずつ時間差をもって使用・廃絶したものである。そこで本節では報告の総括として、地形的観点から類推される遺跡の規模と、遺構個別の時期を確認しながらそれらの変遷を提示することとしたい。

集落の立地と規模 第1章で述べたように、吉竹遺跡は丘陵・山地から河川が段丘地帯へ抜ける谷の入り口に立地している。したがって段丘面上であれば一定の平坦面が存在するのに対して当該遺跡の場合、川から背後の丘陵・山地斜面までの距離がさほどなく、大宮川に沿って横方向に展開でもしない限り、集落の占める範囲は狭くなることが見込まれる。今次発掘調査区北側では宅地と若干の耕作地があるのみで、河道の移動があったとしても集落可営地は少ない。また調査区西半分では中世～近世の旧河道（201NR上層）によって集落域の一部が滅失しており、最大でも現河道まで緩斜面が得られるに過ぎない。一方調査区東側の道路を挟んだ宅地跡では、愛知県教育委員会が平成20年度に実施した試掘調査で黒色土層からなる斜面地形が検出されたのみであることから、こちらへもさほど広がっているとは考えにくい。以上のことから吉竹遺跡は、今次発掘調査区の範囲がほぼその集落（居住）域に相当しており、その外縁を含めても集落域は約800㎡に収まるものと考えられる。そして、今次発掘調査で検出された竪穴建物の数は08区250㎡に対し5棟であることから、およそ50㎡に1棟の割合と考えられ、想定集落域での竪穴建物数は最大でのべ16棟と見積もることができる。

建物の変遷 次に集落景観の変遷についてまとめる。まず各検出遺構を整理すると、045SI・047SI・071SI・09区203SIが弥生時代後期、046SIが古墳時代前期末（尾張地域の松戸式併行期）、015SIが時期不詳である。したがって集落の存続時期は概ね東三河地域の欠山式期（弥生時代末期～古時代初頭）の空白期間をはさんだ弥生時代後期と古墳時代前期であり、特に弥生時代後期に主体がある。さらにこれらの遺構から出土した土器を石座神社遺跡

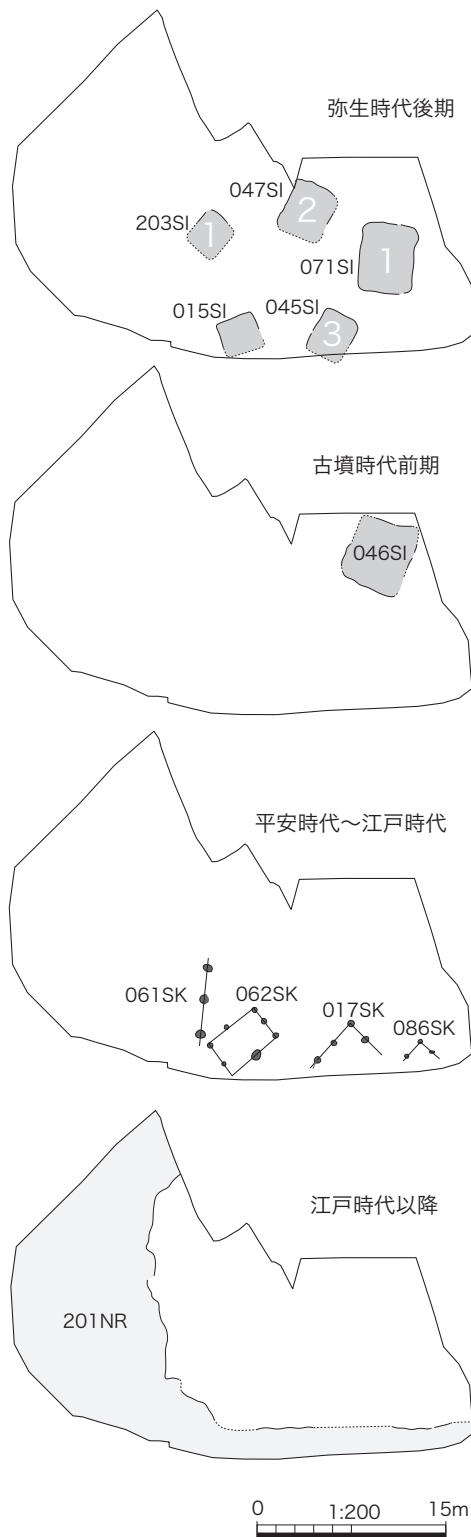


図36 吉竹遺跡における主要遺構の変遷

での土器編年〔愛知県埋蔵文化財センター2015a〕を参照して組列すると、071SI（石座1～2期）→047SI・203SI（同1～2期）→045SI（同4期）と変遷している。いずれの竪穴建物遺構も重複関係にはないので、全てが同時存在した可能性も否定できないが、土器型式の先後がみられる点を重視すると、ほぼ同時に存在したのは1～2棟にとどまり、前項で想定した集落の範囲とともにきわめて小規模なものであったといえる。

紡錘車と鉄斧 しかし最小規模の集落でありながら、その所持品には注目されるものがある。まず、08区047SIからは石製紡錘車と鉄鋤が出土している。前者は集落もしくは建物内で糸紡ぎが行われていたことを示している。一方後者は無茎の三角形式で当該期には一般的なタイプであり狩猟に用いたものであろうか。さらに09区旧河道201NRで出土した袋状鉄斧は、厳密には所属時期の特定できないものであるが、201NR出土土器のうち縄文時代と古代以降のものを除くと、前項までにみた集落の時期のものに限定される。したがって弥生時代後期もしくは古墳時代前期のいずれに属するかは確定できないものの、当該時期の集落における所持品であったとみることができよう。すなわちこのような小規模集落においても、鉄鋤とともに生業のために必要な鉄製品が存在していたわけで、弥生～古墳時代における鉄製品の供給状況を想起すれば、当該集落が周囲から隔絶して経営されていたとは考えにくい。この点については、地域における集落遺跡の様相と比較検討していく必要がある。

中世集落の状況 吉竹遺跡では、古墳時代中～後期や奈良時代に相当する遺構と遺物は認められなかった。古墳時代前期に後続するのは平安時代後期の灰釉陶器であり、旧河道や包含層中からの散漫な出土の印象であるが、山茶碗や土師器甕などの存在から再び集落地となるのは中世にかけてのことと考えられる。おそらく08区で想定された1基の掘立柱列や3棟の建物は中世以降に属するであろう。柱穴とみられる小土坑は調査区南半部を中心に検出されており、弥生時代後期の集落に比べてより川寄りの低位にその範囲があったのかもしれない。しかしながらそこは、遺物の大半が近世後半の陶器とともに旧河道201NR上層やその検出面から出土していることからわかるように、洪水を受ける可能性が高まる場所でもあった。

第2節 考古遺物からみた牛倉地区

吉竹遺跡と牛倉地区の考古遺物 吉竹遺跡は民家庭先という立地でもあったため、発掘調査以前から遺物が採集されている。また今次発掘調査期間中に、吉竹遺跡周辺で採集された遺物やその情報の提供も受けた。本節ではこれら考古遺物を紹介し、牛倉地区の歴史の変遷について述べておきたい。

考古遺物は、採集時期や地点などにより4つの単位に区分される。

【A: 図37-1～11】調査中に提供を受けた考古遺物20点である。吉竹遺跡から大宮川を下った県道との交差点付近の耕作地などで採集されたものという。当該地点は標高87mの水田となっており、石座神社の西方約200mに相当する。中世陶器が主体で、3～9は山茶碗類の碗、10は同類の小皿、11は渥美産とみられる壺、12は鉢である。時期は12～13世紀代である。それ以外では若干の土師器類がある。1は高杯で、浅い杯部の内外面に精緻な縦ミガキがあり、古墳時代前期とみられる。

【B: 図37-12～14】これも調査中に提供を受けた考古遺物3点である。今次発掘調査地点周辺の吉竹地内で採集されたものである。ただ詳細な地点や採集時期は明らかでない。いずれも磨製石斧である。石材は12が変玄武岩、13が塩基性岩、14が変玄武岩である。時期は弥生時代と考えられる。

【C: 図37-15】吉竹遺跡出土の土師器高杯である。採集位置は、今次発掘調査地点に相当する。吉竹遺跡の存在が認知される契機となった資料でもある。残存状況は良くほぼ完形に近い状態で出土したとみられる。ハの字形の脚部はやや短く施文は全くない。杯部は立ち上がり有稜となり緩く内湾しながら

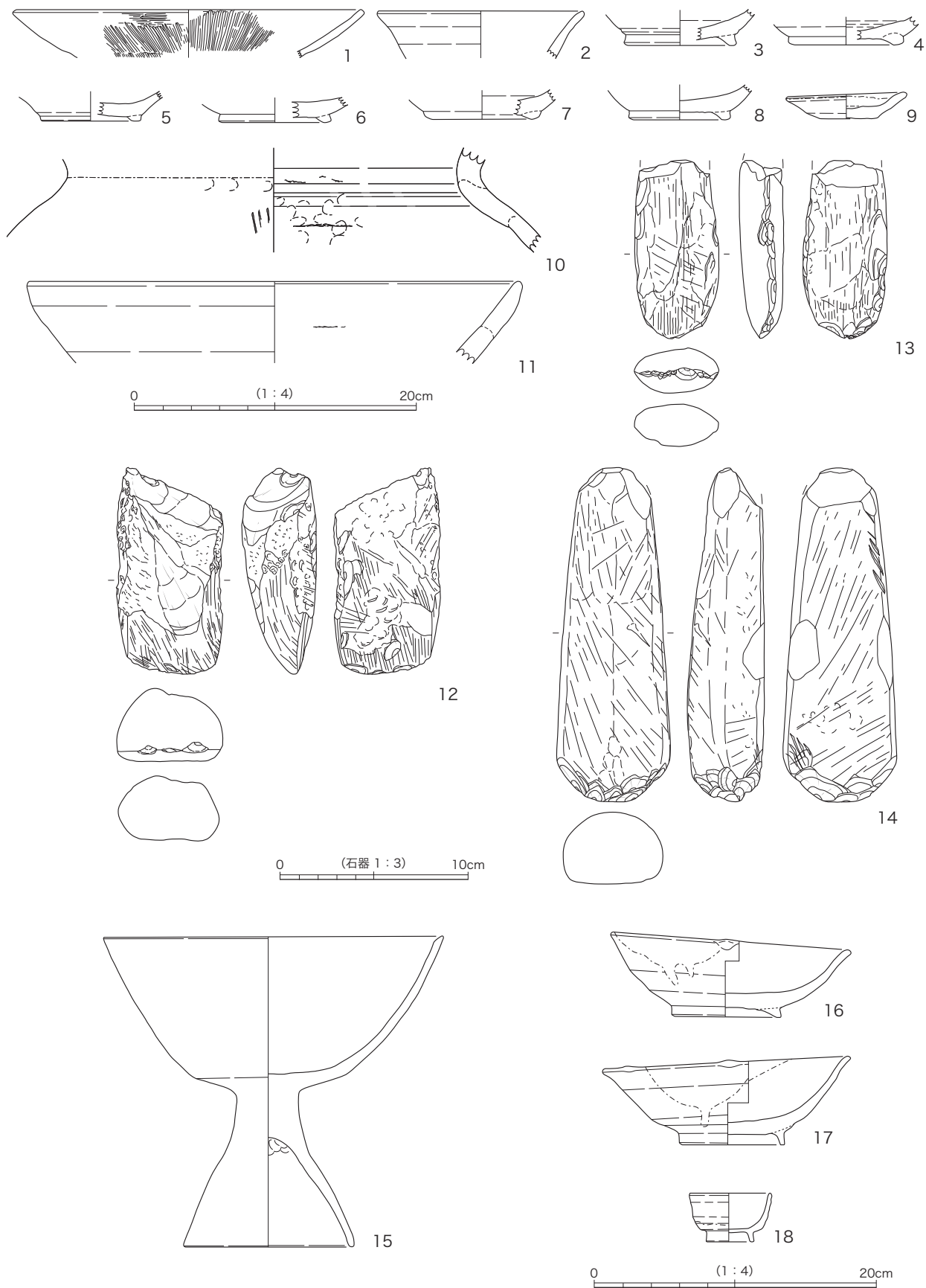


図 37 新城市牛倉地区の出土遺物実測図

ら口縁部へ至り、その端は斜めに面取りしている。これらの特徴は石座神社遺跡4期（寄道式～欠山式古段階）に相当し、今次発掘調査の045SI出土土器に近い。新城市教育委員会所蔵。

【D：図37-16～18】牛倉地区の最奥部の民家の垣根付近で採集された考古遺物である。出土時期がごく最近ということもあって信頼性は高く、出土地点に遺跡を想定して検討する必要がある。完形の山茶碗2点と近世陶器の小型丸碗1点である。山茶碗はともに濃い自然釉がかかった輪花碗で、17がやや高い高台をもち古い印象を受ける。個人蔵。

北下遺跡 吉竹遺跡から大宮川を挟んだ南方の標高100m前後の丘陵端部には弥生時代と中世に主体のある北下遺跡がある〔新城市教育委員会1997〕。範囲確認調査では、遺跡北部（G1・G7トレンチ）では地山が検出され弥生時代後期と推定される甕や高杯が出土している。一方G23トレンチ付近で実施された本調査では、旧河道とされる溝状遺構が検出された程度であるが、須恵器・山茶碗・土師器内耳鍋が多数出土している。本調査の対象地では地山が検出されておらず、おそらく谷が埋積したものと考えられ、遺跡北部とは様相が異なっている。このことから遺跡の中で弥生時代にかかる範囲は、遺跡北部に限定されるとみられるが、そこは大宮川対岸の吉竹遺跡と向き合う場所でもあり、一体の集落であった可能性もあろう。

異なっている。このことから遺跡の中で弥生時代にかかる範囲は、遺跡北部に限定されるとみられるが、そこは大宮川対岸の吉竹遺跡と向き合う場所でもあり、一体の集落であった可能性もあろう。

牛倉の谷における定住の過程 以上にみた考古遺物群や発掘調査成果を合わせて概観すると、牛倉地区では、弥生時代後期から古墳時代前期と中世にその主体があることに気づく。またその分布傾向は、弥生・古墳時代のものは吉竹遺跡や北下遺跡北部などの谷の入口に限定的であるのに対し、中世の山茶碗は谷奥部にも存在している。このことから、牛倉地区では縄文時代までの遊動的な居住の後、弥生時代後期に谷口付近での定住が開始されるが、谷奥部までの開拓は平安時代後期から鎌倉時代と想定される。中世前期に本格的な定住が進行する状況は、茶白山西南麓における柿下遺跡の報告書で考察したように、付近一帯が荘園（設楽荘）になったことに深く関わるとみられ〔愛知埋文埋文セ2012〕、一気に谷奥部までの開拓を押し進めたのであろう。

これに対し、弥生時代後期の定住は、小河川（大宮川）を基軸としながら高燥な台地上に居住地を求める形態であったと考えられる。ただし生業の中心である農耕は台地下の低地で行ったと推定され、相互の距離を保つと吉竹遺跡のような立地になるのであろう。それは結果的に当該時期集落の分布【図5】でもうかがえるように、標高90～100mの丘陵裾部に偏在することになったと思われる。

（付載）牛倉の小祠 本節の末尾に、牛倉地区で祀られている石製小祠について紹介しておきたい。新城市をはじめとする東三河地域では、屋敷の一角や神社の一隅で石製小祠を祭祀している事例をよく見かける。屋敷内で祀られているときはその住人の祖先であると教示される場合もあるが、神仏名など祭祀の対象が記銘されていることも多い。またそれに造立年や造立者が併記されていることもある。ただし小祠は、規模や材質などの点から移動や後世の改変などを跡づけることが難しいこともあって、歴史資料としてみられることは少ない。

牛倉地区においては、吉竹遺跡から大宮川を渡った茶白山の北麓に、7基の石製小祠が祀られている。

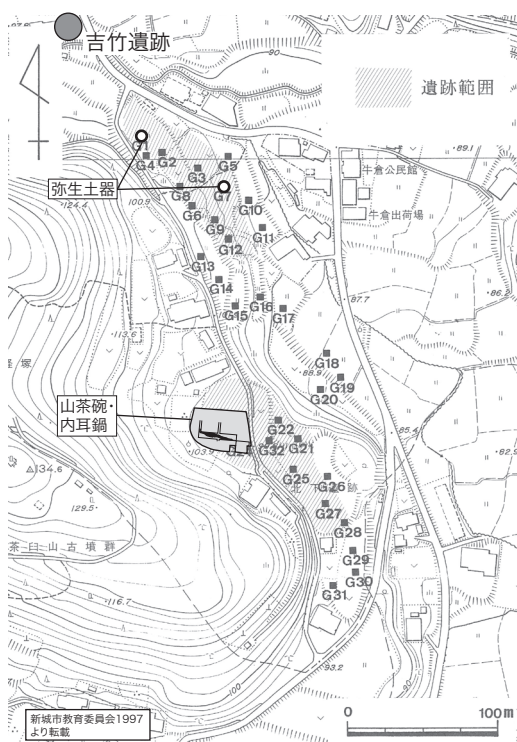


図38 北下遺跡の範囲確認調査地点

筆者（永井）は平成20年度にこれらを実見したが、略図【図39】に示したように屋根にむくり（起り）のあるものとそり（反り）のあるものに二分される。興味深い点は前者が16世紀末～17世紀初頭の年号が記され、後者は1点のみであるが19世紀の年号である。ただし天正3年「白山祠」のむくりは若干にとどまり、「多賀祠」「津島井頭天王祠」ほど顕著ではない。もとよりこれらが記銘された年号に造立されたという確証や聞き取りは得ていないが、特に当該地域においては、こういった小祠の記録もとっていくことが必要であろう。

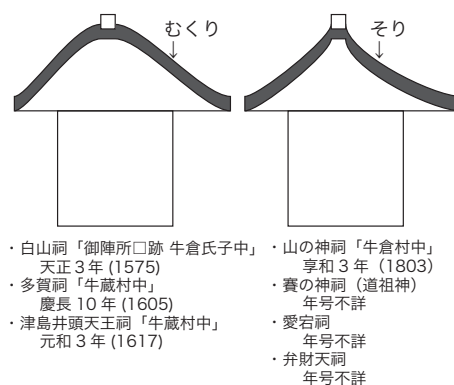


図39 新城市牛倉地区の石製小祠模式図

第3節 総括

吉竹遺跡における平成20・21年度の発掘調査は、調査面積が600㎡にすぎなかったが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての台地上に立地する集落の変遷を記録し、生業に関わるいくつかの資料を得ることができた。それは調査対象地が集落の中心地に相当したことも大きい。集落そのものが約800㎡に収まる小規模なものであったことも関係している。しかしながらこの規模の集落であっても、鉄斧や鉄鏃といった鉄製品を所有していた事実はひじょうに重要である。この点については先述したように【本章第1節】、周辺の当該期集落との比較検討が必要であり、それを経てあらためて遺跡に対する評価がなされることを課題としたい。おそらくそれは、日本列島の各地で1～3世紀に展開した数々の地域社会の一例になるはずで、その意味で遺跡あるいは遺跡の記録は幾度も見直され活用されていくことを期待するものである。

（永井邦仁）

【文献一覧】

- 愛甲昇寛 2004 『慶長以前鰐口・雲版年表稿 付鰐口鋳物師一覧 朝鮮鼓』真言史学会
- 愛知県埋蔵文化財センター 2001 『川原遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2012 『柿下遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第176集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2014 『須長10号墳』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第184集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2015a 『石座神社遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第189集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2015b 『加原遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第194集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2015c 『石岸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第195集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2015d 『モリ下遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第196集
- 坪井良平・伊東富太郎 1958 「伊那に残る三河の古鐘」『伊那』第366号（のち坪井良平1991『梵鐘の研究』に所収）
- 新城市教育委員会 1986 『南貝津遺跡』
- 新城市教育委員会 1996 『楠遺跡』
- 新城市教育委員会 1997 『北下遺跡』
- 新城市教育委員会 1999 『上ノ川遺跡』
- 新城市教育委員会 2012 『石座神社遺跡』
- 古瀬清秀 1991 「農工具」『古墳時代の研究 第8巻 古墳Ⅱ 副葬品』雄山閣
- 村上恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店

吉竹遺跡

遺構写真 写真図版 01 ～ 10

遺物写真 写真図版 11 ～ 15



平成 20 年、吉竹遺跡 08 調査区全景。西からみる。竪穴建物遺構と調査区両脇に建つ現代の住宅を比較すれば、生活様式の違いが歴然としているのに気づく。東方に遠望する台形の小高い森は石座神社遺跡。ここでは古墳時代初頭の建物が多数検出された。



平成20年(2008)5月の吉竹遺跡発掘調査前状況。北東からみる。当該年度の調査区は草地となっているが、耕作地として2段の平場に造成されている。その南側(民家のある地点)はさらに一段低くなっており、その先に谷底を削って大宮川が流れている。



08区の遺構検出状況。東からみる。ただしこの段階では、竪穴建物071SIの下部などが明確化できていない。上段平場での竪穴建物(046SI・071SI)の検出状況や調査区南端の旧河道に伴う傾斜地形(016SX)から推察すると、全体に緩斜面であったことがわかる。



同、検出状況。西からみる。傾斜地形016SXと竪穴建物045SIの関係もこの段階では保留としている。このようにしてみると竪穴建物(015SI・045SI)が016SXを切り込んでいるようにみえており、当該地点では旧河道の016SX相当堆積が進んだ後に竪穴建物が構築されたと考えの方が妥当であるといえる。



08 区調査区全景。東からみる。背景は牛倉地区の谷。



08 調査区全景。上方からみる。西側（写真右上部）は旧河道に近いため、巨礫が多数みられる。



(左) 08 調査区竪穴建物 015SI 底面遺構検出状況。この遺構は検出時ですでに床面までが削平された状態といってよく、その後、地山掘り方まで調査したもの、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。



08 調査区竪穴建物 045SI の検出状況。北西から。以下、調査過程のシークエンス。



同遺構の掘削作業。土層ベルトを設定し、底面を追求しながら壁面へと掘削を進める。出土した遺物は青いカゴへ収納。



045SI 土層ベルトの断面観察。黒褐色土層は底面までほぼ均一のようである。ただし壁溝堆積は若干異なる。



同ベルト除去後底面（建物床面）での遺構検出状況。中央のややくずれた正方形の土坑が炉とみられる。主柱穴に相当するピットはなさそうである。



(上) 08 調査区竪穴建物 047SI。遺物・礫出土状況。東から。埋没後に掘り返され、土器片とともに多数の礫が廃棄されている。左手前にみえる高杯の脚部などはその際に入り込んだものである。

(左) 同土層ベルトの断面。南東から。東西方向の土層ベルトで掘り返しのラインが明瞭にあらわれている。それは 047SI の掘方底面（ほぼ床面と考えられる）の地山まで達している。



047SI 床面での遺構検出状況。東から。2 か所の土坑に北側の壁溝がみえる。中央の土坑は炉の可能性はあるが顕著な焼土や炭化物はない。南東隅のものは貯蔵穴か。



047SI 完掘状況。東から。中央土坑の脇で石製紡錘車が出土している。



(左) 08 調査区竪穴建物 046SI 完掘状況。北東からみる。中央部に深い攪乱坑があって北西隅も削平されているため、遺構の残存状態は良くない。それでも東・北辺で壁溝が検出でき、古墳時代前期の土師器が出土している。吉竹遺跡の竪穴建物の中で最も時期が新しい。



竪穴建物 071SI の遺物出土状況。西から。まだ北壁付近 (093SX) は調査前。一部に礫が集中する箇所がある。



071SI の遺物を取り上げた状態。南から。埋土上から掘り込まれた遺構がまだ残っている時点である。



071SI 北西隅 (093SX) の遺物出土状況。南から。土器は比較的細片になっているものが多い。



071SI 北西隅部 (093SX) の完掘状況。南から。土層ベルト東側の壁際に黒色の炭化した草本類の集積がみえる。



08 調査区竪穴建物 071SI 完掘状況。南西から。床面と全周する壁溝を露出させた状態である。黒ずんだ部分は貼床である。また、北西と南東隅にやや大きな土坑がみられるが、これらは貯蔵穴ではなく、この後検出された主柱の抜き取り穴に相当するものと考えられる。中央土坑は炉跡。深く切り立つ北壁の圧迫感がある。



竪穴建物 071SI 完掘状況。北からみる。右手奥には竪穴建物 045SI がみえる。



071SI 北壁付近で出土した草本類の炭化物集積。簾のように並列している。この草本類の樹種同定の結果、イネ科植物であることが判明した。屋根葺材もしくは壁の一部とみられる。



竪穴建物 071SI 南壁近くの 038SK の遺物 (E-33) の出土状況。038SK は 071SI 埋土を掘り込むビットだが、E-33 の杯部は 071SI 内から出土しており原位置はこちらに属する。



(左) 竪穴建物 071SI の掘り方完掘状況。南からみる。床面で検出した支柱穴4つと、中央からややずれた位置に炉がある。竪穴建物施工時はまずこの状態まで掘り下げて、柱を立て、貼床で床面を平らに仕上げる。壁溝は貼床後につくられるためこの時点ではほとんどみえない。



(左) 吉竹遺跡 09 調査区土坑 202SK の土層断面。南からみる。09 調査区では旧河道がその大半を占めていたため、顕著な遺構は少なかった。そのなかでも比較的深い土坑である。



09 調査区、竪穴建物 047SI 検出状況。北西からみる。08 調査区 047SI の西壁に相当する。わずかな範囲にとどまったものの建物の規模が確定できた意義は大きい。



同 047SI 完掘状況。南から。若干の遺物が出土している。



同 047SI 土層断面。黒褐色シルト層の下部に風化した地山黄褐色シルト主体の貼床層がある。



09 調査区竪穴建物 203SI 検出状況。東からみる。黒褐色土主体であるが、灰褐色土がブロック状に混入する。



09 調査区 203SI 土層断面。壁面は、047SI に対して緩い立ち上がりである。



203SI 完掘状況。南東からみる。壁溝は浅い凹みで目立たない。



09 調査区旧河道 201NR 土層断面(セクション C)。南からみる。 09 調査区旧河道 201NR 土層断面 (セクション B)。北西から。



09 調査区旧河道 201NR 土層断面(セクション A)。西からみる。黒褐色土の堆積(中層)上に河川堆積による粗粒砂層(上層)がみえる。



09 調査区完掘状態全景。南からみる。



吉竹遺跡 09 調査区遠景。北上空からみる。調査区内で検出された旧河道が屈曲部として永らく遺跡周辺の地形をつくっていたことがわかる。



吉竹遺跡 09 調査区遠景。西上空からみる。遺跡は大宮川をつくる谷の入口に立地する。東方約 300m の丘陵上には弥生・古墳時代の大集落が確認された石座神社遺跡がある。



(1)08区 071SI 出土遺物

弥生時代後期の竪穴建物跡から出土した土器群である。遺構は、今次発掘調査のなかで最大規模である。

建物規模に対して土器の点数は多くないが、外反する口縁の高杯2点が注目される。左のもの(32)はほぼ全形復元が可能で、興味深い点は、杯部内面の口縁に沿って煤の付着がみられる点である。底面には全くないことから、液体状の燃料材に着火することでこのような煤の付き方をするものと考えられる。

摺石は花崗岩で、摺面に赤いベンガラが付着している。



(2)08区 047S 出土遺物

弥生時代末期から古墳時代初頭の竪穴建物跡から出土した土器群である。

建物遺構は埋土が深さ20cm以上あり良好であったのに対し、土器の残存状況は比較的小片が多い。廃絶後の埋没過程で混入した可能性もある。

比較的大破片の甕は口縁に連続文があり台付きとなろう。全体に煤が付着している。

一方、石製紡錘車は床面直情から出土しており、当該建物に直接関わるものと考えられる。また小型の打製石斧は変玄武岩製で青灰色が目立つ。



(1)08区 046SI 出土遺物

古墳時代前期の竪穴建物遺構から出土した土器群である。壺は、弥生土器にみられる口縁部や肩部の加飾がなくなり、ナデやミガキ調整で仕上げるのが主流となる。

右奥の大きな甕は、炉で使用されたものとみられ、焰の先がなめたであろう胴部下半を中心に煤の付着がある。ただし底部近くは煤が全くない。

甕2点や壺は状態からみて相伴関係にあると考えられる。手前の高杯などは小片でしかないが、杯部が屈曲し大きく開く形状のものであり、時期の特徴をよく示している。







51



52



53



56



57



57 内面



60



63



66



67



31



77



81

82

83



86

87

88



89

90

91



71



80



84



S-6



S-7



85



(下) 新城市富永に所在する野辺神社周辺で採集されたものである。
石材は安山岩である。



ふりがな		よしたけいせき						
書 名		吉竹遺跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第191集						
編著者名		永井邦仁、鬼頭剛、堀木真美子、早野浩二、(株)パレオ・ラボ年代測定分析チーム、小林克也						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161						
発行年月日		西暦 2015年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
よしたけいせき 吉竹遺跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 うしくらあぎよしたけ 牛倉字吉竹	23207	760284	34度 55分 37秒	137度 30分 54秒	2008.5.7～ 2008.6.18、 2009.6.18～ 2009.7.22	600㎡	第二東海 自動車道 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉竹遺跡	集落	弥生時代 後期 ～ 古墳時代 前期	掘立柱建物跡、 堅穴建物、 土坑、 旧河道	土師器(高杯・甕・壺)、 石製紡錘車、 鉄斧、鉄鏃、 打製石斧、磨製石斧、 縄文土器		弥生時代後期から 古墳時代前期の 集落遺跡		
文書番号		発掘届出(19埋セ第122号・2008.3.26) 通知(20教生第205号・2008.4.23) 終了届・保管証・発見届(20埋セ第31号・2008.6.24) 鑑定通知(20教生第947号・2008.7.14) 発掘届出(21埋セ第9号・2009.4.1) 通知(21教生第141号・2009.4.15) 終了届・保管証・発見届(21埋セ第42号・2009.7.24) 鑑定通知(21教生第1097号・2009.8.19)						
要約	当該遺跡は、豊川支流の大宮川が雁峰山地から流出する谷地形の入口に立地している。発掘調査では、堅穴建物5棟、掘立柱建物4棟が検出された。堅穴建物跡からは弥生土器・土師器が出土した他、弥生時代後期の堅穴建物跡からは石製紡錘車と鉄鏃が出土した。集落の一部は後世の洪水によって滅失しており、その旧河道下層からは同時代と推測される袋状鉄斧が出土している。 集落規模は丘陵・台地の端部を占める約800㎡に収まる小さなもので、かつ、その存続時期は弥生時代末期～古墳時代初頭の空白期を挟む、断続的なものである。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 191 集

吉竹遺跡

2015 年 3 月 31 日

編集・発行 公益財団法人 愛知県教育・
スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社

